

を親朝にあたへ其身出陣叶かたくは息男一族等のうちにも命に應すへし又石川田村か  
 一黨へ兼て仰下されし事ありといへとも猶親朝か許よりも申含め候へとなりそのうへ京  
 都の擾亂の折なれぬ兵を東國に下す事能はず藤井出羽守宗秀はさきに小山へ遣はされ宮  
 方を催されぬかれ是につきて結城か後詰ある程ならばせめてもと行すをたのみ居給ひ  
 ける結城氏古文書〇結城氏古文書に當時京師擾亂の事あるよしと云  
 ける結城氏古文書〇他書に見る處なしいかなる事跡ありけるにや  
 當年大館氏清其母ともにも京より伊勢にいたり國司の御許に身をよせまいらすこの氏清  
 の左馬助氏明の二子なりはしめ元弘の亂にあたり氏明の伊勢に忍ひ居たりけるか内裏の  
 女房此比の亂により當國に來り給ひしを相具し氏清を設くといふ女房の則源敦光朝臣の  
 女ともまたあるひは北畠親房卿の女なりとも聞えし關岡家始末〇氏清か後胤伊勢國にありて關岡を  
 稱す其裔彼國にこゝまり永祿天正の頃まで連絡  
 せり事は彼全  
 書に詳なり

後村上院吉野郡金峯山と  
以て皇居とす

興國五年甲申

北朝康永三年

正月小 十三日 去年より尊氏兄弟石堂入道をして結城親朝を招くといへともさすか父道  
 忠の遺命をやれもひけん疑惑して志を決せずとかくの返答もなかりける所に此春になり  
 終に宮方を叛き尊氏にたかひけれぬ高師冬羽檄を東國につたへ志をよする者あらはい

そき誘たし其姓名を注進すへきよしを觸たりける結城氏  
古文書

廿六日 刑部大輔秀仲朝臣結城親朝か許へ新年の賀をのへ且凶徒關大寶兩城の間に陣す  
 る故に宮方の通路容易ならず伊佐眞壁中郡西明寺案するにこの城々は下野常  
 陸奥にある所なるへし等も今のはや困窮  
 に及びぬされは此儘にて月日を過さはまた小田城の如く異心のもの出來ん事はかりかた  
 しはやく此時を失はず軍兵を發すへきむね又書をあたへらる結城氏  
古文書

二月大 朔日 足利尊氏鳩峰の八幡宮に參詣す關大  
層

十五日 このとき北畠親房卿關城に居給ひける所結城か返逆すてに其聞ありけれぬ書を  
 親朝によせ給ふ其大略にいはいはく是と世に關城  
 書といへり去年六月高師冬當國に襲ひ來りしのうち小田治  
 久忽ち敵に降參するにより彼城を引退て關城にうつりぬそのうち度々援助の事を請ふと  
 いへとも九ヶ月からうち一人の援兵ありしをきかす此故に御方の困窮こゝにせまりぬ今  
 はや六ヶ所の城のみつゝかなし關城は宗祐日夜にはしり廻りて堅確なり自餘にいたりて  
 の反覆の程はかりかたしなかに凶徒等當城を圍か故に夜にまされ一兩人の通路あるよ  
 り外いたへて兵糧の道をたてり下妻城の人情和せずして行する覺束なしたゝ宮顯時朝臣  
 かの城内に居給ふを以てたのみとす中郡の城には顯時朝臣の手勢こもりけるまてにて兵  
 糧さへ乏しときけり眞壁城の法超一人義を存して守衛すといへとも郎從多く敵に志をよ  
 するよしを聞及ひぬ西明寺城の如きは遠くして音信希也たゝ伊佐城に行朝朝臣忠心を撓  
 ます籠城し給ふのみ堅固なりとたのみれもへりつたえきく承平の將門は六年にして亡ひ



永承の貞任の九年にして潰ゆ今東國の凶徒没落の時節いたらざる所なるへしあかしなから尊氏か君臣の體を見るに家臣師直奢修法に過て怨を含む者多し一旦害をのかれん爲降參なすといへとも心にこゝろよからんやことに足下の父故上野入道ふかく忠貞を存して死に臨める際にいたりても凶徒退治の事のみを申されしとき彼是をおもひめぐらし眞實に志を忠孝の二つに存し給ふとならば勢をのこして城を守らせみつから發向し給へかしまかる時の伊達以西の宮方など同心なかるへきやむかしより今にいたるまで國家を傾んとはかる者亡ふるの當然の理なり尊氏か所行前代未聞にして榮花七ヶ年に及ひたり何そかくは幸の多きや頃日遊説の者ありて或は城を守りて時勢を見るへしといひ又戰を好へからすといふされは諸國に於て忠を存する輩も坂東の形勢を伺ひ義旗を擧る事をさへためらふときく縦令東國一方節義を守るとものち諸方の凶徒一同に是を攻るにいたりなは歸順の者といふとも忽反覆せんまかるうへの諸國にて御方の様子を探るうちはやく旗をわけかれらか志をも勵し官軍の勇氣を諸國に奮いん事今にありと覺ゆるなりと書給ひし文理れのつから親朝か不義をはつかしめ給ひしかと臆病の心やつきたりけん宮方にも叛かす師冬か手にも加へらす左右にあたかひて月日を過しけり關城書○關城書に親房卿よの文書にして當時の事勢を見るへきものなり竊に按するに此文書とに丁寧を盡し急遽の際に書給ふへき體にあらす所を結城氏古文書數通に見る時は事跡と重出せる事ありしは中古かの結城氏古文書の事跡とあつめ事を親房卿の傳説に託してつくりけるものいまた決まらざりし

三月小 八日 さきに春日侍從顯邦朝臣甥右兵衛佐下野國大寶城合戰のとき生捕られ今日

凶徒等の爲に殺され給ふ常樂記○或寺の古記に顯國於常州被誅と見ゆ顯邦は顯國の事にして北畠の支族なるへきにや

十一日 下妻の城より明王院僧都を使となし親朝か後詰を催促し給ひもし當月中加勢なきに於ては御方難儀に及ふへしとなり結城氏古文書

十六日 足利尊氏の嫡男千壽王元服して義詮と名乗り正五位左馬頭に任す系圖

閏三月皇和通曆によれば二月に閏月とかけ小とあるす 廿三日 無品親王承胤大台坐主に補す天台座主記

四月小 當月源親房卿の女御從三位顯子を以て中宮とす園大曆○按するに北畠親房卿の女中宮とをふるさす南朝編年記畠山准后を引て中宮になり給ふは當月なるよしといへるに給ふ事は園大曆にみえたり顯子と稱せし事も准后傳の所見のみにて他に見る所なし又此とき瀧口左衛門尉平長重中宮小進になり權大納言源具光卿中宮大夫とかわるよし是を南朝編年記略にのせたりも詳ならず大日本史にこの顯子の事跡とのせざるものはのち不正の事ありしゆへ國惡と忌たるなるへし

五月大

六月小

七月大 十五日 東大寺八幡宮の神輿を京師に振り奉るよし其聞えあるにより武士とも是を防ぐ程に神輿を五條の橋にふり捨たり此時神人多く命を殞す此故を以て北朝の釋尊延

引に及ふ園大曆○畠山家譜に當月新田左兵衛佐義興朝臣武藏國に旗をあげ畠山伊豫守國兼か籠りたる香津山を攻戦ひ給ひし程に鎌倉勢打負て引返すといふ

九月大 朔日 日蝕園大曆

十六日 北方の上皇天龍寺に御幸ならせ給ふ足利直義御供に伺候す園大曆○按するに天龍寺へ北朝の上皇御幸ありしは明



年なり今彼寺に入らせ給ふは大禮を行はれて入らせ給ふにあらず  
假初に夢窓國師の禪室にわたらせ給ひ其教を聞し召されし成へし  
廿三日 足利直義北朝に於て從三位に昇る系圖

十月大

十一月大 十九日 春日の神木歸座園大曆○島山家譜に去る十月廿六日鎌倉勢武藏國府中に押寄て新田左兵衛佐義興朝臣を攻落すといふ

廿日 石清水の社鳴動なす同上

十二月小 廿二日 足利直義か三條坊門の館焼失す園大曆 島津氏古文書

後村上院 吉野郡金峯山と以て皇居とす

興國六年乙酉 北朝貞和元年

正月大 この比越中國の官方は桃井直常とたゝかひ和泉國の官軍は同國の守護都筑次郎と合戦に及ふといへども官軍みな利を失ひたり又美濃國に於て土岐か一族何某なるものひそかに志を官軍に通するよし聞えしかども時節あしかりしにや旗をわけす園大曆○南朝編年記畧に准后傳引

二月小 七日 北朝に於て大學頭行親強盜の爲に命を殞す園大曆○南方雜錄に此春の事なりし洞院

童あり好て相撲とせり後には常のものには勝うち物とも好たりしある時實世卿夜に入り參内し給ひしに彼二郎丸といふ召具せらるゑある木蔭より物とせりよき覺えて頭をつみたるもの刀を持てはせ出たり思ひよらぬ事なれば實世卿も逃給へば青侍さも逃うせぬ二郎丸少しもさばつす彼者を馬手の谷へなげ込けり實世卿はあたりちかき隆資卿の家になち寄り松明さもさせ十餘人召具し尋給ふに二郎丸氣色はふて立歸れりかのくせ者は頭と岩にくたかれて死たり

けるこそこの二郎丸のちに右馬允兼遠と名のり顯能卿の手に屬し八幡の軍に討死しけるこそ聞えし

廿二日 左兵衛督直義の館去年十二月焼失せし所造營事終りて今日かの新亭にうつる園大曆○按するに直義は尊氏か弟にして當時の權勢ならふ者なしあかるに其館焼失してのち土木の功自日に及ぼす落成しける事其世の質朴推て知るへし

當月從三位中將源宗治卿鎮西に於て逝去し給ふ公卿補任○按するに宗治卿の事跡他に考ふべき物なし若くは北朝を叛き懷具親王に従ひ彼地にありし人にや

三月大 七日 南都白乳の神社故なくして倒る園大曆

今年の春伊豆國三島社焼失し鎌倉鶴岡の神殿鳴動す同上

四月小 七日 大和國二見庄は二見兵部少輔か守護の地なりしを當年の兵糧料と定給ふ東園大

院古文書

十二日 延曆寺中堂の燈火故なくして消るにより北朝に於て是をトせらる園大

五月小

六月大

七月小 當月彗星東北に顯ゆる同上

三日 爰に又足利尊氏同直義兄弟の人々先帝の御惠みふかゝりし事をねもひ御追福の爲天龍寺を建立し土木の功既になりしかは來る八月北朝の上皇彼寺に御幸ありて供養を遂らるへしとまづ國々の大名を召され世々の例にまかせ其役を仰合さる山門この事を聞大衆憤れるよし其聞えあるにより三門跡是をまつめんかため御登山ありけれり若大衆とも御坊に押寄て不日に追下し奉る此のち三千の衆徒一同に會合し天龍寺へ御幸の事をと



められ勅願寺の號をやめ僧踈石を流罪に處せらるへしと書たりける奏狀をさへけ北朝に訴へたり諸卿僉議ありて異儀まち／＼なる中に坊城大納言經顯日野大納言資明のどにかく此事は武家に仰合さるへしと申されし程に是議に定りけり太平記  
四日 北朝に捧けし所の山門の奏狀を武家に下されしかは尊氏兄弟披見せられ是はそもなに事を寺を建僧を尊ふとて山門の所領をも妨けず衆徒の煩にもならずまかるにかく障礙をなさんとする條返す／＼も不思議なれ所詮神輿を振奉りなは兵を出して防くへしもし振棄奉りなは京中の山法師の土藏を黜し造替させんに何の痛か有へきた、山門の嗽訴は棄置るへしと申されし程に公家も其儀にまたかひ款狀を公庭に棄られしかは大衆の面目を失ひて歸山しけり太平記

十八日 天龍寺供養の時山門より神輿を振てさへ申さんと相はかる園大

廿日 寅刻はかり春日の神木歸座す春日若宮神殿守記○公卿補任に十九日さふるすものは京師より神木の歸座し給ふ日なるへし

廿三日 山門の嗽訴直義の意見によりて本意を失ひしかは大衆等衆議し未刻はかりに日吉聖眞子の神輿を山上にのほせ寅刻はかりまた八王寺十禪寺の神輿を登山し奉る園大

常樂記七歳に作る

八月大 朔日 足利尊氏の幼息聖王御前八歳にして卒す是により北朝の公事を廢せらるゝ事七日に及ぶ常樂記園大

七日 酉刻はかりなるに大宮二宮三宮客人四基の神輿を山上にのほせ奉る園大

十三日 山門の神輿入洛すと聞えて洛中甚物念なり園大

十四日 山門へ院宣を下され今度天龍寺供養の事の勅命にあらざるむねを仰らる太平記

十六日 山門の嗽訴本意を失ひしにより三社の神輿を中堂にあけ祇園北野の門戸を閉つ太平記

十七日 山門の安否此時にあり角ては猶も不叶とて劔白山豊原平泉寺書寫法華寺多武峰内山日光大平寺其外末寺末社三百七十餘箇所へ牒狀をつかりし今度の奏狀本意なかりし事を觸送る太平記

この日京師地震す皇年代畧記

十八日 今度山門の奏狀本意をうしなひける事を書えるし四ヶの大寺へ牒狀を贈るなかにも興福寺へは去る十四日院宣あり此たひ天龍寺供養の事の勅命にあらざるよし仰下さるゝによりまはらく靜謐をなす所に院宣表裏ありて供養の儀ことに嚴重なりと聞興福寺山門に同心あるに於てひ日吉の神輿入洛の日春日の神木神行あるへしとを申合せける此よしはやく北朝に達しけれひ公卿藤氏の人々僉議しいま南都北嶺の神木神輿同時に入洛あるに於ては武家何と申とも天下の大事にて候へしまけてまつ院宣を下し給ひ勅願の儀を停止せられ御結縁の爲に翌日御幸あるへきよし仰出されかして奏聞申されける太平記

廿二日 北朝に於て今度天龍寺供養の時御幸あるへきよしかねて嚴重の沙汰に及られしを山門さへ申すてに款狀を捧たりしかと尊氏等か申旨にまかせられかの嗽訴を許容なく供養の嚴重に御修行あるへきに治定ありけるまかるに北嶺より申むねを南都にて領掌



し同時に神木を振奉りなはいかゝあるへしとかく無爲に事濟なん事こそあかるへしと藤氏の人々の申さるゝ旨もまた一理なきにあらすとて其儀によられたりしかは山門も姑くまつまり警固の武士も心を安んしける園大曆太平記

廿九日 山門の鬱訴も静まりければ當日の武家の沙汰として供養を修し翌日御幸あるへしと定めりけりされい今日彼供養として尊氏兄弟路次の行粧をとゝのへ天龍寺に參詣す一番は侍所山名伊豆守時氏五百餘騎次に隨兵の先陣武田伊豆前司信氏異本に信武系圖には氏信に作る小笠原兵庫助政長大友戸次丹波守頼時伊東大和八郎左衛門尉祐熙異本に雅照に作り又あるひは伊東の字なくして祐直とす土屋備前守範遠東中務丞常顯佐々木四郎左衛門尉秀定同近江四郎左衛門尉氏綱異本に六角泰綱太平出羽守義尙粟飯原下總守清胤吉良上總三郎滿貞高刑部大輔師兼以上十二人三番に帶刀にて武田伊豆四郎小笠原七郎同又三郎佐竹刑部丞佐々木信濃五郎小笠原十郎次郎三浦駿河次郎左衛門尉同越中次郎左衛門尉二階堂美作次郎左衛門尉高行同對馬四郎左衛門尉佐々木佐渡五郎左衛門尉同佐渡四郎海老名尾張六郎平賀四郎逸見八郎小笠原太郎次郎以上十六人其次に正二位大納言尊氏八葉の車にて衣冠なり五番に設樂五郎兵衛尉同六郎寺岡兵衛五郎同次郎逸見又三郎同源太小笠原藏人秋山新藏人光政佐々木出羽四郎左衛門尉同近江次郎左衛門尉富永四郎左衛門尉宇佐美三河守清久左衛門次郎森長門四郎曾我左衛門尉伊勢勘ヶ由左衛門尉以上十六人衣冠帶劔前のとくにうつ次に參議正三位兼行左兵衛督直義卷纓老懸に蒔繪の細太刀帶し是も八葉の車なり七番に南部遠江守宗繼高播磨守師冬

長井大膳大夫廣秀同治部少輔時春佐々木吉田源左衛門尉秀長同加地筑前三郎左衛門貞信和田越前守宣茂千秋參河左衛門太夫惟範この八人の役人のへ布衣に上括りをなす八番に高武藏守師直上杉彈正少弼朝貞高越後守師泰上杉伊豆守重能大高伊豫守重成上杉左馬助朝房裝束前とし九番に後陣の隨兵足利尾張左近太夫將監氏頼千葉新助氏胤二階堂美作守行通同山城三郎左衛門尉行光佐竹掃部介師義同和泉守義長武田甲斐前司盛信伴野出羽守長房三浦遠江守行連土肥美濃權守高實異本或は高直に作りまた高直ともあるす以上十人甲冑なり十番は外様の大名直垂にて相從ふ其人々に土佐四郎長井修理亮同丹波左衛門太夫攝津左近藏人城丹波守水谷刑部少輔二階堂安藝守同山城守中條備前守園田美作權守町野加賀守佐々木豊前次郎左衛門尉顯清結城太田三郎梶原河内守大内民部大輔佐々木能登前司大平六郎左衛門尉狩野下野三郎左衛門尉里見藏人義宗島津下野守武田兵庫助同八郎安肥前守土屋三河守小幡右衛門尉疋田三郎左衛門尉寺岡九郎左衛門尉田中下總三郎須賀左衛門尉赤松美作權守同次郎左衛門尉寺尾新藏人等都て三十二人うちこみに次第を守りてうつたりける此のちの吉良澁川畠山仁木細川を始とし宗徒の氏族外様の大名ねもひくに出たりけるつ程に大宮より西郊まで袖をつらねてさへたり既に山門まで參列する時佐々木佐渡判官秀綱檢非違使にて三百餘人の若黨を召具し山門を警固なす尊氏直義やかて參堂ありしかは勅使藤中納言資明院司高右衛門佐泰成陣列し即法會を行われ其日の無爲に暮にけり抑今日供養にあつかりし僧に開山夢窓國師南禪寺長老知明建仁寺長老友梅東福寺長老



一輩萬壽寺長老友松真如寺長老良元安國寺長老至孝臨川寺長老志玄崇福寺長老慧聰清見寺長老知琢本寺の首座上昭(眼)御願文の草は前藤少納言有範清書は前宮内卿行尹とを聞之ける  
太平記并に異本園大曆二階堂道本記等諸本を合考するに大同小異あり今こまかく是を擧す其大畧のみを分注す  
 晦日 今日御結縁の爲に花園光嚴の兩上皇靈龜山天龍寺に御幸なるきのふに事替りての見物なり貴賤男女巷に足を立かねてこの御行粧を見奉る去程に御車總門に至りしかは牛をは逐はなし手引なり上皇は御簾をわけられ見物の貴賤を窺覽ある公卿には竹林院大納言公重左宰相中將忠季殿上人には左中將宗雅左中辨宗光右少將教貞春宮權大進時光下北面には中原季教源康定同康兼藤原親有安部親氏豊原泰長御隨身には秦久文同久幸供奉に列す參會の公卿には三條帥公秀鎌倉大納言尊氏勤修寺大納言經顯日野中納言資明別當四條中納言隆蔭春宮大夫實夏左兵衛督直義いづれも裝束美麗を盡して廊の北面より御棧鋪に通へり回廓の棧鋪の板敷にこしらへ御簾をかけ佛殿の北廊四ヶ間を御所とす東端の御簾際に床を立其上に大文疊二帖をまき其上にまた氈を敷たり其西間には屏風をたて御休らひ所とす東西行の廊四ヶ間東の柱の邊に屏風をたて、境とせり奥の端にの疊を敷賢俊僧正武家の旨を得風流の鳥形一を居をかれ感興を添らる武家の棧鋪は南廊にありて佛殿のうち二ヶ間御簾をかけて聽聞所を設く其北六帖の疊は公卿の座と定む堂の東西に御簾をかけ佐々木秀綱の山門の北腋に候す此とき既に午の時にそ及びける堂中の儀はしむる比御聽聞にわたらせ給ふ諸院の僧山門より堂の正面に入て座につけは黒衣を着せ

し僧五人南方に座す次に導師夢窓國師山門より歩す執蓋執綱は武家の輩なりかくて俗人堂中に入れの御願文をよみはしむ時刻になれば舞樂を奏する事數曲にして時に國師一瓣の香を拈して今上皇帝聖躬萬歳と祝し終れ御布施の役飛鳥井新中納言雅孝大藏卿雅仲一條二位實豐持明院三位家藤難波中將宗有二位中將資將難波中將宗清紙屋川中將教季持明院少將基秀姊小路侍從基實(顯)二條少將雅冬持明院前美作守盛政千秋駿河左衛門大夫星野刑部少輔佐脇左近大夫等々の、其事をつとむ御布施は金銀珠玉より綾羅錦繡はさて置ぬ和漢のうちに見も聞も及はさりし珍寶を持つらね山の如くに積あけたり程なく日も暮にいたりければ蠟燭をすゝめ御破子御酒を供し奉る上皇をはしめいづれも是をさこしめし其のちに足利尊氏兄弟の人々に御對面ありやかて還幸を催さるすへてこの兩日の儀式其壯麗前代未聞の事と見えたりける太平記并異本園大曆公秀記等と合考して記す  
 この比三宅三郎高德は伊豫國に在けるか義助朝臣病死し給ひしのち又本國備前に立歸り兒島に忍ひて月日を過しいかにもして本意を達せはやとれもひ居たりける折ふし上野國に居給ふ新田左兵衛佐義治朝臣をむかへ是を大將となし旗を擧んと諸國の風聞を探る處に丹波國の住人荻野彦六朝忠か尊氏を恨むる子細あるよしをさゝ高德使を遣して招く程に朝忠同心すさらは日を定て打立んとなしけるうち事忽ちに漏けるゆへ山名時氏三千餘騎にて朝忠か高山寺の城に押よせ麓を圍み食攻になすにより朝忠力盡て降人に出るそのうち備前備中備後等に命し討手の勢五千餘騎備前國に向ふ由披露す高德是をさゝ爰にて



は本意をとくる程の合戦叶ふましと大將義治朝臣を引具し海上よりひそかに京に上り官兵千餘人こゝかしこに忍び明日こそ足利兄弟高上杉の館に夜討すへしと合圖を定めたりいかゞして漏たりけん時の所司代都筑山城守入道宥俊二百餘騎を率し夜討の手引せんと究竟の忍の者ともか隠れ居たる四條壬生の宿にまた夜も明さる程に押寄たり元よりこゝに居けるものゝ死生不知の者なるゆへ散々に相たゝかひみな討死をそ遂にける是をきゝ所々に隠れ居たるものとも皆ちりゝゝになりしかは高德も詮方なく新田殿とゝもに又信濃の方にそ落行ける壬生の宿にて都筑にうたれたる忍の者のなかに武藏國の住人に香勾カウコウ新左衛門高遠たゝ一人地藏菩薩の命に代らせ給ひけるにや不思議の事とも多くして死をのかれけるそあやしけれ太平記〇島山家譜に紀伊國の官軍貴志御房丸和田喜六左衛門恩地七郎橋本小弁等所降参すこゝに又栗栖七郎國實といふもの己が所領を貴志が爲に押領せられし事といかり京に訴へ山名時氏申文を携てさり返さんとするも貴志山名が申文の旨にたはす猶所々に横行しけるゆへ島山國清再び兵を出し是を戦ふ此度も貴志うち負しゆへみな諸々の山中に忍ぶと云ふ

九月小

十月大 十二日 北朝の武士安富民部大夫行長といふもの日吉の夢想あり光明院の御製を日吉の使と覺しき大なる猿に賜ふ其うたに「たのむそよ日吉の神のますかゝみかけてのゝちは十方こもらむ園大

十一月大

廿一日 北朝に於て改元貞和に移る園大曆是院年代記

十二月大

後村上院

吉野郡金峯山と以て皇居とす

正平元年丙戌

北朝貞和二年

正月小 廿一日

東大寺八幡宮の神輿去々年の秋より入浴し給ひけるか今日歸座を促し奉

園大

二月大 十七日

持明院上皇天龍寺に御幸し給ふ臨幸私記

三月小

四月大 七日

結城親朝同顯朝父子愁狀を足利兄弟の許にさゝけて所領を全くわたへ賜ひ

るへきよしを請ふ結城氏古文書〇案するに當年二月結城氏の古文書等によるにさきに結城親朝石堂入道が招く事は聞えずこの故に尊氏により尊氏に降参せし事あり然れどもさすか父道忠が遺命を忘れかたく終に宮方と接戦せし舊領安堵の事にいたり約にたひしゆへ今は是を訴しならん

十三日 小山判官朝里卒す常樂記

廿一日 上杉伊豆守武家の寵臣なりける處いかなる故や有けん尊氏兄弟の勘氣を得たり園大

園大

廿五日 後深草院第二の皇女永福門院嵯峨にて薨し給ふ御とし七十五歳たり園大曆女院小傳〇南朝編

年記畧に准后傳を引て當月朔日行宮より参議右近中將源顯時卿参議右近中將藤原公廣卿名和但馬守源長義同信濃法眼源盛以下を四國につかはされて兵を催さしめ給ふといふ



五月小

六月小

七月大 二日

足利尊氏の女三歳にして卒す

常樂記○混合記に當月十三日堀田彌五郎正泰夢の告によ

平定經と二座にして定經は地主の神なり後には彌五郎正泰の名をよひこの二座の神を里人は彌五郎殿とのみ稱しけるなり彌五郎正泰はのち從五位下左衛門佐に叙爵せし人なりと云

十九日 嵯峨より京に往來する僧あり仁和寺の六本杉のあたりにて雨の晴間をまち居たりしに日すてに暮けれの行さきのねろしさに本堂の縁に心をすまし夜のあくるをそま

ち居たる折しも愛宕山比叡山の嶺より遙かに物の出くるやうにて四方輿に乗たるもの虚空に來會しぬ風に吹あけたる幔の内を見れば先帝の御外戚峰の僧正春雅を初とし南都の知教上人淨土寺の忠圓僧正みな天狗の姿となり各座につけり又車にのりて來れる客あり是は兵部卿親王のいまた御法體にてましますの形なり程なく御盃など出けれの各興ある様なりしにたちまち座中のも呼ぶ聲して悶絶する事半時はかりやありて春雅苦し氣なる息を繼て扱もこの世のなかいかにして騒動なすへきと尋れぬ忠圓僧正其事こそいと安き事なり大塔宮の足利直義か内室の腹に男子となりて生れ給ふへし峰僧正は夢窓か弟子妙吉か心に入り給へ知教上人は上杉重能畠山大藏少輔か心に依託して師直兄弟を失はんとはかり給ふへし忠圓は武藏守越後守か心に入かはり事を計らんかかる時は大なる合戦出來て見物はたえましと申さるれば大塔宮をはしめ一同に輿に入と見て夜明にけりこの僧京に出て施藥院師和氣仲成に此事を語りける其のち四五日を歴て足利左兵衛督直義

の北のかた相勞る事ありて諸醫をまねかれしかは仲成も參り合せ是はかならず御懷妊にてまかも御男子にて御渡り候らんと申たりける是をきくもの仲成か追従や女房の四十に餘りて始て懷妊する事やあるとそしりたりしに月日をへて誠なりしかは仲成か申せし旨を感けるのみかのちに所領を直義か許より加へられ典藥頭に申なされたりける太平記七月ふもの天正本によれり○足利直義高師直と不和となりし事は是よりさきなるへし此條は文勢と工にせんとかく書けるものか

廿四日 僧虎關入寂す和漢合運

八月小 四日

中御門堀川邊より大宮にいたり羽蟻とひたつ事夥し園大曆

九月大

閏九月小 二日

九州の宮方阿蘇惟澄軍勢を催し守山の關をうち敗る敵是をきく小河城より下し合せ合戦に及ぶの所敵終にうちまけ十方へにけはしるこの時阿蘇か手に日奈子高木兄弟弓削丹治以下十餘人の首を獲利馬物具までうはひとり氣色はみて引たりけり阿蘇大宮

司申

三日 阿蘇惟澄はきのふの合戦にうち勝にくる敵を大野か原まで追かけたらしかとさしたる軍はなかりける同上

當月鎮西に於て阿蘇惟澄敵と對陣なすといへともはかなく敷合戦もなく日を送りたり上

れとも終には阿蘇方勝利を得敵城二ヶ所まで攻落しけり同上

廿七日 京師雪ふる園大曆



十月大

十一月 大九日 北朝にて萩原上皇みつから風雅和歌集を撰はれ青蓮院尊圓法親王をして清書せしめ給ふ歌數二千百十首廿卷にわかたるといふ今日これか爲に竟宴をひらかる風雅

集園大曆

其比宗良親王北朝にて撰集ありし事をきゝ及び給ふ所にこのたひのあらぬ撰者にて御子左爲定は撰者にもれ給ひぬるよしを歎き思召ければ「いかなれば身はふもならぬこの葉のうつもれてのみ聞えさらなん」このたひはうきもらすとも藻鹽草なか／＼わかのうちらみとはせしと二首のうちをよみ彼卿の許に贈り給ひける新葉集 李花集

同し比薩摩國に於て島津か一族大隅助三郎入道道忍以下宮方に屬す島津氏 古文書

十二月小 今年結城親朝卒す結城氏古 文書推考

今年興國より 正平に改元あり太平記より推考○南朝編年記畧に吉野文書及び南方紀傳を引て七月廿四日正平に改元ありしといふふたれとも流布の南方紀傳には所見なし竹口榮齋い

鎮西の宮方阿蘇惟澄か構へたりし種山黒駁の城は樞要の地なりし所に武家方の爲に攻落されしかけ早くこの城を取戻せとてまつ向ひ城をそ取たりけるかゝりしかは内河縫殿允も向ひ城にこもりて敵を攻る此よしを聞少天久貳頼尙か一族對馬豊前守筑後次郎以下數百騎寄せ來りまた宮方の要害を追落す此とき阿蘇惟澄竹崎左衛門太郎碎身してたゝかふ程に雙方手を負ふもの數をあらすそのゝち約を定め頼尙義直八代の南北をわかち和平を

なすまかる所に少貳初の約にたかひ小河の境篠尾に城を構へければ惟澄是をいかり多勢を率し篠尾に於て合戦なすといへとも八代の加勢來らざるによりはか／＼しき軍もなくいたつらに月日を過しける阿蘇大宮司申狀推考して 姑く今年にかけあるせり

爰に又先帝につかへまいらせける弁内侍と申の右少弁俊基朝臣の女なりしを高師直いかなる隙にか見奉りけん先帝かくれ給ひしのち度々御文などまいらせたりけれどもさらに御いらへもなかりける師直これをねたくやれもひけん俊基朝臣の兄三位行氏の許に行通ひける梅かえといふ女房をもとめ出し行氏の北の方にこの事はかり給ひ、知し召所も御位をもよきに申なすへしとはかりまいらせければ北のかたより御文とゝのへ内侍の君に御文をそへ梅かえとゝもに侍二十人はかり行宮のかたに遣はされける内侍の君梅かえの北の方の御文をもち弁内侍の御許にまいり都のやうをかたり故俊基朝臣の北の方今は尼になりて行氏の館に居給ふ母君のこの比住吉にまふて給ひ其歸るさに河内國高安の邊に知るかたありて居給ふなりいとせめてこのたひの便にあひ見すいなど御文の心にそへかきくとき申ければ内侍の母君にあひ奉らん事をおもひこめ給へる君に此よし奏し給ひいとまこひて女房二人青侍三人御供にめされ取敢す河内のかたへ出させ給ふ道にて人多く出合ひ尼君今程まで高安に待給ひしかとはやすみよしに出給ふなれかし迄御供申奉れど仰候ひしと言ひやかて取こめ奉りぬ青侍ともいと心得ぬ事なれ住吉までいひかてはる／＼の具し奉るへき御輿を返せとてひしめけいさなはいせそとて三人ともに打殺してけ



り弁内侍いとれそろしく鬼にとられたる心ちし給ひてひたなきになき給ふ武士ともなさけなく引具し奉る石川といふ所まで出たりける此折しも帶刀正行の吉野殿にめされて參るに行あふたり其まゝ過なんとするに内侍のなき給ふ聲をきゝあやしみて御輿の邊にたち寄事の様を間申せはかゝる事になんと答給ふ正行取敢す具したる供してこの武士どもを召とれと下知すれの郎從はせ廻りみなからめとりぬ其中に三四人拔連てかゝる者ありけるか是をも終にうち殺し其後行宮に參り事の始末を啓し申けれぬ梅かえにたつねらるゝにつゝむへきかたもなかりける侍のみなきられ梅かえの尼になし都に返されけりけふ正行なかりせはいと口惜かるへきによくこそはからいけるとて内侍をは正行に賜はらんとみことのりありしを「とても世になからへくもあらぬ身のからの契りをいかてむすはむと一首のうたを以て辭し給ひける其時歌のこゝろをいとうけかたくれもひけるか後にそ正行のこゝろさしを感じる吉野拾遺○南遊記行によるに篠峰と葛城山との間に水越嶺といふあり大和河内往來の道にして則正行吉野殿に參内せし所なりと云

南山巡狩録卷第五終

南山巡狩録卷第六

大艸公弼 編

後村山院大和國吉野郡金峯山と以て皇居とす

正平二年丁亥

北朝貞和三年

正月大 十五日

地震す園大曆

十九日

辰星歳星と合同同上

廿日

辰星歳星相犯す同上

二月大 二日

太白星犯す同上○案するに本書脱字あるへしこいへきも今考ふへきものなし

九日 足利直義の室は澁川丹波守貞頼の女なりいつそや和氣仲成か胗せし如く今年四十一歳にて懷妊ありしかは着帯の式を行はる御帯の加持は青蓮院二品尊圓親王使の兵庫助高階重直御産奉行は粟飯原下總守清胤陰陽御祓の安倍宗長御藥の和氣仲成なり直義か奢侈是にて推はかるへし太平記園大曆

晦日 北方の上皇又天龍寺に御幸し給ふ園大曆

當月 大覺寺二品親王薨逝常樂記

三月小 二日

岩松治部大輔直國足利尊氏より上野國新田庄のうち由良成菴兩郷をあたへ

らる正木氏古文書

廿六日 岩松禪師賴宥勳功の賞として足利尊氏より上野國新田庄のうち寺井郷をあたへ



らる同上○三家考に岩松頼有は建武年中に討死のよし見られども誤なるへし○案するに上野國新田郡は義貞朝臣の舊領にして彼朝臣すてにうたれ給ふさいへとも一族かの地に居給ひ武藏野合戦のとき義宗朝臣の旗をあけ給ひしも同所なるか如しとあるに今岩松一族かの郡にありて其近郷を領すわつやはかりの新田郡のうちにして敵御方混し住する事今より見れば不審なりさいへとも當時の勢ひばかり知りたし

四月大 二日 結城親朝か一族さきに凶徒に降参せしよりは後詰の便もなし是體を見て宮方を叛くもの少からず剩吉良右京大夫貞家相馬孫次郎親胤結城大膳太夫顯朝等伊達郡藤田靈山田村宇都峯等の城を攻落しければ一品宮案するに守永親王成へしまはらくかの地をひらかせ給ふ結城氏古文書相馬家傳

その比凶徒松田太郎を出羽國立谷澤の城に於てうち取る結城氏古文書

是よりさき春日侍從凶徒の爲にうたれ給ふにより東國の宮方大ひに勢力を失ふ島津氏古文書

五月小 六日 京師地震す園大曆○南朝編年記卷に吉野文書と引て後村上院の女御從三位藤原勝子當月十一日後龜山院を生給ふさいへり其詳なる事をあらす

六月小 七日 熒惑太白軒轅大微宮にむかふ園大曆

八日 三條坊門に於て足利直義の室男子を平産す北朝の上皇是を聞給ひ教光をして御劔を賜り賀せらるゝ程なりしかは其外の者に於て公家武家をいはす我も劣らしと引出物をそなしたりける太平記園大曆

新待賢門院の御所は行宮の西の山につゝきたる所なりしに今どしの春より妖怪あるよし聞えけれの内裏にても宿直の武士を、かれ墓目を射さしめ給ひける其のち妖怪まはらくあつまりしとを聞えしこゝにまた院につかへまいらせし伊賀局と申へ篠塚伊賀守か女なりけるか水無月十日あまりいとあつき夜なりしかは局の庭に出て打休らひ「すゝ(あつ魃)しさを松ふく風にわすられて袂にやとす夜半の月かけとひとりこちけるに松の梢よりまはかれ(からひい)たる聲してたゝ心静かなれば身も涼しといふ古き詩の句をいふに見わけのそめは鬼の姿にてそありける局騒さもやらて何ものそと尋けれわれは藤原基任にこそ侍れ女院の御爲に命を奉りさふらひしになさあとたに吊ひ給ふ事なき故にうらみ奉るなり此春よりうしろの山に侍り御前にはおそれてまいらぬにこそと申たりけれの事のよしを奏聞しやかて水木法印に三七日法花經を供養せしめ給ひけれの、ちの妖怪もあつまりけり吉野治遺案するに藤原基任女院の御爲に命を失ひし事其事跡と詳にすひり南朝編年記卷に洞院別記と引て去年新待賢門院ひそかに京にいたり給ひ洞院前右大臣公賢の御許におはしまし程なく行宮に歸り給ふとあるに高師直いかなるひまにか見奉りけん奪ひ申さんと路次に人を出し狼藉に及びの此とき御供にさふらひし右衛門大夫藤原基任防ぎたいかひけるひまに女院はこゝのつかれ給ひ基任は終にうたれしよし見ゆおもふに洞院公賢は行宮の寵臣洞院實世卿の父なりさいへとも國母の御身をもてかるゝしく敵地にいたたり給ふと云といふ不審なりしかつは洞院別記といへる書をみす後世の贋作かも辨へず猶後人の刪定をまつ

七月大 楠帶刀正行父正成先年湊川へ下りし時おもふやうありけれの本國河内に返し君のならせ給はんするやうを見奉れと申合たりけるに其庭訓をわすれすこの十餘年か程我身の長するをまち討死せし郎從の子孫を扶持しいかにもして君父の敵を退んと明くれ肺肝をくるしめける今年父か十三年の佛事をいとなみ今は命れしとも思はさりければ五百餘騎を率し住吉天王寺に打て出中島の在家を焼はらひ敵やよすると待たりける尊氏はをき、楠か勢の分際へさこそあらめそれに洛中の騒動なす事はわか恥辱なり早く勢をさし向けて是を追拂へと下知せられける太平記并異本○太平記十六正成首故郷に歸る條、尊氏卿楠が首をさされて朝家私日久しく相闘、舊好の程も不便なりあさの妻すもなしさかち成さ



も今一度さこそ見たくおもふならめて河内國にもたせ送られける楠の後室子息正行首を見て判官兵庫に立れし時様々申置れし事多かるうへ今度の合戦にかならず討死すへいさて正行をこゝめ置しかば出しを限りの別れなりとされより思ひ設けたる事なれ御今更形かはりぬる首を見ら悲の心むねにみちて今年十一歳になりける帶刀父の首の生たて跡より行て見れば兵庫へむかひし時かたみにこゝめし瀧水の刀を右の手にのきもち移のこしを押しなち幼稚なりともそなしたりける母いそぎ走りより正行の腕にこりつき涙をなかし梅檀は二葉より復しといへりなんち幼稚なりとも父の子ならば是はさの理に迷ふべきや子心にもよくおもひみ故判官櫻井の宿より汝を返し給ひしは全く跡にこゝめて佛事を修し又腹されと言にあらす父正成討死し給ふとも君の御座あるうへは死のこりたる一族を扶持し今一度軍を起し御敵を亡し君の御代になしまいらせん爲にのこしをかれし所なり其遺言を具に聞て我にも語りしものなるにいつの程に忘れける事そやかくては君の御用に合まいらせん事は有へしとも覺えずさなくいさめたりければ正行腹をも切得ず母さにも泣倒れなげきけるさかやまより正行父母の教訓肝にめいしある時は童もを打倒し首さるまに月日を送りけるさあり今川家毛利家北條家南都天正本に今年正行を二十三歳に作る案するに諸本十六卷正成兵庫に下向の段に延元々々正行十一と見ゆさかる時は正平三年二十三歳なり又第二十六吉野に参る段に正成死する時十三歳あり是に據時は正平三年正行は二十五歳なり是は園大層細々要記等によるに藤井寺の合戦を以て正平二年北朝の貞和三年に於て又太平記諸本正行は正成か死後十三年にして始めて兵を發する云々の藤井寺合戦を正平三年北朝の貞和四年にあつる所の説也この故に異本あるひは年二十三又二十五とすた、毛利家本藤井寺の合戦を正平二年とし園大層細々要記と符合す第十六卷に云如く十二(一)歳と見る時は今年正行二十二歳なり二十六卷にいふ如く十三歳とす時は二十四歳なれりまた執か是なるをあらすまた本文に父正成が十二年の佛事を修行すといへさも今

この秋より楠帶刀正行官軍を引具し大和河内にうち出合戦をとくる細々要記○細々要記一名と沙門實嚴永和三年記す所にして彼寺の什物たりされども法中の事を多くあるし他に及ぶ事實は希に載たるよし聞及へり水戸公にてうつされしものは抜書の本にて僅數十葉にこゝまる近世流布する細々要記の七卷となし都て百葉餘もあ

るへし是後人事を好み名をかりてつくるものかあかれども其説園大層太平記等に漸符合するを見ればかならずさるましき書にもあらずよりて本文に細々要記を引てあるすものは抜書の説なり分注にのするは近世の細々要記なり下是に同じ○櫻雲記正平三年楠正行兵を起すにより正月八日尊氏高師泰をして南方を撃んと欲し東條の城にいたり二月六日青木谷に於て楠勢師泰と合戦五月十五日野村某足利か淡輪助重と合戦八月正行河内より攝津へ發向尊氏細川顯氏と上り尊氏直義と攻る京方防戦術なくして尊氏は江州へののれ直義は兼て地道を掘たるゆへその道よりのかる正行河内

に歸れば尊氏兄弟また歸洛す九月三(二)日河内國宮里同國風森所々に於て合戦正行每度利を得たり渡邊孫十郎と討取十月廿日攝津國池田城にて合戦また京方へ敗るさありこの合戦他の書に照應あるもまたつてなきもありここに正行京に責入て尊氏を追落すといふもの尤疑し猶後に穿鑿して取捨せんことを欲すといふ所の櫻雲記には正平三年に於けるさいへさも其實は上に辨したる如く正平二年の事ならんよりてこの所に分注せり

十一日 佐々木氏頼同出羽四郎兵衛武家の催促あるにより軍兵を引牽し楠が勢とたゝか  
いんか爲河内國東條に赴かんとす朽木氏古文書

晦日 佐々木氏頼同出羽四郎兵衛等東條に發向すへきよし兼て定めしかともまた延引に  
及ふ同上推考

八月小 八日 太白星軒轅女室(至)星を犯す園大

九日 今度足利尊氏細川陸奥守顯氏を大將とし河内國東條に向ひしむ是時まで佐々木か  
勢着到せざりしかは四郎兵衛か手の者かの手に加ひるへき由を催促す朽木氏古文書○案する  
月十一日より軍勢催促の事ありて今日また出勢延引しけるゆへなまた尊氏の御教書ありしものか

この夜また大白星軒轅女室(至)星を犯す園大

十日 楠正行朝臣岸和田藏人助氏を召具し紀伊國隅田城を攻む岸和田助氏申狀

十九日 佐々木出羽四郎兵衛尊氏の御教書を得しうへ其のちもまはく催促あるにより  
攝津和泉の方に向はんとす朽木氏古文書

この日攝津國和泉國及び紀伊國熊野の邊に於て楠方の者とも蜂起なすよし京に聞えしに  
より尊氏陸奥守顯氏を大將とし宗徒の大名十一人今日京師より發向すその中に大將顯氏  
いまつ天王寺に着陣しそれより泉州堺の浦に向はんとす園大曆○太平記及び異本に八月十四日細  
川顯氏以下宇利宮佐々木松田赤松村田奈



佐々木の下太平記の古本あり

長崎等京に發し十六日天王寺に着陣なすよしみゆふかれも事跡に於て符するに月日ハ園大曆によりてあるす

廿一日 細川顯氏天王寺まで着陣するのどころ和泉國堺邊に控し楠勢の多勢なるよしを聞檄を京師にはせ加勢を請ふ園大曆

廿二日 細川顯氏天王寺を發し堺の浦にむかふにより楠勢少しく陣を退くこの日佐々木出羽四郎兵衛も軍兵を引具して彼地向ふ朽木氏古文書 園大曆

楠か勢多くして軍大事なるへきよし京に聞えしかは建武の例にまかせ梶井二品親王中堂に於て七佛藥師の法を修せらる園大曆

廿四日 河内國池尻に於て楠勢京方と相たゝかふ岸田助氏申狀

九月大 九日 河内國八尾城に於て楠勢京方とまた合戦に及ふ岸田助氏申狀 異本太平記ノ案するに太平記異本に八尾城は武家方秋山彦六か籠る所に和田楠打むかふよしみゆふおもふにこのたいひならん

京勢天王寺に到着せしはしめ大將細川顯氏謀を出し和田楠は勢を盡して秋山彦六か河内國八尾の城へ打向ふよし其聞えありこの城より金剛山へは七里を隔たりされは和田楠山をはなれてはるかに出たらん隙をうかひ敵の道をたち切一度に是を亡すへしとありしかは皆尤とそ同じける智ある者は是をきゝもしこの謀敵にもるゝ程ならはいと危き事なりとひそかに眉をを擧げる此謀に決定せしかは顯氏は楠か勢を出すをまちむなく日をも過しける異本太平記

十七日 こゝにまた楠方にては細川顯氏か金剛山へさし違て攻寄へしとはかりける事を

聞出しさらは此方にても其用意をなし顯氏を討へしと和田楠恩地贊川福塚橋本野上山東異本に山本に作る等其勢七百餘騎矢尾の秋山彦六か城を攻る體をみせ在家所々に火をかけこゝには足をためす本の要害に引返し金剛山を後になし譽田の森の陰にを敵をまち居たりける案の如く細川勢は是を知らず敵ハ兼てはかりしにたかはさりけりと見てければ譽田の宮を陣にとり先驅の勢三千餘騎は譽田河原にはせ集り人馬を休めて扣たりける處に譽田の後なる山陰より菊水の旗二なかれさしあけて其勢七百餘騎鬨を作りてかけ出たり細川勢元よりこゝに敵あるへしと思ひよらす戦んとする者一人もなし其なかに村田の一族六人長尾卿房主從二人聞ゆる剛の者なりしか小具足はかりにて相戦ひ終に討死をを遂にけるその隙に大將顯氏三百餘騎を引率し下知を傳へて相戦ふ京勢は多勢なりしかは心を一になしたらんには軍は負ましかりけるを四國中國の勢の逃るにひかれ大將顯氏も終にこの所を落たりける此折から佐々木判官か舍弟六郎左衛門氏詮系圖に氏詮に作る檜崎太郎左衛門粟生田小太郎以下宗徒の兵二十餘人異本に三十一に作る枕を並て討死しぬ伊庭平井儀儀一本嵯峨檜崎一本に伊庭平井と載すあまりに戦屈して引て行に目賀田彈正忠敏信良の敵に懸隔られて主從二騎西なる田の中を引けるか安保肥前守忠實と出合ひ三騎の者の道より取て返し和田楠か勢の中にはせ入りあひしかあいた戦ひしか軍は是迄と物わかれしてを退けるこの日の合戦京方大に打まけて天王寺にを籠りける太平記 井異本

二十八日 島津三郎左衛門(尉)在洛しける所に尊氏の御教書を得山名伊豆前司時氏か手



に加はり天王寺に赴く島津氏古文書

十月小

十一月大 三日 足利義詮從四位下に昇る系圖

廿三日 去る九月十七日河内國藤井寺の合戦に京方の大将細川顯氏うち負たりし事を恥辱とれもひければ猶京に歸らすして天王寺に籠り居ける此時楠勢機にのりて彼寺を攻落しなはあしかるへしと評議して山名時氏を加勢となし新手の兵六千餘騎近々河内のかたに打むかふへきよし聞えたり太平記并異本 園大曆 神明鏡 案するに太平記に云如く顯氏京に逃上(下)ち京に歸らす天王寺に在陣せしか如し 再ひ山名時氏と兩大将となり打むかひしにはあらず顯氏は藤井寺合戦の

廿六日 細川顯氏の先度の軍にうち負天下の人口に落ぬる事を生涯の恥辱と思ひければ今度ハ以前の恥をすゝかんと二千餘騎或は八百餘の者とも神水を吞て必死をちかひ搦手に打むかへは大手の山名伊豆守時氏大将にて六千餘騎住よしに陣をとる楠帶刀左衛門正行是をき、敵に足をためさせ住吉天王寺兩所に城郭を構られなは悪かりなん早く推寄て住吉の敵を追落せさあらは天王寺の敵は自ら引退ぬと覺ゆると下知をなしましたの、めの比なるに其勢五百餘騎異本太平記に二千五百餘騎に作る 住吉へと心さし石津の在家に火をかけ瓜生野に推寄たり山名是を見敵は一方よりいよせましきを手分をなして戦へと其手に有ける赤松貞範に八百餘騎を相添住吉の南に陣をとらせ土岐周濟坊明智兵庫助佐々木四郎左衛門に三千餘騎をつけ安部野に控しむ搦手の細川顯氏の手勢の外に四國勢を合せ都て五千餘騎天

王寺に控居るこゝに山名時氏舍弟三河守原四郎太郎同四郎次郎同四郎三郎は千餘騎にて先驅の楠か勢にかけ合んと其間ちかく懸出たり楠も是を見二千餘騎を一手になし瓜生野に打向ふ程なく兩陣相接し鬨の聲をあくとひとしく入みたれて相戦ひ漸く時刻もうつりけり敵の大將山名伊豆守七ヶ所まで手を負ひ馬を控て息つく處に楠勢のうちより和田新發意源秀阿間了願と名乗り敵の真中にかけ入り十方にきつて廻る跡にすゝむ勢是に機を得追かけく攻ける間山名三河守原四郎太郎兄弟二騎犬飼六郎等返し合せて討死す二陣にすゝみし京勢もまはしか程戦けるか目賀田馬淵の者とも三十八騎一所にてうたれけり此外綿貫下野守箕浦八郎實俊同藤六大井六郎小松原刑部左衛門尉野木與一兵衛蜂屋五郎左衛門入道の所々に於て討れけりこゝを落延んとて水に溺るゝ者もまた少からずさしも氣色はみて京を打立ける者とも夜にまされて歸りたるは見苦かりける事ともなり大平記并異本 園大曆

十二月小 十四日 去月安部野の合戦に京方多く討るゝのみか渡邊橋よりせき落されてなかるゝ兵五百餘人甲斐なき命楠にたすけられ剩小袖を脱替させ身をあたゝめまたは疵を療養し馬に乗る者には馬をあたへ物具を失ふ者にはそれゝに引出物して送りたりければ其情を感じる人の今日より志を通せんとおもひ其恩を報せんとする者の彼手に屬し四條繩手の合戦に討死しけるそやさしけれ正行は今年兩度のいくさにうち勝しかはその勢ひ近國に振ひ志をよする者も多かりけり尊氏兄弟是を聞て大に周章し今度の高師直同師



泰を兩大將とし四國中國東山東海二拾餘ヶ國の勢を差添よしの、方へそむけられける中にも高師泰は十四日手勢三千餘騎にて淀に着陣す是をき、かしこにはせ加る者どもに、武田甲斐守逸見孫六入道長井丹後入道厚東駿河守宇都宮三河入道赤松信濃守小早川備後守是等を始とし都合其勢二萬餘騎異本に三萬に作る淀大渡に居あまたり太平記

十八日 戌の刻はかり高師直京をたちて八幡に着く其勢七千餘騎とそ聞えける此手に加

ゐる人々には細川阿波將監伊豫守清氏仁木左京大夫頼章今川五郎入道心省武田伊豆守信

氏系圖に氏信に作る高刑部大輔同播磨守南部遠江守同次郎左衛門尉千葉介貞胤宇都宮遠江入道蓮智

同三河入道佐々木佐渡判官入道同六角判官氏頼同黒田判官長九郎左衛門尉信綱松田備前

守異本に松田守三郎に作る須々木備中守宇津木平三曾我左衛門佐々木秀綱同四郎左衛門尉同五郎左衛門

守異本に治部少輔に作る高秀土岐周濟坊同明智兵庫助異本に明智三郎に作る荻野尾張守朝忠多田院御家人源氏二拾三

人是等と宗徒として未々の廿外様の大名四百三十六人異本に三百四十六人都合其勢六萬餘騎異本に八萬に作る

注しける太平記并異本

廿七日 京勢軍勢を競ひて行宮に向ふよし聞えしかは楠帶刀正行舍弟正時一族若黨三百餘騎を引具し吉野の皇居に參内し四條中納言隆資卿を以て申されけるは父正成先朝の宸襟を休め奉らんとて大敵をうちたくといへども逆臣再ひ出来るにより湊川に於て討死をとけ候ひぬ其時正行十三歳に罷成候を河内に歸し残り居候一族を扶持し今一度君の御代になし參らすへしと申置てこそ候なれまかるに今正行壯年に及ひ候ぬれば我と手を碎

き合戦仕候のすい且の亡父の遺言にたかひかつは武略の言甲斐なき謗に落へく覺候有待の身思ふにまかせぬ習にて病に侵され早世仕る事候なは君の御爲にの不思父の爲には不孝の子となるへきに候今度師直兄弟と合戦仕り彼等か首を正行か手にかけて取候か正行正時か首を彼等に取りられ候かこの二のうちに戦の雌雄を決すへきにて候へは今生にて今一度君の龍顔を拜し奉らん爲に參内仕て候と申も敢す涙をそなかしける傳奏もいまた事を奏せざるさきに直衣の袖をぬらし子細を啓しければ主上則南殿に出御し給ひ諸卒を觀覽あり正行をちかくめされ以前兩度敵にうち勝累代の武名を顯はす條返へも神妙なれ今度の京より大軍打むかふよし聞えぬ天下の安否一擧にかゝる所なれば進退度にあたりて戦ふへし朕汝を以て股肱とす慎て命を全ふすへしと仰出されける正行の免角の勅答に及ひすたゝ是を最期の參内なりと首を地につけ勅詔を承り退出すかくて正行兄弟和田新兵衛同新發意同紀六左衛門子息二人野田四郎子息二人楠將監西阿或は石楠將監西阿に作る子息關地良圓以下今度のいくさに一足も引かず一所に討死せんと神水を飲て約束せし兵百四十二人異本に二百人また二百四十三人に作るもあり先帝の御廟に參し今度の合戦に討死すへき暇を申その、ち一人も生て歸るましき盟に各太刀の鏝をたゝき如意輪堂の壁板に各の名字を書つらね正行の彼堂の扉に一首の歌を刻付たり「返らしどかねて思へは梓弓なき數にいる名をそとゝむる又逆修の爲と覺しくて各の髪を剪て佛殿になけ入れ其日よしのをうち出て敵陣にこそ向いれける太平記○吉野山如意輪寺の過去帳に見ゆる所は各留半座乘華臺待我關浮同行人「先立はおくる、人を待やせ入ひこつ蓮のうちを殘して願以此功德云々楠正行同正時同將監和田新發意同舍弟新兵衛同紀六左衛



門息二人野田四郎息二人西川息兩地真圓又一首正行「かへらしこかへて思へば梓弓なき敵に入る名とそいむつさあ  
り又吉野山に遊歴せし人に聞に正行の歌は今に尋にのこりて見ゆることなり毛利家本太平記に梓弓引かへさしとおもふ  
よりさあるは非なるへし系圖によるに正行は昇殿せし事ばうたかひなし今年陸奥國伊達郡靈山田村の城  
年月詳ならずといへども太平記の文によるに昇殿せし事ばうたかひなし今年陸奥國伊達郡靈山田村の城  
々に於て合戦ありこれ相馬の一族足利尊氏の命をうけこゝに向ひし所なり相馬家傳

後村上院

正月金峯山の行宮焼亡のいし  
吉野山穴太と以て皇居とす

正平三年戊子

北朝貞和四年

正月大

二日 高師泰か二萬餘騎の勢の淀をたちて和泉國堺の浦に着陣す太平記

三日 高師直其勢六萬餘騎を引率し 八幡を打立大和國四條に着し異本太平記に師泰は朔日に  
出陣師直は六日に陣す  
ふやかて楠か勢に近づくへかりけれども定て楠の難所に相待へしさらば便あしかるへ  
しと議定し五ヶ所にわかれて陣を取るその人々には白旗或は小旗一揆の旗頭縣下野守五千  
餘騎飯盛山に打上り大旗一揆のはた頭河津高橋三千餘騎は秋篠や外山か峰に扣たり仁木  
細川今川荒川逸見武田小笠原千葉吉良吉見等異本に武田伊豆守ののみ  
るし仁木細川以下とのせず二萬餘騎は四條繩手の  
田の中に馬の懸場をのこし置すこし隔て扣たり佐々木佐渡判官入道道譽の其勢二千餘騎  
伊駒山の南にのほり面にの疊楯をつき並へ射手を揃へて待かけたり大將師直は尊氏の旗  
をなひかせ其外に己か輪違の旗をたて曾我島津阿保薬師寺等どもに其勢二萬餘騎徒立  
の射手を揃へ四方十餘町に相さへ敵よせ來らり打敗らんと氣を勵して陣をとるされは

この堅陣にかけ入りたれか戦を交ゆへきと見えたりける太平記  
并異本

五日 去程に四條中納言隆資卿官軍の大將を奉り恩地性河志貴湯淺譽田古市野上山本以  
下野伏等の勢をわつめ都て二萬餘人異本に三千  
餘騎に作る飯盛山に打向る是は大旗小旗の一揆等を  
麓へ下させす楠勢を四條繩手に寄せせん爲なりけり案の如く一揆の勢は是こそ寄手なる  
らめと射手をわけ旗を進め坂中まで下りかゝり此勢と戦いんと見繕ふこの隙に楠正行の  
舍弟正時和田新兵衛兄弟同紀六左衛門父子三人野田四郎金岸或は金庭に作る兄弟畠山與三  
同六郎河邊石楠丸左近將監或は石楠と氏をなす其疑を太平  
記参考に辨せり今こゝに畧す子息關地良圓阿間了願をはしめ究竟  
の兵三千餘騎を引具し四條繩手に押出し敵にちかつくとひとしく一方の陣をうちやふり  
少しもためらふ氣色なく師直か勢をうちなひけ却て大敵をうち圍んと魚鱗につらねて推  
寄たり縣下野守は白旗一揆のはた頭なりけるか菊水の旗師直か陣にかけ入らんとするを  
はるかにみてければ北の岡より馳下り歩立になり楠勢を遮りどもむもとより勇氣盛の正  
行か勢ともなりしかいなにかは敵に臆すへき前陣五百餘騎打てかゝる京勢のなかより秋  
山彌次郎異本に孫四郎  
門持繼が采地三河國大草郷還  
補の御教書今も猶家に傳へり大草三郎左衛門公經異本に太郎兵衛公光に作るは非なり公光は遙にのちの人なり公經  
はすなほち公彌始祖にして尊氏より義詮に贈られる所の三郎左衛  
門持繼が采地三河國大草郷還  
補の御教書今も猶家に傳へり二人異本に父子二人とあるし又  
一本には兄弟二人と作れり眞先にすゝんで射落さる猪野七郎は楠か  
ものどもに氣をつけじと秋山か上を飛躍てはせ向ふ和田新兵衛遙に是をみすゝみ寄矢つ  
ほを指て放しけるに忽ち七郎を射倒たり新發意つと懸よりて首をとる是を軍の初とし楠  
か騎馬の勢縣か歩立の兵と相戦ひははらく時をうつしけるに下野守も深手をいひ師直か



陣に引退くされども雙方勝敗いまた分たす今は楠か勢も戦ひ屈して見えたりけり四條繩手の田の中に控ける仁木細川逸見武田千葉宇都宮いさやこの時に乘し正行か勢を打敗るへしとす、み來る楠か二(二)陣千餘騎是にかけ合せた、かへは京方終に打負て引退くと雖ども楠勢もまた大半は劍を蒙りける四條隆資卿の見せ勢に對し飯盛山に控ける小旗一揆の中より長崎彦九郎資宗松田左近將監重明舍弟七郎五郎子息太郎三郎須々木備中守高行松田小次郎秀盛河田左京進入道高橋新左衛門尉舍弟八郎次郎其弟太郎次郎以下四十八騎小松原のかけよりはせ下りて楠か勢にうつてかゝる爰に又佐々木道譽は正行定めて師直か旗に目をかくへしとたもひければやり過して討出んと三千餘騎飯盛山の南に打上りてそまちたりける正行の數刻の戦に馬つかれ氣屈し少し猶豫して見えける所時分よしと見すまし道譽か三千餘騎三手になりてよせ來る楠もまはしか程の會釋してた、かひしに終にこの新手の爲に打破られ殘る勢も南にむかひて引退くその中にけふのいくさに討死せんと兼て約束せし百四十三人の者の一處に打寄り御方の破られたるをも顧す師直に目をかけ又もかの陣にす、みよる是を遮んとて細川清氏一番には合せ忽ち楠にうち破らる二番に仁木頼章入替りてこれもまた引退く三番に千葉宇都宮かけ合せまはした、かひまた引退く此時になりて楠勢百騎うたれければ疵付たる馬は追放し心まつかに兵糧をつかひ歩立になりてを並居たる敵是を見て今楠勢に打向ひ、我兵も多く亡ふへしとさのみ取圍もせさりしかはこゝをは落へかりけるをはしめより思ひ切たる事なれはいくたひも

貞和四月五日正  
山修理亮  
高元廿八  
東條合戦  
打死常樂  
見長井不

敵に逢んと近付たり師直か究竟の兵七千餘騎この體を見我れ打とらんとかけ出たり一番にかゝり來る南次郎左衛門尉松田次郎左衛門二人忽ち楠勢にうちとらる楠は小勢にして必死を極めし事なれば師直か七千餘騎も開き靡て見えたりける此時もし師直一足も退く程ならば逃る大勢に引立られ大崩になるへきに楠は小勢なるをす、めや者ともと士卒を勵し下知しければ是に恥かしめられ踏と、まる土岐周濟坊も膝口を切られ引退きけるか此聲をき、取て返し終に討死す雜賀次郎も同じく討死しけると去程に入亂れたる合戦なれば師直と正行とわつか半町ばかり隔たりけりすはや楠か多年の本望こゝに遂ぬと見えたる所に上山修理亮高元或は長井修理亮則元に作る異本太平記及び常樂記と合考する時は上山長井一人と見ゆ師直か前に馳塞り武藏守師直是に在りと名乗り討死す其隙に師直のはるかに隔りけるにより正行か本望のとけさりけるいくさいまた初らさる已前上山の物語せんとして執事の陣に行たりけるに東西俄に騒かしく敵寄たりと聞えし程に上山我陣に歸る事を得ず師直かさなかの料に同毛の鎧を二兩まで置たりしを上山とつて肩になけかけたり武藏守か若黨是を制しけるを帥直うちき、馬より飛て下りわか若黨を制し師直か命に代らんとたもふ人々にはたとひ千兩萬兩の鎧たりとも何れしかるへきと云たりけるを上山よに嬉しと見ゆる氣色面に顯れたるりけるか扱こそこの所にて討死をそとけにける正行の上山か首を見るに太く清けなる男の輪違の金物彫たる鎧なりけれり子細あらしと悦ひけるかよく見れば帥直にあらさるゆへ大に怒て打捨けるを舍弟次郎あまりに剛に見えつる物かなとて着たる小袖の片袖







此とき女院の御供にはあかるへき侍もなかりけるに秋野川の或人の紀行によるに伊賀局の越られける橋は吉野川に非ず秋野川といひ  
 吉野より穴太へ通ふ道にして此流末吉野川に落ちるさいへ橋一間か程踏落し渡るへき使なかりしかは諸  
 人あきれ居たる所に伊賀局是を見てあたりの松櫻の枝どもを折てかのはしにうちわた  
 し女院を負奉りてこゝをわたり其のち人々をもつゝかなく越さしめけり日を歴て其時の  
 枝どもを園部六郎して試られけるに叶いてやみにけりいといかめしかりし事にこそ有け  
 る局の篠塚伊賀守か女にてのちに楠正儀の室となり給ひしとを聞えし其折から瀧口長重  
 といふものいち早く行宮を落去りけれ跡にて尋ねれども見えす源康時このよしをき  
 「みよしのにありと聞えし瀧口か落ては名をもなかしけるかなと落首しけるを長重聞て  
 やすからす思ひけるとなん吉野拾遺○按するに楠正行討死師直皇居に向ふよし聞えしゆへ隆資卿皇居に参  
 内し事の子細を奏聞し給ふを以て太平記には正月六日にかけたるが如し是を参考  
 太平記に辨して十四日の事跡ならんといへり園大曆によるに當月十日より以前既に穴太へ臨幸ありし如くあると思ふ  
 に今度官軍敗北のち隆資卿皇居に参内し穴太へ臨幸をすいめ申されしは六日の事にてマッて主上も穴太へうつらせ  
 給ひ扱師直か兵はおもひの外によせ來らす同月十四日に及び吉野の麓へよせ來り、の所より御和睦の事を申されたれ  
 共御許容なかりしゆへ廿五日山に責上り皇居をやきけるものとおもはる○堀又太郎書上を案するに主上はこのとき吉  
 野の奥穴太に志のはせ給ひ岸上内藏頭信通か家に入らせ給ふと云信通の親を孫太郎といひ先帝始めて當山に入らせ給  
 ふ時つれか家に志はらく鳳駕をさめ給ひ孫太郎を岸上大膳太夫と召さると云傳へりまたいつれの時に三社の尊號  
 をとるせし御旗を賜は  
 り今も彼家に傳來せり

八日 この比また和泉國堺の浦に在陣しける高越後守師泰六千餘騎を卒し石川河原に着  
 陣しまつむかひ城をとる太平記園大  
 十四日 高師直三萬餘騎異本に五萬に作るを引具し平田庄にうつる太平記園大  
 曆細々要記

この日河内國東條に於て高師泰岸和田藏人助氏等と接戦す岸和田助  
 氏申狀  
 十五日 高師直大和國平田庄に陣し西大寺の長老に命し行宮にまいらせ御和睦の事を申と  
 いへども主上是を許容し給はず園大  
 曆  
 十八日花園上庄郷人はやく官軍にはせ加はり軍忠を致すへきのよし左少弁某勅を奉りて  
 かの郷人を催促せらる大和國宇智郡新町  
 久兵衛藏古文書

廿四日 高師直金峰山の皇居を襲ひ奉らんか爲に平田庄より橘寺にうつる細々  
 要記  
 廿五日 高師直の其勢三萬餘騎を引卒し吉野山に攻上り三度まで関の聲をあげたれども  
 敵なければ音もせずさらは焼拂へと下知する程に皇居をはしめ卿相雲客の番所に火をか  
 けたり折ふし魔風盛に吹かゝり二丈一基の笠鳥居二丈五尺の金の鳥居金剛力士の二階の  
 門北野天神示現宮七十二間の回廊三十八所の或は三十五  
 所に作る神樂屋寶藏竈殿三尊光を和らけ萬  
 人頭を傾し金剛藏王の社壇まで一時に灰燼となり果しに淺間しかりし有さまなりこの惡  
 行身にともまらば師直忽ち亡ひなんとおもひぬ人こそなかりける太平記  
 井異本去程に行宮以下  
 堂社にいたるまで餘煙を救ふ人更になかりしゆへ皇居の矢倉すこしはかりを残りける  
園大曆の文を案するに矢倉少し相殘さいふふからは金峯山の皇居  
 は防禦の爲矢倉をあけられしものか其詳成に至りては考へかたし日を歴て火の志つまらさしをたれあ  
 つてたすくる人もなしその中に高師泰ははるくどこの山に登り來り残り居ける兵糧を  
 追捕し廟中の沙金をさかし求ける所行の程こそうたてけれ主上もあらぬかたに忍ひ給ふ  
 程なれば諸卿の居給ふへきかたもなかりしかはひそかに北朝に縁を求めつかへまつらん



と申さるゝ人も多かりける園大

當月より大和國吉野郡穴太を以て行在と定めらる程へて經營なりしかは世の人黒木の御所など稱しまいらせける園大曆太平記より推考○太平記なきに黒木の御所と云へるは穴太の行在と申すし○南朝編年記畧に行宮焼亡のいし吉野郡穴太庄黒淵村

二月大 去ぬる正月五日四條繩手の合戦に和田楠の一族多く討れ今の正行の舎弟次郎左衛

門正儀はかりを生残りける此次に楠を退治せよと高越後守師泰其勢三千餘騎異本に二萬に餘騎にも石川河原に向ひ城をとる互によせつ返しつ合戦やむひまなかりける其間には近邊を管領し諸寺諸社の所領を一所も本主にあたへず勅裁にもあらず武家の下知にもよらずして掃部寮の領河内國大庭庄までみな己か成敗にまかせけるまかのみならず近邊の塔の九輪の大略赤銅なりし故灌子に鑄させける程に膚瘰なく光玲々たりけれの諸國の武士とも我劣らしと灌子に鑄るかゝりしかは和泉河内の間數百ヶ所の塔婆一基も直なるはなかりけりひとへに師直泰か悪行法に過たる處にてを有し園大曆太平記○櫻雲記に吉野内裏炎いたり和歌と詠す「天下るあら人神のゑるしあり世にたき名のあらはれにけり師泰は河内の石川河原に陣す正行の弟正儀殘兵を發して對陣す三月十五日寺田に於て合戦同十八日山田にてたかふ十九日佐保田に於て軍あり四月廿二日野高岡合戦師泰正儀未雌雄を決せずとみゆ

八日 河内國東條に於て高越後守師泰官軍と相たゝかふ岸和田助氏申狀

九日 佐々木佐渡判官入道道譽か男四郎左衛門大和國に於て討死す常樂記○南朝編年記畧に佐々木系圖と引て二月九日大和國宇智郡水越に於て三輪入道西阿真木野入道定觀男寶珠丸長谷寺淡峯の衆徒と謀し合せ師直と合戦に及ぶ佐々木佐渡郎左衛門尉秀宗師直と命をうけ接戦して終に討死すといふ

陸奥國に於て結城親朝北朝に降參しいく程なく卒しぬまかるに初の約にたかひ領地を全くあたへさるにより親朝か男顯朝所領安堵の下文を賜いらん事を愁訴す結城氏古文書

當月薩摩國に於て官軍勢ひを得たり島津氏古文書

三月小 吉野の衆徒のなかに何某の法眼と言しもの藏王權現の假屋の前に侍ひて今は佛の御力も失させ給ひぬるにやかく淺間しき御有様にこそ柔和の御姿を引替させ給へる御志るしもなかりつるとてさめく泣居たるすこし打眠たるに夢ともなく幻ともなく柔和の御尊體の顯れさせ給ひてよしやたゞ恨すともあらなん佛は迷へる衆生を導かん爲にこそ此ちには濟度方便の事こそあれ佛も元は衆生なり衆生は終に佛なり罪を作りし上にこそまた罪をもあたへめとて一首の歌を誦し給ふ「恨なよさてやいやまん梓弓まゆみつき弓年はふるともかくの給ふと見て曉の月の山の端に隠れさせ給ふか如くにありけるを打驚き夢の様を行宮に奏し奉りけり吉野拾遺

十八日 高越後守師泰河内國東條に於て官軍と接戦す岸和田助氏申狀

十九日 師泰また東條にて合戦をとくる同上○父書の面をみるに東條上時彼方佐美谷口所々に於て合戦のみとる○菊地傳記に當月肥後國に方て二品式部卿懷良親王の御願として玉名郡高瀬郷高瀬山清涼寺を建立し給ひ東福寺一燈和尚とて開山とし給ふ

四月大 廿九日 こゝに又高師直は今度よしの合戦にうち勝たるより後の心いよく奢りておもふ様に行迹ける常の法には四品以下の平侍の關板うたぬのし暮の家にたに居ぬ事なるにこの師直の一條今出川に故兵部卿親土の御母堂民部卿三位殿の住わらし給ふ



古御所を點し心も言葉も及はず造り出して住居せり又宮腹の姫君其數をふらす隠し置夜々に通ひまいらせける二條關白殿の御妹深宮のうちにかしつかれ給ひしを師直盜出し奉り年月歴しかは男子一人この御腹に出生ありのち武藏五郎師夏と申せりかの二條どの、姫君師直にまたかひ給ふ事を常に恥かしくおもひ居給へるを大炊御門大納言冬信の聞出し縁に附て玉つさなど通ひされける師直も此よし傳え聞しかとさすかに槐門の人をあらわして打奉らんも憚ありとれもひ今夜若黨河津左衛門尉高橋中務丞に下知し事を狼藉に詫し大炊御門に押よせ火をかけしむ冬信の極て健なる人なりけるゆへきと心つき水干の下に萌黃の胴丸を着し二尺八寸の鳳凰丸といふ太刀をはき車にのりまつかに連れ出られる河津高橋も其體を見遠矢少々射けるまでにて引退けり冬信の舍弟宰相中將家信の息女七歳になり給ひし煙の爲に命をうしなひ申されけり太平記并に天正本園大曆○塵塚物語に高武藏守の不儀ばかりかたし近き頃或武士年久しく所持して待るおかしき童子なりとて見せ侍りその中には師直か一生の姪事のみなきに舉て同しく其女をあるしとせしめたる物なり始終見侍るに世にいへる事はすの物二三ばかり成へしなかりた腹いたくにくきふるまひ言葉に云ひ盡したる當代いさか遠慮の人々もあれは其姓名をあるし其品を顯しがたき事も侍る見えたりあからば師直か姪當時に於て悪しとおもふ者ありてあるし置ける成へしこの童子天文頃まで世に傳はりける事とみえて塵塚と書けるものはみたるものさ覺ゆ今より師直か所行を察するに實にさも有ぬへし

當月高越後守師泰天野の二王山に攻登るにより岸和田助氏師泰か勢と防戦す岸和田助氏申當月廿二日野高岡に於て補正儀高師泰と合戦に及ぶといへり狀○櫻雲記に

五月大 廿八日 足利尊氏の庶子右兵衛佐直冬といふ人あり母の越前局と申すこの人いかなる故ありしにや父子の對面をゆるされす武藏國東勝寺の喝食となり居たりけるを男に

なし京にのほせ此よしを内々申入るゝ人ありしかと尊氏さらに許容せられさりし程に獨清水玄惠法印の許に幽なる體にて住居し學問して暮されけるそのうち叔父直義の亭にうつりこゝに一兩年を過し直義もさまゝ尊氏を申宥られしかと猶許容の體なかりけり志かるにこの比紀伊國に宮方蜂起せしかは尊氏始て父子の號をゆるし右兵衛佐に申なし

紀伊國の大將を命せられ今日門出ありて東寺に宿陣せられける太平記 園大曆

頃日石見國赤松山に於て合戦あり古證 文

六月小 十七日 山名伊豆守時氏尊氏の命によりて若狹國の守護となり加藤實房(大夫房)大里次郎左衛門尉時氏か代官となり彼國にいたる若州守 護次第

七月小

八月大 二日 安村丹後守某伊賀國山田郡の地頭職となるこれ行宮の勅裁によれり諸家系 圖纂

十八日 下野阿闍梨圓成と言ものあり伊勢國神戸より太神宮に參詣せんとおもひある海邊を過けるにひかりあるものを見るときとて見れり二尺五六寸ばかりなるものにて犀の角か珊瑚珠の枝にやあるらんと覺ゆ手に持て太神宮に參詣しけるに神託ありてむかし安徳天皇壇の浦にて海に沈ませ給ひし時どもに海底に入たりし寶劍なるよし示させ給ふ神人奇異の思ひをなし連署の起請を書て圓成にあたふ圓成諸國を經歷し京に出てのち大納言資明の許に參り寶劍と起請とを奉りけれり資明より平野の神主兼員に尋ね其事實を糾さるゝに十束の御劍にたかふましましよし申し兼員も感嘆のあまり三七日祈誓をこめかの神



殿にこめ置ける其頃また足利直義の夢にこの寶劔を見たるよしにて事の次第を奏聞し彼寶劔を平野の社よりとり出し今日にいたり北方の内裏に安置し奉るかゝりしかは圓成の次第を歴すして僧都になされ攝津國葛葉の關所を恩賞に下されける太平記

廿三日 時正の初日なりければ北朝の一院長講堂へ御幸七ヶ日御逗留あり竹内慈嚴僧正をめさる天正本 太平記

廿八日 足利直義美麗を盡して院參すこれ北朝にて讓國立坊の事今年中に行ひるへき御事を奏さん爲なり天正本 太平記 園大曆

九月小 二日 心大星犯す園大曆

十四日 さきに鎮西の宮方阿蘇惟澄笠松鞍掛二ヶ所にむかひ城をとる所に敵大友孫四郎も發向して小野庄に城を構ふ惟澄是を聞小野城に攻よせ終にこの城を乗取たりしかれども宮方の討死また少からず其餘敵の要害糠塚布瀬篠尾三川等の城々阿蘇方より打破る猶すゝみたゝかふ程に凶徒の領地六ヶ所まで焼拂ひ守富隈年濃半田河尻託磨鹿子木須屋立田山本等の所々を放火すこのうちも合戦ありて互に勝敗あり阿蘇大宮 司申狀

去月圓成僧都に北朝より下されける攝津國葛葉の南都管領の地なれの嗽訴を招くに似たりと申人ありしかは寶劔をは再び平野の神殿に返され圓成に賜ひりけり葛葉庄の再び南都にを寄附せられける太平記 三種神器の事は人臣の論すへき物にあらすまして後世より是非を定かたしちかして直義兼員圓成等事を好みてかく執はやせし成へし 跡部光海翁の三種神器考より漸其詳なる事を得たり

當月吉野山龍門郷の百姓申狀を南都の興福寺にさゝく吉野郡龍門郷山口村長四郎藏古文書 〇この文書と以て某氏の吉野紀行に合考するに山口村長四郎が家に所藏する大頭入衆日記は春日講集衆人数事と云ものあり大頭入衆日記は春日講の頭をなす順帳にして上冊は正中二年乙丑に始り大永八年にいたり下冊は享祿二年乙丑に起り天正十二年甲申にいたるみな古き反古と返して帳につりしものにして本文に載する申狀もかの帳のうらに見ゆるものなり扱又龍門郷は此時まで南都興福寺の領地なりあるに後醍醐天皇この山に入らせ給ふよりのちば勅命にあたりひ租税と行宮に納め來りあるに内裏は師直が爲に焼失ありしゆへ穴太さいふ所へ皇居と移されしうへは龍門郷の租税を以前の如く興福寺へ納むへきよし彼寺より下知すされとも行宮より勅ありて今の御所へ移らすへしとあるゆへ百姓等雙方へ役とつこむる事と難義におもひ愁狀を捧し所なりと云れり

十月大 廿七日 後伏見院の御孫光嚴院の御子益仁親王後興 仁御年十六にて北朝光明院の禪

を受給ふ人皇九十八代北朝にては二代 即日内裏にて御元服三種の神器を 延元元年後醍醐天皇より北方へ

さつからせ給ふ一院園花の第一の皇子直通仁親王を皇太弟と定らる太平記 曆代 皇記 園大曆

十一月小 四日 京師雷鳴す園大曆

十一日 北朝にて上皇花園院裁原殿 稱すかくれ給ふ 太平記 常樂記

十三日 花園院を以て十樂院の上の山に葬し奉る紹運錄皇年代畧記 〇松下見林が廟陵考に一説を引

十四日 花園院の妃宣光門院薙髮し給ふ女院 小傳

當月後宇多院の皇女獎子内親王達智門院 御事かくれ給ふ御年六十二これの後醍醐天皇御同腹に

てわたらせ給ひ談天門院うせ給ひし頃より薙髮ある法名を眞理覺と稱しまいらす先帝よ

しのに入らせ給ひし後も京にとゝまり終に北朝にてかくいならせ給へる所なり女院小傳 紹運曆

十二月大 八日 北朝の鷹司前關白師平保安寺に入て出家す年二十六園大曆



今年足利右兵衛佐直冬紀伊國より歸洛ありしかは時の人直冬を重んずる事も出來り折々は尊氏の許へも出仕せられけり太平記○案するに紀伊國の合戦と詳にふるせしものなし今太平記前後の文に推考し直冬歸洛と今年の條にしるせり

後村上院 穴太を以て皇居とす

北朝貞和五年

正平四年乙丑

正月小 當月犯星客星ひまなく顯れけるにより北朝に於て陰陽寮の密奏志はくならずなり太平記

二月大 二十六日 將軍塚鳴動し兵馬のはせちかふる音半時はかりに及ぶこれをさくもの

不思議の思ひをなす太平記

廿七日 午時はかり清水寺炎上すといへとも本尊のつゝ、かなく取出し奉る太平記 園大曆 如是院年代記○異本太平記には天火なりとあるす

三月小 十日 去年の春高師直か爲に皇居をはしめ堂社まで焼けたりけれの吉野の奥穴太

といふ所にわつかなる黒木の御所を作られて行在となし給ふされは女院皇后宮をはしめ卿相雲客にいたるまで淺間なる柴茸の庵に住侘給ひける是日新待賢門院先帝の御廟をゆかしく思ひ御參詣ありけるに藏王堂をはしめみな煙となり跡たになかりけれとも御廟の花のみむかしに替らす色香を濃て咲たりけれの「みよしのはみしにもわらすわれにけりわたなる花は猶のこれともさて此邊に咲たる櫻花を一ふさつゝみ御文にそへ宗良親王の

御許に贈り給ひしかは宮御歌のあはれさを御覽ありて御返しに「今見てもねもほゆるかなれくれにし君か御かけや花にそふらむ」たつねみる人の爲にや殘けんれなしかさしのみよしのゝ花と遊はされけるどなん新葉集 李花集

四月大 十一日 右兵衛佐直冬太平記に右兵衛佐又宮内大輔に作る紀州より歸りてのち宮内大輔になりし成へしをして備前國に向ひしむ直

冬は父尊氏と快からすこのたひ西國の探題となり多勢を引率し彼國に赴く事も皆直義の推舉によれる所なりと聞ゆ程なく備後國鞆に下着し八ヶ國の成敗を司る太平記 園大曆

五月大

六月小 十一日 祇園の修行行惠といふものあり四條河原に橋をわたしてのち新座本座の

田樂を合せ能くらへをを催しける是は賤しき者のみ見物に群參し興すへき事なるに比日田樂都に流行する折なれば此場にのそみ見物あらんと公家武家八十三間か程に二重三重の棧舗をかまへ結構を盡せる事夥し其藝能人間の業とも見えず感興身に餘る所に尊氏の棧舗の邊より動き出あれやゝとみるうちに上下の棧舗將基倒の如く一度に傾き倒れけるされはこの爲に打殺さるゝ者數をたらず奇代の珍事といふへし梶井宮も見物し給ひしに御腰をうちそんし給ひけり何者かしたりけん四條河原に三首の狂歌を書付たり「釘付にしたるさしきの倒るゝはかち井の宮の不覺なりけりまた二條關白も見給ひしかは「てんかくの將基倒の棧舗にハ王はかりこそあからさりけれ又一首には「去年はいくさとしは棧舗うち死の所は同じ四條なりけりかくて其翌日終日終夜大雨ふる



十四日 祇國神幸の御道を清めける太平記

十九日 京師地震す皇年代 畧記

廿六日 太白星歳星辰星相犯す太平記 園大曆

廿八日 太白星歳星月と井に聚る園大曆

閏六月大 三日 石清水の社鳴動し雲間にひかりある事電光の如し園大曆 毛利 家本太平記

此ころより足利直義高師直と不快の事ありて洛中騒動し終に金革を動かす其起り一朝一夕の間にあらず直義天下の權をとりしのは専ら禪室に入て其宗要を夢窓國師に學はれける其比國師の法眷に妙吉侍者と云ける僧あり國師の推舉を以て直義にまみゆる事を得たり直義もこの妙吉を信仰ありしまゝに一條堀川村雲尻橋といふ所に一寺を開基なしければ直義に媚を求るものこの僧にちかつかさるはなしされは一日の布施一座の引出物山のとくにそ積かさねける是を聞師直兄弟は妙吉か智惠才學さそあるらんと欺て一度も相看せず却てあしくあたりければ妙吉心に安からぬことにれもひてそ居たりける爰に又上杉伊豆守重能畠山大藏少輔直宗二人は師直兄弟と快からずいかにもして彼等兄弟を失ひはやと思慮をめぐらしける所に妙吉も師直兄弟をうらみ居るよしを聞出し是究竟の事なりと悦び彼僧と交をふかくし師直兄弟誅伐の事をはかり終に直義にも申すゝめしかは直義のこれを兄の尊氏にもあらせす師直を亡さんとはかられけり是とき師泰の河内に在陣なれば後日に討手を下すへしまつ師直を誅すへしと其頃大力の聞えある大高伊豫守と

宍戸安藝守を組手にさため師直を召す師直の是を夢にもあらず三條殿の直義の 館なり亭に行むかひ六間の客殿に座したりける粟飯原下總守清胤はしめは上杉畠山齋藤等と同じく直義同意のものなりしに俄に心變してければ些と色代する様にてきつと胸をなしければ師直心はやく是を心得假初に出る體にて門前にうち出馬をはせて宿所にを歸りける夜に入り粟飯原清胤齋藤五郎左衛門入道二人師直か許に行隱謀の次第一々に告たりければ師直是より用心厳しく一族郎従を近邊の在家に宿さしめ虚病を構へ出仕をもせさりける太平記 井異本妙吉侍者京を忍ひ出て備後國にいたるこれ直義の使として兵衛佐直冬の居給ふ輛に赴く所なり園大曆

七月小

八月大 六日 去年の春より河内國石川に陣して楠勢と接戦に及びける高師泰は兄師直か許より申贈りける事あるにより京師に歸んとれもひ紀伊國より畠山左京大夫國清をよひて石川に陣せしめ京に歸らんとする所に直義このよしをき、師泰大勢にて上洛なさはおしかるへしかれか心をとらんと飯尾修理進出道を使になし師泰か陣に遣ひし武藏守か事はまはし世務をどゝめぬ今よりのち越後守をして管領となさしむるのよし申されしかは師泰使に對面しいかさま枝を伐て根をたゝんとの御意なるへし罷上りてこそ御返事は中へきに候と申きり其勢三千餘騎石川の陣をうつちける天正本 太平記九日 高師泰の去る六日に石川を發し近國の勢五千餘騎弓箭を携へ帖楯持楯などを七千







十五日 師直妙吉侍者をめしとらんとて人を遣しければや逐電して行方をあらず坊内をさかし求るに外法雜行の秘書頓法秘見の像其外希有の秘藥不思議の穢物を見出しける前代未聞の不思議なりとて辰橋村雲の寺をは悉く打破て取捨ける太平記并に異本〇太平記に京夢窓國師の法眷にて錦小路殿の師なり武藏守師直にくまれ關東へ下向し鎌倉五山淨智寺に住し大同妙吉大和尚と號す同所五山壽福寺住心印可直和尚の師なり悟道發明の人法身堅固なるをふらすして太平記にふるせるは誤なりといふ鎌倉の事をふるせるせしものにならぬ妙吉の事見ゆおもふに太平記は事と好みてかくはふるせるせしものならぬ他は妙吉の事跡を詳にせし正史を見す

廿四日 今度一亂の張本人なりとて畠山直宗上杉重能二人を越前國になかされ共に江守の庄に居らしめ八木中務大輔光照あるひは八木光勝に作り又八木入道光性ともふるせりにを預けられける太平記

廿五日 今上ふかくたのみたまふとあるにより兼て管領する如く觀心寺にして河内國小高瀬の庄を知行すへきよし勅命あり河内國觀心寺古文書

九月小 十三日 高師直か權勢日比に倍しければ直義方の人々の眉を鑿むといへとも詮かたなしさきに足利直冬は中國の探題となり備後國鞆に在けるを師直近國に下知し討取るへしと相觸ける是を聞て杉原又四郎異本杉坂に作る名は利孝二百餘騎を相具しこの夜不意に直冬か館に推寄たり折ふし勢なかりしかは直冬も討たれぬへかりしを磯部左近將監元相か若黨防きたゝかふうちこの所をのかれ河尻肥後守幸俊か船にのりうつり肥後國迄を落られける

直冬に志ふかき者は従ふも多かりける折ふし月明らかにして旅泊の思ひいと切なりしかは直冬の「梓弓我こそあらめ引つれて人にさへうき月を見せつると打詠しければさく人袖を濡しける太平記

當月北朝に於て足利直義左兵衛督を辭す公卿補任

十月大 四日 高師直兄弟は直義をうらむること猶深かりければ天下の政務萬事口入に及ぬす尊氏のもとより謙讓あれいとて去る興國元年北朝の曆應三年より謙倉に下向ありける尊氏の嫡男左馬頭義詮をめしのはせ高師直兄弟諸事をはからふへしと議定ありしかは事によしを鎌倉に達し今日義詮かの地を發足すと聞ゆ太平記

廿日 左馬頭義詮鎌倉より上洛すと聞えしかは貴賤巷にみちて是を見物す在京の大名の迎の爲とて勢田にいたれば東國の大名川越高坂等の送りの爲に上洛す其行粧花やかなり義詮今宵のまつ尊氏の亭に到着す此よしを聞しめされ仙洞より勸修寺大納言顯經をして上洛を賀し給ふ太平記東寺長者補任異本太平記に廿二日よ

廿六日 義詮今日より三條坊門なりける直義の宿所にうつりければ直義の世の交をやめ錦小路の細川顯氏の亭に住居せらる太平記異本太平記に十二月三日直義錦小路の亭に住居うつすといふ

當月高師直九國に下知しさに備後國を落たりける足利直冬をうちとるへしと觸たりける島津氏古文書

十一月小 八日 去月まで左馬頭義詮鎌倉にありしかは新田殿の一族をはしめ官軍にこゝろさす者とも義兵を擧ぐへき便あしかりし所に上洛せられければよき隙を得たりとよろこひ旗を擧へしと催されける此よしはやくも京都に聞えしにより尊氏の末男光王丸とて今とし八歳になりしを左馬助になし基氏と名のらせまた鎌倉に下向なさしむこの時より



上杉憲顯高師冬二人執事となる太平記喜連川系圖神明鏡合考十一月八日發して鎌倉に至るさいふもの姑く南朝編年記畧の説によれり

十二月大 八日 去る比より足利直義の錦小路の亭にうつりかすかに住居せられけるされども師直かうらみまいらす事猶深く終には失ひ申さん企あるよし聞及られければ直義はかりとをめぐらし今の身をも世をも捨たるやうを人にもあらせはやと思われければ年四十二歳といふに剃髪をとけ名を惠源と稱せらるこの、ちの玄惠法印はかり師直かゆるしを得惠源の隱栖にまいりけるまかる處に玄惠法印の此ころ病により參らさりしかは直義の許より藥を贈らるゝとて「なからへてとへとそ思ふ君ならて今いともものふ人もなき世にとありしかは法印の返事に感君一日恩招我百年魂扶病座床下披書拭涙痕と絶句一篇を賦して直義に答へしかはさく人涙を催しけり太平記

廿四日 高師直同師泰は上杉畠山をうらむる事猶やますして討手を越前國にそ下しける守護代八木光勝のものと上杉か下知にあたかふ者なりしかと思義を忘れ心を變し其夜上杉畠山をたはかり配所を出しかねて近邊のものに下知をなし討留よと觸れたりける畠山も上杉もこれをの夢にもあらず落行程に畠山大藏少輔直宗の足羽藤島の邊にいたるまかに追手來りてとてものかれかたしとおもひけれの主從十三人自害して死す上杉伊豆守重能もとものにのかれ出たりしかと女房の別れをかなしみ泣居たりける處を八木か中間はせ來り終に重能をさし殺しける太平記常樂記には十二月廿日上杉畠山自害のよし見ゆ今南都本太平記に上るさて歸る山を越ゆる時「なきかゆく苦の下みちつれもなくひさり歸るの山の名をうきさて京にいたりしに重能の首も首着しければ是を乞ひて鳥邊野の煙をなしける此ときうたに「思ひきや越路に消し夕けふり都の空にまたた

んさばと見ゆこれと太平記第十八には一宮の御息所のうたさなせりいづれは是なる事をあらす流布本には此歌と載せず

廿六日 北朝に於て崇光院位をうけ給ひしかは世の亂によりて三月七日より大禮延引に及び今日にいたりて漸く行ゆる太平記

今年の秋足利直冬備後を落て河尻肥後守幸俊か許に在りけるを足利尊氏國々に下知し討とるへきよし相觸るゝといへとも元よりは師直か所爲なる事を人もよく知りたりしかは敢て命に應ずるものなし太宰少貳いか、れもひけん直冬を婿とし近國をうちまたかへんと企たりければ筑紫九國其催促に應ずる兵少からずかゝりけれの宮方將軍方直冬方とて九國の三にわかれ合戦やむときなかりける太平記

今年九州の探題一色太郎入道々俗名子息左京大夫直氏舍弟右馬頭教光の直冬と合戦に及び教光毎度武勇を顯へすといへとも終に直冬にうち負しゆへ二手になり飯守嶽の城に楯籠り檄を京師にはせて援兵を請ふ天正本太平記菊池傳記に直冬かた河尻幸俊の兵宮方の鹿子木大炊池光と合戦とさくる處に河尻大にうち負しゆへは終に剃髪とさくる菊池に降参すといふ

今年薩摩國に於て島津上總入道も直冬の手に屬す島津氏古文書菊池傳記に今年肥後國玉名郡高瀬ふ今もこの寺には當時の文書多く藏するよし見ゆ

今年畠山國清の高師泰と相替り石河川原に在陣し楠勢と相對し合戦やむひまなかりける太平記信濃宮傳に今年上野國新庄寺尾城に宗良親王居給ひしは近國の官兵はせあゝまり義兵と起し給ふといへり

南山巡狩録卷第六終



南山巡狩録卷第七

大帥公弼 編

後村上院 大和國吉野郡穴太  
を以て皇居とす

正平五年庚寅 北朝觀應元年

正月小 十一日 赤松入道圓心行年七十四歳にして卒す 常樂記  
系圖

十六日 京師雷雨 祇園修行  
日記抄

十八日 足利義詮北朝にて昇殿を所望す 園大

二月大 十四日 高麗國の使萬戶左右衛保勝中郎將金龍檢校左右衛保中郎將於重文攝津國

福原兵庫の島に着岸し書を京師にいたし隣交を請ふ 善隣國  
寶記

十八日 兼好法師伊賀國見山の麓奈保村に於て入寂す 年六十八 碑文より推考○僧支考柏崎永  
以土肥經平等か書たりし兼好

の傳に園、曆と多く引たるものなるに當り伊賀國にて兼好法師病にかゝるよし京師に聞えしは典藥頭和氣清元と下され病を見せしめ米三十石を賜はり病用をたすけらる兼好朝恩ふかき事は謝し申さるへとも無常の門はのしかたして兼好も程なく寂しければ二月廿七日北朝より權僧部を贈らるるといふ是は園大曆に見合するに事跡なしともより園大曆は園本なれば全本にはこの事載せしにやあらす又彼兼好の傳のなかに奈保村の墓には卒する日二月十五日とあるす五は八の字の損せしより見誤れるにやまた高野山に藏する位牌には四月八日とあるす是は四月八日七々の相當なるかゆへその日をあるし併養せしものならんといふ土肥經平か春湊浪話といふ隨筆のなかに収めし兼好の傳には徒然草の文を考ふれば上卷は建武三年より前にあるし下卷は建武三年より前に記せし事分明なり扱出家のち十五年を歴て延元三年(北朝の曆應元年)及び伊賀國見山の麓に住せしなるへし彼のつれづれの下卷の比先帝(後醍醐)友もかな都戀しう覺ゆるとありしからば下卷は國見山の庵にて書し筆さおのつから見えたり俗たりし比先帝(後醍醐)いまた坊にておはせし時より常にあたしくつかへまいらせたりし其志を變せざりし證は下卷まで先帝さかす當代とあるべり又南朝につかへし人を多く書せたり是等にて兼好か心推はかるへしされは吉野へ先帝移り給ひしものち其あ

たりちかくおのれも居移しける成へし高師直か爲に鹽治の妻の許へ觀書を書たりしを世にかけか一生の過のよし論したりといへとも是は兼好かふかき心ある事にて北朝の爲に諷の起らんは尤好める事なればはるこひて書しならんさすれば兼好は全く南朝の爲に内閣をなす北朝の事をも通しけるなるへし今四百三十年に及びて兼好か志をふる人なきは口惜み次第なりと見ゆ又伊勢平藏貞丈に是を反し兼好は好色の人にて師直か爲に觀書をかきたりしとて聊もなすまし又今より咎むへき程の人柄にもあらずといふまた妙松丸か書たりしといふ末のいさなみと題せし文に兼好法師臨終の事とせたりこの妙松丸は駿河の今川か館にいたり兼好か臨終の事を言たりしに今川了俊其際の事なご問申されければ兼好みまかりな前月の月一ありきたりに人にしられの身の程やみそかにちかき明かたの月と打詠し終焉は眠か如くいふ事もなくと申たりければ次の日より府の莊殿院にてめてたき佛事なご執行しけるといふ其餘三光院殿の眞玉集宗祇法師か難談抄美濃の僧支考か兼好法師の考柏崎永か兼好考なごあれとも本書に引用て不用の事多ければ脱筆せりとも三光院内府の説の如くならば徒然草は兼好法師の自著にはあらず妙松丸か書しものなり妙松丸は命松丸も書けりくはしくは其書に就て尋ねし

廿七日 北朝に於て代始により貞和を改め觀應と改元あるこの文字不吉なる由菅原在登 善隣國  
寶記

難したりしとなん 太平記歴代皇記○神明鏡  
には三月廿八日に作る

この日高麗の使中請大夫前典義令相公金一といふもの又來朝して京にいたる 善隣國  
寶記

三月小 二日 北小路玄惠法印身まかりけるよしをき、足利直義入道いつそや病中に贈答

せし絶句の紙の奥に六輪般若の直文を書寫し追善をせられける 太平記○玄惠法印は當世の博識にして世に太平記の撰者たる事よくある所なりされともいつれを正本さしいつれを類本とせんとも詳にせず異本の弁は参考本の私にしろしたるはこゝにのせす流布の本に理盡抄の説を引て太平記は夢人の筆になる事をあかきり實にふかありけるものかいた

四月大 十日 明朝の船一艘筑前國奥濱津に着岸す其なかに日本の人十八人彼國の舟主十 祇園修行日記  
抄○園大曆

一切有爲  
法の文な

玄惠か書  
たるは梅  
松篇なる  
へしと堀  
東先生い  
はれたり



十八日 京師天龍寺の雲居庵にして高麗の使を饗應す善隣國寶記

廿九日 北朝にて新帝位に即給ふにより國郡の卜定あり拔穂の使を丹波國に下さる園大

記平

去月より今月に至て入幡の社神異あり園大曆○菊池傳記に此ころ北朝より鎮西に置たりける一色右馬頭師直か下知にあたり九國に居給ふ足利直冬と討取るへしと彼地に攻めす直冬にも是とき小貳大友の兵をさもなひ防戦せらるるにより數日に及びて勝敗を決せず

爰に高師直同師泰は其威日比に倍し惡行言語に斷たる事多かりけるなかにも師泰東山の枝橋といふ處に山莊をつくらんと其地の主を聞に北野の長者菅原在登なるよし申たりしかはやかて使者をたて此所を所望せし所に在登答てこの地は父祖墳墓の地に候なれば彼墓を他所に移し申さん程御待候へかしとありけるを師泰は在登か惜むそと心得其墓崩して捨よとて人夫五六百人つかはし戸を掘捨けるを無慙なるこの前を四條大納言隆蔭の青侍大藏少輔重藤古見源左衛門宗久といふ者通るとてあな淺間しとさゝやきけるを師泰か中間主にかくと告げる程に大に是をいかりかの青侍二人を呼戻し夫になして遣ひける二人は立烏帽子きながら土石を運ひける其ふるまひを見る人にとに命いれしき物かなと爪彈をそなしたりける太平記并異本

五月小 十六日 師泰か東山の山莊といふの菅家の墓所をうかち經營しけれいかなる嗚呼の者か「なき人のあるしの卒都婆堀棄てはかなかりける家つくりかなといふ落首を書てたてたりける師泰是を見いかさま在登の所行なるへしとれもひ大にいかり大覺寺二品

寬尊親王の寵童吾護丸或は吾護と五々丸まといふ大力の兒をかたらひ自然の宿意に事よせ在

登其子在弘青侍一人を殺させける在登は年七十九在弘の二十二いかなる神罪にや有けん

かく淺間しき横死をとけぬる事かと申人も多かりける太平記異本太平記公卿補任

廿三日 京師大に地震し山谷をうかち土地を裂く祇園修行日記抄

廿五日 京師また地震す同上

廿八日 鴨川洪水して四條河原の往來をたつ同上

廿九日 京師地震する事寅刻より午刻に及ぶ同上

六月大 十九日 後醍醐天皇の皇子仁和寺法仁親王彼寺にて御灌頂とし廿六にならせ給へ仁和寺御傳○案するにこの法仁親王法體にてましくけるゆへ北朝にさまりつゝなかく居給へるなるへし

廿一日 石見國に於て三角入道佐和善四郎かともから足利直冬を大將とし近國を掠め犯

せしかは九國大に騒動す高師泰討手の大將を奉り今日京をたつて淀に着す師泰兼て北朝

に請ひ院宣錦の御旗を賜はり用意にもち行けり祇園修行日記抄 太平記

廿二日 京師地震す祇園修行日記抄

廿五日 京師また地震すこの日師泰淀をたち備後に下向す祇園修行日記抄

七月大 二日 將軍塚鳴動す同上○上州志に故義貞朝臣の遺臣藤田八郎左衛門政詮當月朔日上野國に於て卒す同國山田郡宗壽寺に即ち藤田の開基にしてこの寺に當時の古文書多く藏する云

五日 土岐兵庫頭頼明入道周請法師いかなる故や有けん北朝を叛き美濃國に兵を起す正天

本太平記

山田郡或  
歟は新田郡



八日 京師大風 祇園修行日記抄

廿五日 土岐周請法師兵を起すゆへ京勢美濃國に打向ふ大事に及はんとする時は足利義詮高師直等も下向あるへしと其用意ひまなかりけり 園大曆

廿六日 土岐勢近江國山中の宿まで攻來りし由其聞えありて洛中頗る騒動に及ふ是によりて佐々木道譽義詮の命をうけ近江國に發向す 祇園修行日記抄

廿七日 仙洞より足利義詮及ひ高師直か出陣のはなむけにとて御馬をひかせ賜ひる 園大曆 是日高師直か二萬餘騎石見國に到着し明日こそ合戦あるへしと議しける所に寄手のなか

より森小太郎 異本太平記に毛利に作る又少輔太郎に作れるあり 高橋九郎左衛門二人真先に川に打入たり是を見て二人の郎從三谷か一族かれこれ五百餘騎つゝひてうちわたり向ひの岸にそ上りける元來佐和

善四郎か籠る所の青杉 或は青松 の城は名城にして相ならひたる丸屋 或は丸尻に作る又丸尾とさるす 鼓崎も要害よし城の麓に淺深もあらぬ大河ながれたるを森高橋先懸せしに勵まされ京勢のこらす川

をわたりける程に佐和もあはし防ぎ戦ふといへとも終に引退しかり師泰か勢勝にのりて麓まで攻寄たりされとも要害よければたやすく落へしとも見えさりけり 太平記并異本

廿八日 足利義詮美濃國に下向し土岐を征せんか爲高師直を召具しすてに京を發せんとす義詮は今夜上杉彈正少弼か許に止宿し明日こそ京を打立んと議する所に土岐勢美濃國

に引退くと聞ゆるゆへ義詮の勢路次に猶豫して其便をまつ 祇園修行日記抄園大曆 八月小 朔日 美濃國に於て合戦あり土岐方利なくして引退く 園大曆

十一日 京師北小路失火す 同上

この比美濃國に於て土岐勢うち負け討手に降參す其中に舟木入道土岐周請坊二人はこの所をのかれ行方をあらすうせけるゆへ追手を出しさかし求る程に舟木はうたれ周請坊は

生捕られける 園大曆太平記園大曆には周請坊を討取るよし見ゆ○舟木系圖と案するに舟木頼夏は初より武家に屬する事とれはさるよしみゆこの時うたれし舟木入道は頼夏か事にや

廿日 足利義詮美濃國より凱陣して尊氏の館に着すこの日土岐周請坊弟左衛門太夫頼直入道以下の生捕あるひは降人を具して入洛の事なれば見物の貴賤閭巷にみつ 園大曆○祇園修行日記抄に

は十八日 に作る 廿二日 足利左馬頭義詮今度土岐か一族を征伐せし賞により參議の中將にす 園大曆祇園修行日記抄

廿五日 石見國にては佐和善四郎か城々要害よくしてたやすく攻落すましく見えけるゆへ師泰きつと謀を案し出し六千騎の中より二十七人の剛の者を撰みうしろの山にのぼら

せ夜討にせんと忍はせけるまかるにこの山の獸是に驚き城ちかくまで逃出るを城兵捕へん爲に思ひくゝに追ひ行たり其隙に寄手二十七人彼城に押入り不意に攻たりしか佐和勢

防くへき術なく大將善四郎も終に自害してうせければ師泰思の外にこの城を攻落し勢ひに乗してのこる二ヶ城をも打なひけ今い三角入道か籠りたる三隅の城のみこたへたりさ

らひ彼城をこそ攻落すへしと衆議をなし直泰やかて發向せり 太平記○異本太平記に佐和善四郎はひはまたこの戦と廿六日の條にかけり



この日北朝に於て小笠原信濃守貞宗卒す年五十七歳系圖○貞宗は弓馬の道に達し世の尊敬を得し人なり其傳あまなく世に知る所なり  
廿七日 土岐周請坊同右衛門大夫入道樋口河原六波羅の焼野に於て殺さる祇園修行日記抄 園大

九月大 廿九日 肥後國の早馬京着し去年當國に下着ありし足利直冬近國をうちなひけ其威遠近に振ひ宅磨別當太郎高直も是にくみしたるうへ川尻と心を合せ鹿子木大炊介貞照を攻候なり早く討手を下さるへしと告たりける此よしをさし師直尊氏にむかひ今度の事の將軍みつから發向し給ひすの叶ふまじと存候其故は九國の者とも直冬にまたかひまいらすとたゞ將軍の君達に候へは内々の御志をよせ給ふならんと存るによりてなりた、夜を日に繼て御下向あるへしと申程に尊氏も是に同じ出陣を催されける太平記○櫻雲記に白河の住人結城三河守朝常其兄大藏少輔顯朝に背き再び宮方に屬す此比また北畠顯信朝臣も奥州に居給ふゆへ結城朝常と相具し石堂藏人入道秀慶と合戦に及び給ふといへり

十月小 十五日 小貳か代官として京に在ける者逐電し越中の守護桃井刑部大輔同兵庫助もまた京師を出奔す人その故をあらす祇園修行日記抄

十七日 九國の一色か許より飛脚京師に到來し大友小貳松浦草野足利直冬に與黨し其威を振ふ所なりはやく討手の勢下向あるへしと告たりける園大曆 祇園修行日記抄  
廿五日 足利直冬九國にありて近國をうち隨へたりといへとも天氣ならての私の本意をも達しかたしと思ひければ使を北朝にまいらせ師直兄弟を追討せんと請ひれし所に即時に直冬を左兵衛督になし鎮守府將軍に補せられ院宣をも下されはやく尊氏直義か鬱念

を散すへきよし仰下されけり太平記○太平記にはこの院宣を直義に賜ふよしあるしたれども直義は既に左兵衛督たりこゝに院宣の文に父叔兩將の鬱念と息むへしと見えたり直冬より

尊氏は父なり直義は叔なりされは直冬たる事必せりもし是を直義に賜ふ所とせば父叔の文にいたりて解すへからす抑直義の師直を誅せんとおもひし事は一朝の擧におらすこの故にまづ直冬を中國に下し外のすすけをもよひ置師直を誅すへきはかりこゝに露顯するの時妙吉侍者直冬の許に兵を起さしむこれ内外より政んはかりこゝなりあかるに其謀ならずして却て師直のため制せられ直義は入道せりこのうち師直は直冬の外にありて直義に應ずる事を恐れ中國の大名に下知し直冬を殺さん謀るこゝも人皆師直かこゝるより出て尊氏の下知にあらざる事を知るが故に其命にあたりばす却て直冬に與力するもの多しこゝにて師直もまた其意を推察し尊氏をすいめみつから中國に向はしむこの時にあたり直冬ひそかに人を京都におくり北朝の院宣を請ふ院もまた直義を比負あり師直をにくみ給ふが故に直冬か所望によらせ院宣を下されし所なるへしは参考本の太平記によりて見るへし

廿七日 足利直冬中國に蜂起するにより是を追伐せんか爲足利尊氏高師直を率ひて明日京を發足せらるへしと定めらるゝかるに今曉に及び左兵衛督入道惠源知久四郎左衛門尉一人を召具し何地ともなく逐電せらる貴賤是を聞て世の中いかになるらんと危ふみ思ひさるものなし師直まづ惠源入道をさかし求め其のち中國に發向あるへしと議したりしを尊氏答て中國發向の事の既に諸國に觸つかはしぬれ延引なすへからすと申され師直か議する所を用ひられすいよく明日出門のよし院に奏し申されしかり御馬御劔等を下され出陣を賀せられける太平記并異本 園大 祇園修行日記抄  
廿八日 尊氏僅に四五百騎の勢を率ひ西國に發向ある所に東寺邊に於て師直か旗さし落馬し手を損せしかは別人に代らせて旗をさしせける此勢其夜の淀に着陣す太平記 園大曆  
今度惠源入道出奔せし故を聞に師直このまきれに乗して入道を殺害申さんとはかりける故とを聞えし惠源入道京をのかれ出しよりまづ南都に着し内侍原法眼好專をたのみ忍は



内侍原は  
一條院坊  
官なり

れしに好専もかい／＼敷頼まれける故入道志はしは心を安しけり太平記并  
に天正本  
廿九日 石堂右馬助頼房京を出奔して大和に赴く是日尊氏の淀の陣より八幡山に參詣す

太平記并異  
本園大曆

爰にまた高師直は尊氏に添て西國に打むかふといへども惠源入道の事を心にかけて在所を  
さかし求むると急なり尊氏の是をうち捨出陣をいそかれけり志かるに惠源入道の内侍原  
か家に居給ふよし師直聞出し尊氏につけ御教書を請ひうけぬるむね漸々其聞えありしか  
の惠源入道大に驚きまた内侍原か許をもたち出て大和國の越智伊賀守をたのみかれか館  
に居られける園大曆天正本太  
平記と合考す

當月北朝より置かれける鎮西の探題一色入道國中の亂によりて肥前國草野城に楯籠る

祇園修行  
日記抄

十一月大 二日 尊氏山崎をたつて西國に發向すこの時賢俊僧正も尊氏にまたかひゆく

園大  
曆

四日 武家より園城寺の衆徒に命し勢多の橋を警固なさしむ古證  
文

六日 京師雷鳴す祇園修行  
日記抄

是日土岐周請坊か弟右衛門藏人佐々木道譽か手の者にうたるこれさきに周請か亂を起せ  
し時難をのかれける所なり又この比京に忍ひ居て義詮の館に夜討せはやく企たる土岐蜂  
屋か一類は時の侍所仁木頼章か爲に攻られ再び逐電して行方志らす成にけり園大曆 祇園  
修行日記抄

この比にあたり足利尊氏の兵庫に滞留す園大  
曆

十八日 尊氏備前國三石にありて近國の大名に下知しはやく／＼勢を出すへきよし相觸る

古證文  
豫章記

十九日 尊氏備前國福岡に着して、にて勢を揃へ直冬を攻んと企給ひしかども海上は船  
通せず陸路は雪に隔られかゝる勢なかりしか爰に月日を過されける太平  
記

去程に直義入道惠源の和國越智伊賀守か許に居給ふよし披露ありしかは近郷のもの興  
力するのみならず吉良治部大輔石堂右馬頭畠山阿波守國清河内國石川城を闊て馳加る程  
なりしかの近國に於て師直をうらむる者我も／＼とこれに加はり多勢に及びければ此う  
への何をか慎むへきと師直師泰誅伐の企憚る所もなかりけり天正本  
太平記

廿二日 足利直義入道惠源責入へしとて洛中騷動す園大  
曆

廿五日 北朝に於て足利義詮惠源入道の蜂起をき、東寺に要害を構ふ園大  
曆

この時足利直義入道河内國越智の城天正本太平記には越  
智と以て大和國とすにありて書牘をまため律僧を使と  
して尊氏の陣所に贈らる饗庭命鶴丸ひらき見るに直義入道尊氏に對しさらに別意あるに  
あらずひとへに師直兄弟等かふるまひをにくむ所なりとあり命鶴丸尊氏に執啓してのち  
ひそかに師直に示す師直やかてかの僧をとらへ京に返して仁木頼章にあつく園大  
曆

十二月小 五日 儀俄高山勢田の橋ちかくよせ來り佐々木五郎右衛門と合戦に及ぶ佐々木  
勢終に引退しかは寄手より橋を燒落す祇園修行日記抄の儀俄高山はおもふに直義  
方にはあらすせん年より宮方に屬せし所か



七日 足利直義入道惠源越智か館を出八幡まで攻よせ在家を焼はらひ大渡のはしを引く  
よし其聞えあり園大

この比直義か御方として赤江邊に陣するもの一萬人のかりに及ふ上同  
和田藏人宮方に於て多年の勳功あるにより三河國金谷庄を賜ひる和田氏古文書 諸家系圖纂

九日 入道惠源は都を仁木細川高家の一族に背かれてうかれ出ぬ大和河内和泉紀伊國は  
其比よしの、勅命にまたかひ今更武家に附たかふへしとも見えさうしかいかいせん  
とれもふ所に結句楠和田か一族とも官軍を率し襲ひ來るよし聞えしかり直義都に攻入ん  
につけても彼等を宥めずいあしかるへしと衆議一決し入道惠源先非を悔たるよし書狀に  
またいめ降參を申入られける行宮に於て諸卿僉議ありけるに洞院左大將實世卿申さるゝ  
は直義入道か申所甚偽れり譜代の家人に追出され身のをき所なき間天威を借ておのか宿  
意を達せんとなす抑この十六年かほと上一人より下百司千官にいたるまで鳳闕の雲を望  
み飛鳥の翅を鍛るゝ事みな直義か惡逆によれりあかるに今軍門に降るゝ天のあたふる所  
なり時に乘して是を誅せずんものちく臍を嚙へしとなり二條關白左大臣師基公 姑く思  
案して仰けるは今軍門に降る所の直義入道をゆるされなは君の天下を有たせ給へんと是  
より初るへしと有兩臣の異議得失につき諸卿の僉議まちくにして君も叡慮を傾給ふ漸  
有て北畠親房卿の直義入道か降參の條偽に似たりといへともまつかれか申旨にまかせら  
れ候へかしと申さるゝ程に諸卿もこの議に同せられ勅免あるへきにを定りける太平記

十三日 足利左馬頭入道直義先非を悔ひて行宮に降參しければ即ち綸旨を下されはやは  
や天下靜謐の謀をめぐらすへきよし勅詔を仰下さる太平記 雜日記 吉野御事書 異本太平記に左  
あるせりこれ直義かそむきし  
時は實に左馬頭たりし故なり 馬頭につくるにより今これにふたひて本文に

十七日 足利直義より左京太夫正雄の許に勅答の請文を奉る雜日記

廿一日 足利直義か手に加いらんか爲に上京せし東國の軍勢八幡にのほりて陣をとるゝ  
かのみならず細川陸奥守顯氏の四國の勢を催し京にうち上るよし其聞えあり園大

廿三日 足利尊氏上野國新田庄世良田右京亮桃井刑部大輔の跡を以て岩松直國にあたふ  
正木氏  
古文書

廿七日 和泉備後兩國に於て世良田右京亮の跡及び上野國新田庄内木崎安養寺等故義貞  
朝臣の跡を以て足利尊氏より岩松禪師頼宥にあたへらる正木氏古文書 此文書より案するに當時  
の命にあたりし事を知る又は比は尊氏京鎌倉にある時にあらす備後國にいたり  
直冬と對陣の時なり今尊氏の御教書といふものは不審なりもしくは基氏ならんか  
こゝにまた上杉民部大輔憲顯か養子左衛門藏人能憲櫻雲記に上杉能憲高師冬を攻て是を殺しそのの  
ゆ系圖によれば能憲は重行か子にして重能か養子なりとあり又一説には憲顯  
か子に作るいまた其可否をあらすよりて太平記の所見にあたりかひてあるす 父か代官にて上野國に居た  
りける所に俄に謀叛を起し惠源入道の味方となり旗をあくる程に民部大輔是を誅伐せん  
爲に彼國に下向するよしを披露しかしこに打向ふ所に忽ち能憲と同心し武藏國にうち越  
へ近國の軍兵を催促す高師冬是をきゝ八ヶ國の勢を相催すといへとも一騎も馳參るもの  
なし角ては叶ふましと思ひ基氏を先にたて僅に五百餘騎を率ひ上野國に打向ふあかるに



師冬か憑切たる兵とも路次に於て俄に心變りし基氏を奪ひたち去りけりこの時基氏の後見三戸七郎氏鎮氏鎮も師直の親族と見えたり同士討にあひ半死半生の體にて行方さへ知れざりしかり師冬いよ／＼氣を失ひこの所を落て甲斐國にいたり洲澤の城に籠りける太平記當月直義入道行宮に降參ありけるよし近國他國にかくれなかりしかり今迄武家方に屬せし輩吉野殿に降參し直義の手に加へるもの少からず畠山國清は石河川原にてひさしく榊正儀と對陣せしかとも和睦をなし是も宮方とを成にける太平記後醍醐天皇の皇子無文元選禪師の去る興國五年元朝に渡り給ひけるか今年義南菩薩碧岩珠首座と共に歸朝し筑前國博多の石城山にすませ給ひける無文禪師行狀

後村上院

穴太と以て皇居とす

正平六年辛卯

北朝觀應二年

正月大朔日

千葉助貞胤京師にて卒す年六十一常陸國本土寺過去帳

三日 桃井か勢和田か一族ともにも坂本に打上り火を擧たり園大曆○案するに桃井直常はいまた京に着せしして士卒のみ坂本に着し項日足利尊氏は直冬を征せん爲備前國に陣せられける所に京に軍起るべきよしを聞福岡を打ち入り洛をいそかれける程なく瀬川の宿に着しこゝにて評定し京に合戦あらひすみ

やかに打入なんもしよからすのまつ河内國にむかひ敵を討退んと猶豫をそせられける

太平記園大曆

七日 足利直義入道去年の冬より吉野殿に降參し大將軍の勅を奉り程なく京に攻入るへしと軍議せられければ和田楠の人々もこの手に加へり其勢七千餘騎とそあるしけるさらは尊氏入洛以前に義詮を追落せよと下知をつたへ各八幡山にを陣取る太平記

八日 桃井右馬權頭直常は越中國の守護にて在國たりけるか兼て相圖を定たりければ能登加賀越前勢七千餘騎を相催し夜を日に繼て攻上るといへども折節雪ふかゝりしかは道に手間とり漸く東坂本にそ着たりける太平記○案するに直常が勢坂本に着せし日詳ならずといへども十日の合戦より以前に在るへし太平記正月八日越中をたつさいふもの頗るうたひふへし

十日 足利尊氏山崎に到着しければやかて赤松美作守を大將となし大渡に於て矢合あり園大曆

十三日 上杉彈正少弼朝定同左馬助朝房京を出奔し直義の勢にくひりて八幡に上りしともわるひの東坂本にいたりしとも風聞一定せず武家方に於て是をき、彼二人か邸宅を打敗る園大曆

是日午刻のかり坂本勢き、良坂よりはせ下り松か崎藪里數ヶ所に火を擧て京中をなやます同上

十四日 洛中以外の外に騒動し貴賤肝をひやす暮に及び須賀壹岐守清秀か吉野殿に降參し



直義方に屬すへき企あるよし披露せしにより義詮勢をさしむけ清秀か宿所内裏の築地に攻よせしむ清秀は早々落うせしにより相残る一族とも少々よせ合せて合戦す晩景に及び義詮の申むねあるにより北朝の主上持明院殿に行幸し給ふ<sup>上</sup>

十五日 未明の比高越後守師泰か留守にのこりし者みつからその館を放火すつゝひて仁木兵部少輔頼章同右馬助高師直等か館十餘所おのゝ火をはなつ<sup>上</sup>

是日足利義詮の京にとゞまり坂本八幡の勢に相對し尊氏の勢をまちつけて合戦に及むとおもはれける所に初の程三萬餘騎とあるしける兵次第に落うせ今は僅に二千騎ばかりになりける間はいかさ味方の勢敵になると覺ゆると關をすへよと下知せられたれども關守と共に打連て落失る程なれば今は五百にも足らざりける此うへはひとまつ都をひらきて合戦のはかりとをめぐらさるへしと諫め申人もありけれ義詮も是に同し早天に西國をさして落られけりそのなかに阿保肥前守直實<sup>流布本に忠實に作一人の京にとゞまりひとたびは敵にかけ合はせんとぞ待居たり義詮程なく西の岡の邊にいたり給ひはるかに打のそめは旗三十流はかり翻して小松原よりかけ出る勢あり敵か味方かど人をつかひし見せしめ給ふに尊氏山陽道の勢二萬餘騎を引牽し上洛せらるゝにてそありける義詮よろこひ給ふ事限なし再ひ手分を成し京に打入り合戦あるへしとを議せられける去程に京都に於ての桃井直常山徒少々召具して仙洞に參り事よしを奏聞し御所を守護しまいらするあとより京に入る勢とも阿保肥前守か百騎はかりにて四條河原に控けると合戦</sup>

なす阿保もさまではたゝかはす弓矢の義は是迄なりと義詮か跡を追ひ山崎さして引て行く角て桂川より取て返す足利勢三手にわかれて京都へ打入りたりまつ一手は師直を大將にて仁木頼章舍弟義長細川清氏今川駿河守等其勢五千餘騎四條を東へうつ佐々木道譽の其勢七百餘騎東寺を東へうち出敵の不意を打破らんとす尊氏父子は二萬餘騎<sup>異本に道譽の勢と勢と六千とあるす上に尊氏の惣勢二萬餘騎とあるす時は此所と合はす</sup>にて二條を東へすゝまれける<sup>異本に九</sup>兩陣すてに相ちかつき賀茂川を前になしてそ扣へける爰に扇一揆のうちより秋山新藏人光政<sup>異本に九</sup>と名乗り廣言吐てすゝんたり是を見て京勢の中より阿保肥前守うつて出光政にかけ合せり秋山の棒阿保は太刀をもち秘術を盡して戦ふ程に敵御方數萬の兵拳を握て是を見る終には雙方打物を折しかい兩人は引わかれ數萬の兵入みたれてを戦ひけるすてに黄昏に及ふまで合戦ありといへども合圖相違やしたりけん八幡の官軍よせ來らねの桃井戦ひ屈し關山まで引退く<sup>園大層には法勝寺に陣す云</sup>今日河原のたゝかひに秋山阿保か勝負希代の見物なりしかは靈社の手向扇うちのはの繪に至り阿保秋山か河原いくさをかゝせぬ者そなかりける其夜尊氏は二條京極千手堂に陣をとり馳參る人もあるらんと推量する所に此手の勢落うせて大半八幡の陣にそ加はりける<sup>太平記并に天正本太平記○天正本には此時桃井方にて秋山新藏人愛子孫八久米三郎工藤三郎左衛門原軍の時討死といふは誤れる如し又太平記の文に政光はいづめしき男の體にふるり藤葉和歌集に光政の題しらすの歌を載たり我とこそ忘れはつさも後の世のむくひとなさし思はさるらん是によりて見る時は光政武勇人に勝れたるのみならずやさしき</sup>

十六日 尊氏か陣に加はる勢はなく結句みな落うせて直義か手に加はる程に洛中の合戦



は叶ふまじさらは西國に引退きひとまつ中國の勢を催促し其のちこそ合戦をはなすらめ  
とまた横雲の比なるに丹波路にこそ落られけれ父子一處にあらん事の計略なきに似たり  
とて義詮には仁木左京太夫頼章舎弟右京太夫義長を相副其勢二千餘騎丹波國井原のいは  
やといふ所にとゝめらるこの寺の衆徒義詮に屬せしかの兵糧の料城郭の便もよくそのう  
へ當國の住人萩野伯々部久下長澤等はせ集り保護しければ義詮もすこし心を安んじねの  
しける尊氏は篠村まで落延ひ八幡宮に參詣し祈願の事ありてのち丹波國佐々岐の庄を以  
て當社に寄附せられける太平記并異本條  
村八幡宮古文書  
京都に於て小笠原遠江守政長山名伊豆守佐々木入道善願千秋左衛門太夫高範等夜に入て  
のち直義方にはせ加はる園大

十七日 桃井直常か勢入洛しければ直常おのか舎弟等をして尊氏以下丹波路に没落せし  
事を仙洞に奏聞す上

この時天龍寺の夢想國師は等持院の祖曇和尚と相議し尊氏直義兄弟和睦の事を相はかり  
直義よりの告文を書て尊氏にまいらせらる上

十七日 爰に又高播磨守師冬は去年の冬東國に於て上杉憲顯等と合戦に及ひしといへど  
も終に打負しかの甲斐國に落下り洲崎の城に籠りける是をき、諏訪下宮の祝部神祇少  
副隆種六千餘騎の勢を以て李花集古證文等より考ふるに諏訪  
の神官は初より宮方に屬せしなりこの城をとり圍むと三日三夜に及  
ひけり大手の軍はけしかりしかの城兵こゝに向ひ防く所に諏訪か勢おもひよらぬ後の山

よりはせ下りて城に攻入し程に城兵八代六郎高金討死すかゝりしかの城は唯今落へしと  
見えたりけり爰に諏訪五郎眞直親諏訪か勢にあたかひ寄手にありけるか抑我身は執事  
の烏帽子として父子の契約あり今にあたりて不義の行迹あるへからすといひ寄手の大將  
に最期のいとまを請ひ忽ち城中にかけ入り城將自害の席にのそみ播磨守師冬と手を組腹  
かき切てを死たりける是を見て義を重んずる侍六十四人一同に自害しければ城の忽ち陥  
ける太平記十七并  
常樂記による

廿日 北朝給仕の公家父の洛にとゝまる武家の輩八幡に使者をつかはし或はかしこにい  
たりて直義今度の軍に勝利ありし事を賀したりける北朝の主上仙洞よりも勅使を下され  
勝軍のとを賀し下されけり園大

廿一日 直義入道山門に三ヶ庄を寄附し衆徒の心をとりこしらへことに勳功ありし者に  
は別に抽賞せられける上

廿三日 高越後守師泰は此時まで石見國に在陣し三角入道と雌雄を争ひ月日を過しける  
所に師直か飛脚到來し攝津播磨の間にて合戦事すてに急なり早く其國の合戦をさし置て  
馳上らるへし若中國の者ともかゝる時の弊に乗て道を塞んずる事もやあらんすらんと存  
候間武藏五郎を兼て備後へさしつかはす間中國の蜂起をまつめて行待申へしとを告た  
りける師泰是を聞て大に驚き石見を立て上れば武藏五郎其相圖を違へしと播磨をたち備  
後の石崎にそ着にける尊氏は山門八幡の敵に襲はれ播磨國書寫の坂本に落下り越後守師



泰は三角入道か城を攻かねて引退くと聞えしかば上杉朝房は八幡山を下り舟路をへて備後國鞆にあかる此手に加はる兵雲霞の如し去程に武藏五郎越後守は中國に逗留せず上洛をいそぐよし聞えければ上杉勢二千餘騎異本に或は三千に作る是を追うち上る正月廿三日流布本に十日の早旦に上杉か先勢五百餘騎師泰か後陣にうちける陶山か百餘騎の勢を目にかけて関を作る陶山取て返し相戦ふこの時陶山又次郎高直同又五郎異本に五郎に作る師高討死し郎等長谷與一原八郎左衛門小池新兵衛異本に新左衛門に作る以下皆切死にこそ死にけれ初の程は上杉方勝利を得たりしかども終には負色になり剩上杉も痛手を負ひぬれば此手に於てうたるもの三百餘騎異本に五百に作る創を被る者數をあらすみなり〴〵にそ落去ける此後は師泰か跡を追ふ勢もなく初度の軍にはうち勝ぬ機に乗てうつ程に美作國まで着陣すまかるに當國住人并和角田の者とも七百餘騎にて杉坂をさし塞てまちかけたり師泰か勢とも勝に乗たる時なれば一議にも及はずかの勢にうつてかゝり一軍に追ちらすされ師師泰夏喜悅の眉をひらき道をいそきて上洛す太平記并異本

廿八日 此比直義入道は八幡山に陣とり諸方の合圖をまたれけるうち知久四郎左衛門尉に千五百餘騎をさしそへ内侍原法眼好專を殺して參るへしと下知せらる好專は去年直義入道都を落たりし時おのか家に隠し置まいらせしかと直義好專をうたかひ再ひこゝを忍び出給ひし事あるにより今は八幡山にいたり直義入道に陣謝せはやとれもひし所に天亡の期や至りけん終に殺されける不便なりける事ともなり天正本太平記

二月小 朔日 越後守師泰武藏五郎師夏二人の去月廿三日備中の合戦に打勝喜悅の眉をひらき尊氏の居給ふ播磨國書寫の坂本にそ着たりける太平記

三日 石堂右馬權頭頼房愛曾伊勢守異本に伊賀守に作る遠充矢野異本に矢野邊に作る遠江守行泰以下五千餘騎異本に播磨國に到着し書寫坂本に寄へしと思ふ所に越後守師泰大勢にて彼山に加はるよしを聞さらり再び八幡の勢を請ひうくへしとまはらく同國光明寺に陣とりたり尊氏はをさし敵に勢のつかぬうち攻落せと下知せられ一萬餘騎を引牽し光明寺を取巻ける此とき尊氏の陣せられし所の引尾といひ師直か陣する所の泣尾とを申ける折にとりいま〴〵しき名なりけりと申人も多かりけり太平記

四日 この日より矢合し合戦ありといへとも城中勝利を得すといふ事なし爰に浦上七郎兵衛行景同五郎左衛門景嗣異本兵衛吉田彈正忠盛清長田民部丞資真異本或は資直とす菅野五郎左衛門景文異本晴元高田右馬允氏規浦兵庫入道木戸次郎企救豊前守政季今川修理進記利高田以下異本に載す等の赤松則祐か下知に應しさしも岨しき泣尾の坂を攻上りか楯の際まで着たりける此時寄手にて心を合せ一同に責かゝりなは城の落へかりけるを徒に見物してありける間浦上を始め攻入る寄手搔楯の下に射ふせられ元の陣へを引たりける城中に於ては是に機を得たりといへとも寄手は大勢にて圍たり城の淺間なり行すゑいかとおもふ所に伊勢の愛曾か召仕ける童に伊勢大神宮神託ありて此城守護ある程は落ましきよし身の毛もよたつはかりに靈驗のとありしかり石堂上杉を始としきく人喝仰せざるはなし赤松則祐寄手



に在りて是をき、傳へとは子息權頭朝範夢の告ありけれ、此合戦はかくしかるまし  
と覺悟をなし美作國に合戦あるを幸と爰をうち捨白旗城にを歸けるその、ちにいたり寄  
手にて落失る者多かりけり太平記

尊氏か勢の光明寺の城をとり圍み居たりけるに日たつみの方より雲ひとむら風に志  
たかひて飛揚す其下に鳶鳥飛ちりてちかくなる程によく見れば雲にもあらず無文の白旗  
なりしかは八幡大菩薩の加護ある所あはれ我陣にとまり給へと敵も味方も信心をこら  
すやかに此はた師直か陣に落か、れは師直兜をぬき左の袖にかの旗をうけとめ三度禮拜  
しよくく、是を見れば旗にはあらず何ともなき反古を二三十枚つきあつめうらに二首の  
歌をを書付けける「よしの山みねの嵐のはけしきに高き梢の花を散ゆく」かきりあらい秋  
もくれぬとむさしの、草のみなから霜かれにけり師直この歌の吉凶を尋ければ人みな吉  
祥ならんと會釋しけれども高家亡ふへき瑞ならんと思ひぬ人こそなかりけり太平記  
八日 上杉民部大輔數千の東國勢を率ひて上洛し直義か御方に屬す國太

十日 凶徒河内國大饗の城に籠るにより官軍岸和田か一族等はを攻る岸和田助  
陸奥國に於て畠山上野介高國討死す系圖櫻雲記に當月十三日奥州に於て吉良貞家岩切城を攻破りし  
の事跡詳ならずいへとも高國討死の事は参考太平記にも畠山高國其千國氏遊佐等百餘人命を損するよし見ゆこのた、かひ  
らすおもふに吉良貞家は奥州の武家方なれば宮方なりし畠山岩切城を攻めし時畠山討死せしものか  
十三日 尊氏師直主従は光明寺の城を取巻て居たりける所に赤松範資か許よりの脚力到  
來し石堂頼房異本に義基 畠山國清上杉義依光明寺の後詰として相向ふよしを告たりければ

からのひとまつこゝを退き神尾鷲林寺小清水の邊にて合戦あるへしと評定し兵庫にむか  
ひて引退く太平記  
國大曆

是日陸奥國に於て相馬出羽前司親胤なさに國司北畠顯家卿とさ下向の時より宮方に屬し忠  
節を盡せしにより彼國に於て四郡の守護職を賜はること元のことくことに當國司北畠顯信  
いふ成 下向あるの間其以前義兵をわけ官軍をたすくるに於てい忠節たるへしとなり此よ  
し宮方某の許より相馬か許へ申送らる相馬  
家傳

十八日 此時まで畠山國清は三千餘騎にて異本に播磨國東條に陣しけるか尊氏の光明寺  
をうち捨兵庫のかたへむかはるゝよ、とき、いつくにもあれ執事兄弟のあらんする所へ  
こそ向はめと湯山を南へ打越て打出の北なる小山に陣をとる光明寺にこもりける石堂上  
杉もかの城をは打捨て畠山と一手になる尊氏及び師直の勢の二萬餘騎異本に一昨夜軍の評  
定をなし敵を中にとりこめて合戦あるへしと手分をなす薬師寺次郎左衛門公義是をさ、  
いかさまこのたひの合戦御方の大勢をたのみ仕損ぬとおもひければ彌我大事なりと氣を  
勵し一手の勢二百餘騎雀の松原の木蔭にうち出て追手の軍今や初ると扣たり尊氏方より  
河野左衛門氏明高橋中務丞英光以北八郎本幡甲斐少目大旗一揆彼これ其勢六千餘騎異本  
千畠山か陣に推寄れば畠山か兵静りかへりて鬨をも合せす所々の木蔭にたちかくれて散  
々に射る後陣の勢は是を見てすゝみ得ず河津左衛門かくては叶ふまじ切てか、れと下知  
する程に抜つれてうつていさるされともこの勢も射すくめられ朱になりて居立たり畠山勢



いよく機にのり喚てかゝる尊氏か兵ともこれに避易し一度にとつとを引たりけるこのとき譽田彌次郎を始とし宗徒の京勢多くうたる畠山いくさには勝たりと見てければ上杉石堂か七百餘騎異本に五百もすゝんでかゝる尊氏の勢いなをもくつれ立矢一つも射すして逃たりけり梶原孫六異本に源六 同彈正忠も心ならず引退しか取て返しおもふ程に相たゝかひ孫六は夜にまきれて東陣にはせ歸れば彈正忠は藤田小次郎頼定猪俣彈正左衛門行法に取こめられて終にうたる爰に初より味方をはなれ雀松はらに陣したりし藥師寺公義か勢二百餘騎は石堂上杉か七百餘騎とかけ合はせかの勢を山際までまくりつつけつゝ味方をまといへとも一騎も來らぬゝ又浪打際に陣をとる石堂上杉かも其ものかさしとすゝみ來り追つ返しの十六度までたゝかひ今の公義か手に於て彈正左衛門義冬勘ヶ由左衛門義治等わつか六騎異本に十六騎を殘ける此勢にて猶も陣を居たりける所に松田左近將監重明すてにうたれぬへく見えけるを義冬遙にうちのそみわれこそ松田と覺ゆるを討すな人々どよゝりてかゝる程に敵の打なひき松田は命を助かりけりそのゝち公義のこゝかしこよりはせ集る敗北の勢百騎ばかりを引牽し湊川に馳着けるそもゝ今日のためかひに尊氏方多勢なりといへとも小勢の敵に念なく打負ぬる事たゝことにあらすこのさきの夜武藏五郎師夏と河津左衛門二人か見し夢少しもたかひすありければ今度の合戦いかゝあらんと人にも語り危きことに思ひしに果して軍にうち負たれば猶行するもいかゝあるらんと心をこそいためける太平記 并異本

廿日 去程に小清水雀松原のいくさに尊氏打負て二萬餘騎の勢松岡城に我もゝと込入ければ香の子を打たるか如くにて少しも動くへき様なかりけるされは城より外に追出し宗徒の人のみ城にこもりけるさなきたに落こゝる附たる者ともなれば是を幸と打連れゝ落行ける程に夜更たれば城中さらに人ありとも見えす尊氏師直をよひて城中の勢を問はるゝに今は師直か郎從赤松信濃守か勢かれこれ五百騎に過候のしと答ふ尊氏世の中今夜を限りこさんなれ面々其用意あるへしとて鎧を脱小具足はかりになり給へは高家の一族七人宗徒の侍三十三人異本に十二人赤松信濃守範資か一族三十二人是も同じく膝を屈し最期の酒宴にそ及はれけるかゝる所に東の木戸をあらゝかに敲く人あり諸人驚て誰人とどふにさきに城を落たりと聞えし饗場命鶴丸か聲にて御合體になり合戦は有まじきにて候粗忽に御自害候など呼はりけるいそぎ木戸をひらき尊氏の前にともなへは命鶴丸さきにこゝを落たりしは畠山阿波將監か陣にまかりむかひ候にて御合體ありたきよし申て候へは錦小路殿もたゝくれゝその事をのみ仰遣條執事兄弟の義もたゝ一往思ひおらする迄にて候なりとて八幡より下されし御文通候と取出して見せられ候つると命鶴丸委細に申ければ尊氏も師直もさては子細あらしと其夜の自害は止にけり師直は出家して參るか四國に落るかど評定ありけるに藥師寺公義など加様に力なき事を仰候そ六條判官爲義のむかしも候なれ剃髮の戸墨染の袖に血を淋て名を後代にけかさん事口惜かるへし四國に落るといふもまたあかるへからす細川陸奥守すてに三石に着て候と承ればとても叶ひ候



はし味方の勢のすかぬさきにひたすら討死と思召定めひとたひは敵にかゝりて御覽候より外は餘議有へしとも覺候はすと言葉すしく申けれども執事兄弟たゞ朦々たるばかりにて降參出家の議に落居したりけり公義涙をばらくとなかし嘆豎子ともにはかるにたらずと范増かいひけるも理かな此人々と死を共にしてもなりの高名かあるへき世を捨て此人の後生を吊ふにまかすと俄に出家を思ひたち「どれはうし取らぬ人の數ならず捨へきものは弓矢なりけりと打詠し高野山にそ趣ける其後公義の元可法師と名のり彼山に閑居しある時奥の院に通夜して「高野山うき世の夢も覺ぬへしその曉を松の嵐にと打なかめまた同し時に通世せし人の都にすむもの有ければ「世を捨る同し身なからすむ山の深きやふかきこゝろなるらんと申れくりければ彼ものよりの返しに「いとへたうき世をいとふ心たにふかくいふかき山ならずともとありけるとを元可法師かふるまいいとやさしくを聞えける太平記 園大曆 元可法師集 元可法師が集に同じ時世をのかれし人云は何人にや詳なら周章して自害せんとの催ありし廿二日廿三日比の事なるへし其故は園大曆二月廿一日の條に昨日命鶴降人となりて八幡に參るとあれは命鶴丸八幡に來りし廿二日の事也又同廿三日の條に將軍出現事命鶴丸武備禪門返事昨朝下向と見えたりあつらは廿二日命鶴丸直義の返翰と帶して播磨にむかひ和睦の事と披露せしも廿二三日比なるへし今本文には連書すといへとも園大曆の趣と味ふへし抑今度命鶴丸八幡にゆき和睦とこしらへしも其實はみな尊氏の命を得てはからひし事と見ゆはし

廿二日 後醍醐天皇の皇子北朝にとゞまり仁和寺に御入室ありける法仁親王二品にすゝみ給ふこれ彼朝よりの勅裁なり仁和寺御傳

廿五日 直義入道一子を八幡に召具し申されける所にかの陣中にて卒すとし五歳ときこ

園大曆

是日高師直兄弟は出家して上洛すへきに決定しけれども西國こそ加様に師直を背くもの多くとも東八ヶ國には基氏の執事高師冬あるうへの子細あらしとれもひければさすがに出家の事を猶豫して居たる所にある時衆の僧こゝにたつね來り去正月十七日師冬は諏訪の祝部か爲に自害しけるよしを告たりければ今は頼むへきかけもなきまゝにもしや命の助からん事もやと兄弟出家をなし師直は道常師泰の道勝と系圖には道昭に作り異本山口入道惠改て裳なし衣にさけ(提)さや(鞘)さけしありさま爪彈せぬ人をなかりける太平記

廿七日 尊氏舍弟直義との和睦とのひたりしかは上洛をせられけるこのとき師直兄弟はすてに出家となり同しく都に上りけるかさすかに恥かすとや思ひけん蓮の葉笠に面をかしく尊氏におくれてはあしかりなんと推察し引そふて打たりけり畠山上杉か者ともかねて議したる事なれば尊氏と師直とのあはひを隔んとまつ鷹角一揆七十騎にて是を遮るそのうち兩方に打ける者とも百騎二百騎馬を打ちみくする程に師直は心ならずもれし隔られ兵(武)庫川を過ける時分は尊氏に後る、事五十餘町に及ひけるやかて河をうち渡り小堤の上を過ける時三浦八郎左衛門澄知か中間二人走り寄り師直入道か蓮の葉笠を引切りて捨たりける八郎左衛門すかさす長刀の柄をとりへの師直をた、一うちに切落しやかて首を搔きりける半町ばかりあとにうちける師泰入道是を見て馬をかけたのけんとしける所を吉江小四郎時宣鎗をもつてさし通し是も首をそとりたりける其外豊前五郎を



は小柴新左衛門守國高備前守をば打野彌四郎幸政越後將監(師泰子)をば長尾彦四郎異本に彦次郎遠江次郎をい小田左衛門五郎惟則小林又次郎異本に又四郎教房彦部七郎をば小林掃部助梶原孫六をば佐々宇六郎左衛門久元山口新左衛門をば高山又次郎子經梶原孫七をい阿佐美三郎左衛門異本に宇佐美に作る鹿目平次左衛門直方は長尾三郎右衛門をうち取る河津左衛門は又三郎右衛門に作る小清水の合戦に痛手を蒙り塵取塵取は奥のいやにかくれはるか跡に來りけるか師直入道うたれたりと聞て辻堂に入り腹をきる武藏五郎(師直子)をば西左衛門四郎則基生捕けるか程なく首を切たりける師直か兵今までも猶七百餘騎ありけるか此とき十四人うたれし外は中間下部にいたるまで一人も死するものなくみなちり／＼にそ落うせける十四人の者どもは度々の合戦に名をわけし程の功の者なれともこの期に及ひては太刀を抜たる者もなくおめ／＼と首をかゝれけるいうたてかりける事ともなり太平記 園大曆 常樂記 公卿補任 〇廿七日園大曆常樂記等による

二十八日 尊氏京に歸る其體ひとへに流人の如く佐々木佐渡判官入道々譽是に相從ふ園大曆

是日四天王寺三昧院領新開庄與國中の勅裁にまかせ申へきよし法眼某行宮の勅命を奉りて播磨坊の許に國宣を賜ふ四天王寺秋野坊日(舊)記

二十九日 直義八幡より入洛して東寺の實相院に着しそれより諸大名扈從して入洛をどくる北朝より勅使として勸修寺大納言錦小路に行むかひ入洛を賀せらるゝ所に直義は幼息の觸穢有により門外に於て其旨を承へる太平記 園大曆 東寺長者補任

爰に又直義入道は去年の冬より南山に降參し官軍の惣大將となり八幡に陣をとり和田楠の人々と事を議し申されけるふかれとも直義の本意に出たる事ならねはさして南山の勅裁をうらみ參らする故もなく元の如く北朝に伺候したりけり直義等かそむき申せしよし行宮に聞之しかは北皇親房卿是をいかり直義か罪を責る所の書牘をつくりて贈られければ直義いはれなき事ともを返書にあらし返逆の色を顯はしける吉野御事書 太平記

當月一條關白左大臣經通の男内嗣或は内平に作る父と不和なりし故京都を去のひ出吉野の行宮につかへ給ひけり公卿補任

當月和田和泉守正武常陸宮の令旨を申くたし信濃國の住人諏訪彌三郎を宮方に招く古證

當月高師直等か首京着しければ等持院の長老旨別源葬禮をとりいとなみて下火の佛事をし給ひしに昨夜春園異本に園と風雨暴和枝吹落棠棣花といふ句の有けるを聞て皆人感涙をそなかしける太平記

三月大 二日 尊氏直義との和睦今日に及ひて事とのひしかは上杉顯能か高師直をみたりにうち取る條罪科のかれかたしとて流刑に處せらるへしと衆議あり園大曆

三日 尊氏に扈從して入洛せしもの四十二人恩賞を充行はる上

四日 さきに高師冬陸奥常陸等にありて結城七郎兵衛尉と合戦に及ぶ事ありまかるに今高師直兄弟殺害せられ彼か同族こと／＼く死するのうへに猶東國にのかれける師直か與



黨をも退治すへきよし足利直義結城か許に書をあたふ古證

六日 細川陸奥守顯氏大勢を率ひ丹波路に打むかひさきに京を落彼國に陣せらるゝ所の足利義詮を迎へんとすこの日直義入道舎兄尊氏を錦小路の亭に招き饗應數刻に及ふ園大曆  
十日 宰相中將義詮は細川顯氏とゝもに夜に入て京に着しまつ錦小路の亭にいたりて直義入道に對面す上

十七日 京師地震す皇年代

廿一日 足利尊氏同義詮直義入道とゝもに西山の西芳寺に遊ひて花を賞す園大曆○櫻雲記に於て北畠顯信卿吉良貞家と合戦に及ふ顯信卿打まけ給ふにより田村庄宇津峰の城に入給ふと云

四月小 十一日 京師地震す皇年代

廿五日 足利義詮三條坊門の館に於て評定始ありければ直義入道も行むかひて事を議す園大曆

五月小 朔日 蝕すといへとも雨ふりければ見えす上

四日 桃井右馬頭は直義入道とことさら交ありけるゆへ今夜も錦小路の亭に行て歸りけるか一人の勇士ありて右馬頭を突しといへとも用心の爲かねて物の具を着したれば其身つゝかなくしてかの者を召捕ふ上

六月大 朔日 征西將軍宮懷良親王肥後國八代の高田といふ所に御座ありければ菊池か一族守護し奉りけりこの時染草の刻板を彫しめ料用となし給ふ正平革の文并に土人の説等より推考す○愚得隨筆にその時征西將軍懷良

親王の築させ給ひしと今の世にも正平革といひて珍重す猿獅子牡丹唐草梅はちのかたありて小短冊のうち正平六年六月一日とあり肥後國熊本にて最初染しと上品としのち染しは惡しといへり

六日 陰寒冬日のとし園大曆

九日 陸奥國に於て結城七郎兵衛某宮方に屬し戦功ありけるゆへ右兵衛督某宮の仰をうけて七郎兵衛か忠節を賞す古證

廿五日 近江國の守護佐々木太夫判官氏頼は尊氏義詮直義三人不快なるにつけても一身の進退を定めかたくおもひければ出家遁世の身となり高野山にのほり閉籠りてを居たり天正本

爰にまた京都に於て尊氏兄弟こそ誠に織芥の隔もなく和睦をなし所存もなくおひしけれども其門葉に在て附鳳の勢を貪り攀龍の望を期する族の人の時を得たるを見ての猜み己か威を失へるを願ての憤を含ますといふ事なしされは石堂上杉桃井の讒を構へて將軍にまたかふ人々を失ひはやおもひ仁木細川土岐佐々木は種々のはかりことを運し錦小路殿方には人もなげに振舞ける此故に何くより馳寄とも知らぬ兵五百騎三百騎鹿谷北白河阿彌陀か峰にあつまり勢揃をなす事度々に及ぶ程に合戦近きに在りと見えたりける赤松律師則祐の初より上洛せず故大塔宮の若宮櫻雲記によれば諱は陸良一説には常隆を大將に申下し宮方隨一のこゝろさしを顯ひし西國の成敗を司り近國の勢をあつめ吉野十津川和田楠と牒し合せすてに都に攻入んとを催ける太平記

七月大 二日 岩松治部大少輔直國に足利直義入道より本領をあたへらる正木氏古文書○太平記園大曆等に



りて案するに足利尊氏同舍弟直義と初より不快の事なし義詮鎌倉より上京して政事と執れるよりのち直義と快からざる如しよりて今度兄弟和睦のひしこいへとも數月をへすして再び兄弟叔姪の間に隙出來て合戦起りし事とおもはる岩松直國にあたる所の本領安堵の書も直義よりの沙汰なる時は當時政事を專にせし事知るへし

四日 楠左馬權頭正儀信濃國の住人諏訪部三郎入道に下知しはやく義兵を舉凶徒を退治なすへきよしを申送る古證

八日 尊氏兄弟再び不和なるにより京中なにとなく騷動す園大

是日岸和田助氏等官軍を率ひ下村次郎左衛門平井入道か楯籠れる所の城を攻る岸和田助氏申狀

九日 この比楠か一族河内國より打て出在々所々を焼拂ひ狼藉に及ふの由京師にきこゆ園大

十日 政所管領二階堂美濃入道卒す常樂

十三日 播磨國に於て宮方案するに赤松則祐大塔若宮を守護し兵を起せし事上に蜂起せるにより義詮見たり義詮の播磨にむかふものは此兵にあはん爲歟

廿日 義詮と直義と不快なるにより洛中夜々用心の體なり直義は尊氏の館に行むかひ世務の事を辭退せらるゝゆへはらく無爲にを治りける園大

廿二日 土岐刑部少輔細川刑部大輔仁木右馬助其弟修理亮春日部雅樂助いかなる故にや有けん京を出奔す上

是日直義入道さきに政務の事を辭退せらるゝといへともいつれ元の如く沙汰あるへきよし上杉彈正少弼等をして入道の許に申贈らるゝと再三に及ひ入道も許容せられしかは終

に尊氏直義義詮三人告文を以て相約しまた和睦をそとゝのりれける上

廿四日 二階堂三河入道行珍海老名六郎細川阿波將監等京師を逐電す上

湯へ下ると披露し洛を出佐々木佐渡判官入道々譽は近江へ赤松筑前守貞範姪彌次郎師範

舍弟信濃五郎直頼系圖に信濃五郎と師範の兄に作るは播磨へ下向しける太平記の文理によれば仁木佐々木赤松大曆に姓氏のするものハ逐電せし月日の條にあるし所見なきものはこゝにのせたりよむ人その心あるへし

廿五日 宮方岸和田助氏和泉國陶器城に攻よせ戦をいとむといへとも勝負を決せず岸和田助氏申狀の櫻雲記にこの合戦を載たり

廿六日 去程に薩摩大隅等の國々の宮方武家方直冬方と三にわかれ互に合戦し勝敗更に決する事なしこの時武家の探題として西國に在ける今川了俊彼國々を平治せんとれもひければ頻に軍勢を催し合戦に及んとす島津氏古文書

廿八日 さきに佐々木道譽のれのか本國に歸り近江國に城を構へ軍の用意をなしけるかゆへ尊氏はを征しかつはかれを諭されんか爲京師を發足すこの時美濃國土岐か一族も蜂起するにより近江國靜謐のゝちかの一族を退治せられんと議せられける園大

廿九日 義詮播磨國に進發せんとれもはれし所に石橋左衛門佐和義俄に出家入道しける

ゆへ門出不吉などて出陣をとゝめらる園大

卅日 石堂入道天正本に石堂とのせす桃井右馬權頭直常二人直義入道の許に行て申けるのちか比諸國



の大名本國にはせ下りて内々は尊氏の命をうけ義詮の御教書を賜はりたる事と承候へはかく御用心もなく都に居給ひんいかゝにて候なりひとまつ北國に御越あらんかまかる時は越前の修理太夫高經加賀の富樫介高家能登の吉見三河守氏頼信濃の諏訪下宮の祝部等は無二の味方にて候程に此國々へはいかなる敵なりとも足を踏入候へきと餘議もなく見えけるゆへ直義入道前後の思案もなく彼等か申ひねにまたかひその夜篠峰越を北國のかたにそ落られける是を聞て御内の者の申に及はず在京の大名我もくくと直義の跡を追ひ落たりける程に今は京中に残る勢ありとも見えさりける太平記

八月小 朔日 桃井上杉以下數千騎を率ひ北國に趣く上

去程に直義入道は越前國敦賀津に着しける時の其勢一萬三千餘騎と聞えける所に勢日々に加はり程なく六萬餘騎とそ注しける此時もし京都に取て返し戦ひ給ひ、尊氏父子防禦の術は有ましかりしを長僉議に時日をうつされける抑直義兄弟叔姪の間合體ありなからこゝに及はれけるは南家の儒者藤原少納言有範といふものありて時々申ける議を用ひられしより終にこゝろをうつされしものなりと承る太平記○太平記三十直義京都退去の條によればすまかれとも園大曆七月廿八日の文に尊氏出陣の事跡見ゆるうへは直義京師を逐電せし時は尊氏在京の如く是る同月晦日は京にて直義の出奔を聞かるへき理なし園大曆是なるへし

三日 島津大隅左京進入道鎮西の宮に屬し奉りしかは令旨を下さる島津氏古文書

是日足利義詮播磨國に於て直義入道逐電のよしをき、京に歸りしかの勅使を下されて賀せらるゝこれ赤松を征せんか爲さきに彼國に下向せられし所なり園大曆

是日山名伊豆前司上野左馬助赤松次郎左衛門尉等若狹國を退去す古證

四日 岸和田助氏日野に於て凶徒と相戦ひ軍功あり岸和田助氏申狀○櫻雲記に和泉國井山城は官軍の籠れる所なりける所に武家方淡輪彦太郎といふもの攻來りて合戦ありといふ

五日 足利尊氏石山寺より京に歸陣す園大曆○櫻雲記にこの比三河國本野原に於て直義方富永高兼同直資足利方富永直兼と合戦に及び高兼直資勝利を失ひ終に討死す云

六日 是時直義入道は越前國金澤の城に居給ふ由聞えしかは尊氏猶も和順ありて直義の歸洛あらん事をのみ細川陸奥守顯氏を使となし懇の命をのへらる園大曆

このころ足利尊氏羽檄を諸國に飛し惠源入道出奔して北國にいたるの間國々の通路を塞き合戦に及ふへきよし命を傳ふ豫章記○小笠原氏古文書

七日 尊氏より法勝寺の慧鎮上人を使となし吉野の行宮にまいらせ平素の志を改め降參せん事を望み請ひる園大曆

十日 直義入道北國に下向のち越後國を歴て上野國に打入るへき風説あるにより尊氏再ひ檄を諸國にはせて直義入道の兵をさゝゆへき旨下知をなす豫章記○小笠原氏古文書

十二日 吉良治部大輔貞氏問注所美作守京を出奔して北國に趣くこれ直義入道の手に屬すへき爲なるへし園大曆



是日吉野の行宮に於て尊氏か降參を御許容なきによりさきに御使を奉りて皇居に赴ける  
法勝寺の惠鎮上人むなく京に歸る上

十六日 足利尊氏先帝後醍醐天皇の御爲に天龍寺に寺領を寄附し永く恩に報せんとす寺  
文書

十八日 尊氏高倉入道左兵衛督追討の宣旨を申請ひ近江國鏡の宿に着す其勢わつかに三  
百餘騎に過す佐々木道譽父子仁木義長土岐頼康等程なく此所にはせ加ひりしかの其勢漸  
く一萬餘騎にそ及ける太平  
記

扱も諸國に於て兵革さそひ起り京師あつかならざりしかは主上の土御門殿より持明院殿  
に行幸内侍所も同じく渡御ありて春宮直  
仁本院殿御同宿まし光  
院ける新院光明  
院は廣義門院  
の御所にわたらせ給ふとぞ聞えける續神皇  
正統記

同じ比伊勢の大神宮の寶殿鳴動し虚空に響の音ひく事半時はかり荒祭宮より鏑矢乾の  
方へとひ出外宮よりも神鏑西をさして出るよしさまくの注進ありしかの八みな恐怖の  
思をなす上

九月大 二日 是よりさき尊氏の勢の鏡宿をうつ立湯鋤野高月河原に陣とりたりと聞えし  
かは直義も細川陸奥守顯氏畠山阿波守國清桃井右馬頭直常を大將とし其勢二萬餘騎近江  
國へを向はせける以上太平記并に天正  
本を推考してあるす

まかるに近江國に於て兩陣行合けれの軍ありといへともはかく敷勝負はなし來る十日

雌雄を決すへき旨議定せらる太平記  
園大曆

三日 尊氏二階堂三河入道安威赤松妙善律師を使となし再び吉野の行宮にまいらせ頻に  
降參の事を望み請はる園大曆○案するに赤松律師則祐は大塔の若宮を申下し率りて既に官軍に屬せ  
り尊氏れをたたり降參の事を申請ひしゆへ終には勅免ありしとみえたり

是日武家より丹後國につかはせし上野左馬助宮方の爲にうたる上

四日 宮方結城某以下丹後國にうち入りしかは但馬國に於て志をよする者少からず園大  
曆○

七日 鴨社さまくの神異あり園大曆  
太平記

爰にまた佐々木氏頼か弟五郎左衛門尉定詮は氏頼か幼息千手丸系圖に千壽丸に作り  
義信の事なりとすを扶持し  
國の探題たりしかは一千餘騎を率して八相山に陣とりける直義の勢にそ加ひりける天正  
本太

八日 足利尊氏は多勢を率ひ湯鋤野を打ち八相山の麓へを寄られける此山は究竟の要  
害なりけるうへ宗徒の人々大勢にて陣を構たれの左右なく攻られしと見えしかる所  
に常國の住人熊谷備中守直高案内者なりければ八相山の東にあたりし小山の上に打上り  
味方の勢をさしまねく是を見て佐々木佐渡判官入道士岐三河守等良の山の端より攻よる  
是に驚き八相山にこもる勢とも思の外に色めく所を佐渡判官入道機にのりて息をもつか  
す攻かゝるこの時陣中に於て宗とたのみたる秋山新藏人光政粗忽の合戦を仕出し道譽か  
手の者多賀將監の爲に討れければ陣中いよく騒たち言甲斐なき敗北をすへかりしを佐



々々木五郎左衛門定詮大勢の中にかけ入り奮ひたゝかふ程に直義方の勢ども萬死を出にけ  
 らされども八相山の陣の落されぬ定詮のわか本國佐々木に引たりける間桃井右馬頭直常  
 はけふの恥をすゝかんと小江森八重濱に控へて三日まで滞留すそのうち八相山への尊氏  
 勢入かはりてを陣とりける 太平記并に異本○天正本太平記に此時尊氏直義義詮三人和睦あり天下の政務は義  
 詮にまかせ給ふへしと細川顯氏島國清頼に執し申たりしは直義も手細あらし  
 と領掌せられやうて金柱の大御堂にて尊氏兄弟義詮と和睦の對面ありし處に桃井直常この事を憤りけるゆへ和睦やふ  
 れ細川島山もまた尊氏方に屬したるよしみゆえつれども世なき直義は猶北國に在りて近江國へは打上らす今兄弟對面  
 のうち和睦ありしと  
 いふものうけつたし

九日 佐々木定詮はさき大敵の中をかけ破り佐々木にを歸りけるこの時當國の高山伊  
 豫守儀俄播磨守甲賀郡に起りしかの大原上野の一族等上野左京亮を大將とし武田掃部助  
 土岐原蜂屋彼これ合て二千餘騎鏡山に陣をとり石堂入道荒川入道同時に伊勢より打出て  
 かれ等に力を合せ探使をばせ定詮に牒しける 天正本  
 太平記

十二日 八相山に於て尊氏桃井か勢と相たゝかふ 古證  
 文

十三日 佐々木定詮鏡山にはせ加りければ儀俄高山彌勢にのり國中を推ければ佐々木四  
 郎左衛門尉澁川中務大輔直頼大將にて觀音寺城に楯籠りしも叶はしと思ひければ八相山  
 へ頻並をうつて急をつく 天正本  
 太平記  
 爰に桃井島山は八相山を落てのち衆議ありしかども一決せず桃井は本國に引返しけるゆ  
 へ島山國清のみ近江國にとゝまりまきりに兄弟の中直りをこしらへける直義おもふ所や  
 おはしけん其儀にまたかはすして居給ふを國清いかりて己か勢七百餘騎を引わけまた尊

氏の陣に降參すかゝりしのは縁を求めてみな八相山の陣にはせ加りける 太平  
 記

十四日 宮方より佐野親井三ヶ所に城を構ふ 岸和出助  
 氏申狀

十七日に尊氏觀音寺城の急をきゝ佐々木佐渡判官入道道譽同子息近江判官秀綱舍弟五郎  
 左衛門尉高秀に命し是を救はしむ此勢蒲生野にうち出舟岡山の麓に陣とりたり鏡山の者  
 ども是を見て即時によせ手にかけて合せ入みたれて相戦ふなかにも佐々木定詮の道譽父子  
 かつかれたる勢に一當馳合するぞ見えし道譽か者どもひらきなき散々に敗北す道譽  
 父子舟岡山を越ゆる比はすてに危く見えたる所に佐々木加治豊前三六郎左衛門尉及ひ  
 譜代の若黨志田二郎左衛門尉榮重 異本に  
 赤田 二人取て返し戦死するひまに道譽漸くこの場を  
 のかれその夜甲賀郡まで着にける是を聞て觀音寺の城に楯籠りし澁川中務大輔直頼を佐  
 々木四郎左衛門尉も城を落八相山の陣にを加はりける 太平記并に天正本○櫻雲記に官軍の籠れる和  
 泉國井山城に武家方より寄來り九月十八日よ  
 り十一月廿五日  
 まで合戦に及

廿日 佐々木定詮の觀音寺城に入替りて楯籠りしかは石堂入道子息頼房荒川三河入道上  
 野修理亮上野左京亮高山伊豫守頼貞舍弟山城守儀俄播磨守土岐原蜂屋を始とし宗徒の大  
 將十三人都合其勢三萬餘騎この山に集まりさしも高き山を一つも残らす陣とゞける去程  
 に佐々木道譽は甲賀庄に着し時其勢僅に三百騎にもたさりける道譽このまゝに引籠な  
 はあしかるへしとおもひければ八尾城に箭火をたかせその身の愛智河原に打て出まはら  
 に陣をそ取たりける其のち合力の爲仁木義長三千餘騎を率しこの陣に加はりける 天正本  
 太平記



廿五日 細川伊豫守元氏近江國の合戦に手負しかの京に歸る園大

廿八日 筑前國全環に於て合戦武家方島津又三郎底を蒙る島津氏古文書

晦日 天龍寺の開山夢窓國師入滅常樂記

當月北朝にて龜山院の皇子常盤井式部卿恒明親王薨し給ふ皇胤紹運錄

當月足利直冬鎮西に旗を擧て直義入道と牒し合のせ京に入んと企つ園大

十月大 二日 常陸國ことく宮方に歸伏せしかの宮も右馬權頭清顯朝臣を召具せられ

猶陸奥國の宮方を催し給はん爲彼國に下向あるへきよしを相議せらる此時結城三河守舊

功を忘れ奉らすまた宮に志をよせ奉りしかは今にあたり早々旗を擧へきなりもし御手に

屬して忠功あらは本領を賜のるのうへ高野郡の地頭職をも充行はるへき旨令旨を下さる

結城氏古文書

三日 紀伊國布施屋の郷の地頭職を以て二見左衛門大夫に下し賜ふ東南院古文書

五日 直義入道北國より關東へ下向するの聞えあるにより尊氏諸國に下知して通路を塞

かしむ小笠原氏古文書

十一日 相馬出羽前司かねて宮方に參るへきのよし申贈るの所今に其事なきによりこれ

を催促し給ふ且の行方郡のうち四ヶ村を以て兵糧の料用に充らるゝ旨友住宮の仰を奉り

て是を傳ふ相馬家傳

今の知恩の本院の所なり

十四日 足利尊氏同義詮近江國より歸洛し給はんとてまづ常在光院に到着す園大

十八日 直義入道は越前國に居給ふ所に從兵次第に落うせけるゆへかくてはこゝに居住

の事あしかるへしひとまづ北陸道をへて鎌倉に下向あるにかしと議せられけるかゝり

けれの諸手の合圖いたつらになり近江國觀音寺城にこもりし者さへ落うせ多日の大功一

時にむなしくなりぬへしと見えたりけり太平記并異本○天正本太平記に直義越前を發するを以て十月十八日に今これに從ふ

廿一日 陸奥國に於て結城三河守宮方に屬すといへともいまた義兵をわけさるによりは

やく軍勢を出すへき由右馬權頭清顯朝臣宮の仰を奉り頻に是を催促す結城氏古文書

廿二日 陸奥國に於て宇津峯宮は伊達田村等の一族を催し御勢を出さるゝの所相馬親胤

軍勢を引率し梁田郡倉本河にむかへ戦ひ親胤底を蒙る相馬家傳

廿四日 是よりさき直義入道北國に出奔せしかは諸國の宮方蜂起をなしあるひは直義に

くみし又は足利直冬にまたかふ者多く始終の軍難儀なるへしとおもはれければいかにも

あれ直義を退治せん迄の京中を靜謐になさては心安かるましと吉野の行宮にて降參の事

御許容なかりしをも願すまはくなく申されける程に行宮にても尊氏か偽て降參を請

ふよしをは知し召るゝといへとも謀につきて謀をなさんと議せられける故此度赤松則祐

尊氏か使となり皇居に伺候せしにいたり漸く御許容ありけりもとより尊氏先非を悔て降

參なすとならひかれか今申むねの如く元弘一統の例にまたかひ萬事聖斷よりとけ行ひる

へしとなりそのうへ尊氏申請にまかせ直義入道追討の綸旨及び義詮もいよく忠節をい

たすへきよしの綸旨都て三通をなされ赤松に下され京師にそ歸されける園大曆太平記○按ずるに尊氏近江より入



洛の時にいたり直義追討の繪旨と請ひたりしよし太平記に見えたり参考本にこれハ北朝の繪旨にあらす南山より賜ひし所なるへしと辨せりおもふに此繪旨は十月廿四日尊氏ハ降參勅免ありて繪旨と下されける比と同時なるへし今ハ繪旨の月日ともつてこゝにかく

廿七日 尊氏書を佐々木出羽守にあたへて味方に歸順せしむ朽木氏古文書

當月北朝に於て武家の執奏非參議從二位資繼王其職をとめらる公卿補任〇櫻雲記に當月廿三宮方伊達飛騨守田村庄司以下武家方たりし吉良貞家相馬親胤等と合戦に及ぶといふ 日陸奥國柴田の倉本川に於て

十一月小 朔日 赤松律師則祐吉野より京に歸るこの時行宮の勅をうけて日野忠雲(大塔)

僧正も同じく上洛し今夜は宇治に宿す園大曆

二日 日野忠雲僧正入洛し加茂の親承法印か坊に着す同上

三日 足利宰相中將義詮ハ加茂の親承法印か許にいたり尊氏に賜はる所の繪旨二通義詮に賜ふ所一通都て三通の繪旨を拜戴せらるこれ降參勅免の事及ひ直義入道追討の繪旨にして今度忠雲僧正帶し來れるなり尊氏父子よりも即日勅答をあたゝめ左中將具忠朝臣の許にまいらせける其なかに直義追伐の事足利方の者と心を合せ申へきむね官軍へ觸下さるへきよし尊氏はを望む園大曆

四日 足利尊氏直義入道追討せん爲に石山寺の邊まで出勢し給ふ相從ふ者仁木兵部大輔同右馬助畠山修理權太夫千葉介高南遠江武田伊豆守信濃入道行珍等僅に數十騎に過す同上

七日 足利尊氏同義詮先非を悔て吉野の行宮に使をまいらせ降參を請ひ申せしにより皇

居に於ても是を議せらるゝのゝちかれか申旨を御許容あり即勅免ありしかは今まで北朝の天子と仰き奉りし崇光院の御位を廢し奉る太平記 椿葉記 續神皇正統記







輔憲顯を大將にて二十萬餘騎あるひは異本由井蒲原に打向ひ一方の石堂入道同子息頼房搦手の大將となり其勢十萬餘騎或は五萬宇都部佐へあるひは異本に宇津山と廻りて押寄る直義入道は宗徒の勢十萬餘騎にて伊豆の府に控たり抑彼薩埵山と申の三方の嶮岨一方は海にてたどひ何萬騎の敵ありとも攻落すへうは見えさりけるされとも直義入道の其勢五十萬騎尊氏の三千餘騎なりければいかにもして合戦の術をめぐらすへかりしを直義方の者ども急に攻落さんともせずして取巻居たりける爰に宇都宮伊豫守比綱のいつそより高野山に遁世して居たりける所に薬師寺元可入道元可もさきに入道しすゝめにより武藏守帥直か一族三戸七郎案するに三戸七郎は氏鎮の事成へし氏鎮は去る正平九年其邊に忍ひけるを大將にとりたて薩埵山の後詰せんと企ける又上野國の住人大畑山上一族とも新田殿の御一族大島を大將にとりたて是も薩埵山の後詰せんと笠懸原に打出る爰に長尾孫六同平三の三百餘騎異本に百騎に作り又にて上野國警固の爲直義か方より同國世良田の庄に居らしめける是を聞とひとしく笠懸原に押よせ大島か五百餘騎とかけ合せ大島か勢を十方に追はるふ宇都宮の是をき、此人々に怒なる事を仕出してはあしかりなん機を取直す程の合戦せんと議したりける太平記 并異本

二日 一條中將實種朝臣勅使として吉野より入洛し給ふ園大

五日 足利義詮卿東國へ下向の事今日も延引す同

信濃國に於て宮方の者ども旗を擧るといへとも終に小笠原の一族等か爲に打破らる小笠原氏

古文書○案するに當時信濃國に於て足利家と合戦に及ぶ者は宗良親王にふたひ居たる者とも成へし武藏野合戦のさ宗良親王は信濃國より起り給ひ上野を歴て東國に打出給ふ如く見ゆれば今小笠原と合戦に及ひしものは彼宮にふたひしものならん下二ヶ條もまた是に同じ

十一日 蒲原河原に於て宮方小笠原の一族と合戦に及ぶ同

十二日 是よりさき富士川にも數ヶ所の宮方を攻落さん爲小笠原の一族由比山に陣をとる同

十五日 去ぬる頃薩埵山の後詰を企ける大島か勢の長尾か爲にかけ破られ勢ひを失ひしかは其機を取返さんとして宇都宮氏綱を始め氏家大宰小貳周綱同下總守同三河守同備中守

同遠江守芳賀伊賀守貞經異本太平記に貞綱また貞綱に作り廿九卷の本文に同肥後守異本に肥前紀黨には猿子出雲守薬師寺入道光可舍弟修理進義夏天正本に義同勘ヶ由左衛門義春同掃部介助義

武藏國住人猪股兵庫入道安保信濃守岡部新左衛門入道子息出羽守異本に其勢都合千五百異本に下野國宇都宮をたち薩埵山の後詰のために打向ひける太平記 并異本

この日陸奥國に於て右馬權頭清顯宮の仰をつたへ相馬出羽守いそぎ御手に屬すへきよし書をあたふ相馬家傳

十六日 午刻はかりに宇都宮か勢は天命宿に打出たりしかは是日佐野佐貫の異本に春一族五百餘騎にてはせ加りける間兵皆勢勇みすゝみて明日こそは桃井か勢に目もかけず薩埵山の敵へ打て懸らんと評定しけるかゝる所に此手の大將にとりたてける三戸七郎俄に狂氣をなし自害しける間是を見て門出あしとやおもひけん道にて馳着ける勢とも一騎も



のこらす落うせ初より同心の勢七百騎はかりこそうち残りける太平記  
 十九日 宇都宮か後詰の勢は氣を失ひて居たりける所に薬師寺元可入道姑く思案し吉凶  
 の糾へる繩の如しとかや承るか勢の落失しも亦宇都宮大明神のはからひ給ふ所なるへ  
 しひらに打給へとすゝむる程に勢とも利根川を打渡り那和庄に着たりける爰にて跡より  
 來る勢をよく見れば桃井播磨守長尾左衛門尉か一萬餘騎のものともなりかくて敵御方半  
 時はかりのらみ合て居たりける互に時刻よしとやおもひけんかけ合すると見えし先  
 陣にすゝむ長尾孫六か五百餘騎終に宇都宮勢にうち破られ大半の命をねとす長尾左衛門  
 も叶はしとや見たりけん十方にわかれて落行ぬ其餘の勢も是にひかれ皆ちりゝに成た  
 りける是のみならず武藏國の守護代吉江中務も津山彈正左衛門同新左衛門も野與の一族  
 に寄せられ忽ちにうたれけるこのゝちは直義方に附く勢一人もなく宇都宮は忽ち三萬餘  
 騎になりたりと聞えし太平記異本に宇都宮につく勢  
 二萬とも三千ともあるせり  
 此程薩埵山の寄手も後詰のむかふよしを聞及ひ諸軍勢のはやく後詰のちかつかぬさきに  
 敵を攻落すへしと申たりけるを直義方の運や拙かりけん石堂上杉承引なさすして居たる  
 間寄手のうちには是を用ひぬ者ありてあまりに身を揉み兒玉黨三千餘騎今川上總介畠山國  
 清南部か一族羽切遠江守かともから三百餘騎或は五百にて固ける坂によせかゝり石弓にうた  
 れ數百人死たりける足利勢是に機を得急に坂より切て下りける程に寄手わつかに打なさ  
 れて軍の終りけり太平記

廿三日 中院中將具忠朝臣勅使として再び入洛をなし今迄北方にて傳へ給ひし所の三種  
 の神器を吉野の内裏に請取奉り是は先帝山門より花山院に御出ありし時ありもあらぬ物  
 を取替て持明院殿にわたされたる物なれば無用の品なりと璽の御箱をは棄られ寶劔と内  
 侍所とをい近習の雲客に下されしを衛府の太刀装束の鏡にそなしたりける帝にも誠の三  
 種の神器にていなければならずてに北方にて光嚴院光明院の二帝大嘗會を行はれけるうへ  
 毎日の御神拜清暑堂の御神樂二十餘年になりぬれい神靈もなとかなかるへきに餘り恐れ  
 なく凡俗の器物になされぬる事いかになりと申族も多かりける太平記園大曆皇年代畧記○案  
 するに太平記には正平七年北  
朝の文和元年閏二月廿三日の事とすされども園大曆皇年代  
 畧記等に正平六年十二月廿三日に作るにより今は是にふたふ  
 廿六日 日吉臨時の祭あり園大曆  
 去程に今度足利尊氏父子の御和睦の事を行宮に申入ける故は直義直冬に附きたかふ者多  
 くして諸國の合戦難儀なりしかは一時のはかりことなりけるを吉野の内裏に於ても諸卿  
 僉儀ありてかれら申旨の偽なる事をは察し給ふといへともはかりことにつきてはかり  
 事をめくらさるへしと申さるゝ程に尊氏か望む旨をいゆるされいづれ吉野より京都に還  
 幸のゝち義詮をは畿内の勢を以て退治し尊氏をい故義貞朝臣の一族に仰せ東國にして追  
 討あるへきに一決し給へりかくのとく兩方にて偽り給ふゆへを誰かはるへき事なれ  
 は此間まで北朝につかへける公卿殿上人をはしめ百官百司に及ぶまで我劣らしと行宮に  
 參られける其人々に公卿に二條關白良基公近衛右大臣道嗣公久我大納言通相卿葉室中



納言長光卿鷹司大納言冬通卿洞院大納言實夏卿三條大納言公忠卿三條大納言實繼卿松殿中納言忠嗣卿今小路中納言良冬卿御子左中納言爲定卿西園寺中納言實俊卿裏築地中納言忠季卿大炊御門中納言家信卿西條中納言陸持卿菊亭宰相(中納言)公直卿二條中納言師良卿花山院中納言兼定卿葉室宰相(中納言)長顯卿萬里小路藏人頭仲房卿堀川宰相中將家賢卿坊城右大弁宰相經方卿中御門中納言教光卿二條宰相爲明卿殿上人には徳大寺左中將實時(明)朝臣勘ヶ由小路兼綱朝臣日野左中弁時光朝臣四條左中將隆家朝臣日野右中弁保光朝臣權右中弁親顯朝臣日野左小辨平(忠光右少辨、太平記)信兼朝臣勘ヶ由次官行知朝臣右兵衛佐嗣房朝臣中院中將具通朝臣を始として先官の公卿非參議七弁八座五位六位山門園城の僧綱三門跡の貫首諸院家の僧綱ならひに禪律の長老(者)寺社の別當神主に至るまで我先にと参りしかは皇居の花の都と見えたりけるまかれとも今まで北朝につかへし人々の一階一級を貶されける其中にも御子左中納言爲定卿のみは本官位を授られける太平記異本太平記

廿七日 宋朝の人案するに當時は明朝の時也宋朝といふは誤成へし來朝せしかは天龍寺に宿せし園大

是日迄薩埵山に於てい直義入道五十萬騎にてうかくと對陣して居たりける所に今日異本には吉日(十七日)至りて尊氏方の後詰の勢三萬餘騎或は三千足柄山に在ける直義方の勢を追ちらし竹下に陣とれい小山判官も宇都宮に力を合せ七百餘騎或は一千同日に古宇津といふ所に着たりける是らの勢ともか焼つゝけたる箭火のかけ夥敷みえければ今迄も大勢なりと

聞えし直義入道の勢こらへすして十方に落去ける太平記

去程に直義入道の勢ともい聞落しければ仁木越後守義長二百餘騎勝にのりて逃る勢を追ひ伊豆の府まで推寄ける直義入道是を見て一支もさへす北條に落たりける上杉民部大輔長尾左衛門等か勢二萬餘騎も信濃にと落行を千葉介か一族五百騎ばかりにて追かけしか此勢い上杉長尾か大勢に取まかれ一人も残らず討死し上杉長尾の無異に信濃國にぞ落着ける直義入道いあまりに氣を失ひ伊豆の御山に引退き大息つき忍ひて何地へか落て見んまたい自害をやせましとおもひ煩らひ居たりける太平記案するに直義入道大軍をたかへて陣りて考ふれば前根山ちかく陣せしか如しおもふに薩埵山に陣したるは當月十五日迄の事にしてそれより所々に合戦あり直義の勢は日ましに落行今度の舉あるに及び終に敗績せし太平記等に脱漏せしものならんか

廿八日 北朝の主上御位ををろし奉り其のち崇光院と尊號をまいらすかくて又もと三位殿の御局と申せしい准后廉子の御子にて南山にまします後村當今には上院まさしき御母にわたらせ給ひしかは院號をすゝめ申て新待賢門院とを稱しまいらせける北畠入道親房卿は多年の功勞ある故にや准后の宣旨を蒙り後世に及び南方に於て昇進の官爵は用ひざるに親房卿は卿に限りては朝廷に大功ある故に准后を以て稱せり等着たる大童子を召具し輦に駕して宮中に入らせらる其装ひ天下の耳目を驚かす竹園攝家の外に准后の宣旨を賜りたる例い平清盛入道の外いまた是をさかす又日野護持院僧正頼意も東寺の長者醍醐の座主に補せられ仁和寺の諸院家を兼たり大塔僧正忠雲の梨本大塔の兩門跡をかね鎌倉の大御堂天王寺の別當職に補せらる其ほかよしの、山奥に潜居して行宮に伺候せし人々のいわのく官職をすゝめられけるされとも其處置おのつから我意



にまかせらるゝやうに世の人はおもひ居けるとなん太平記  
是日内侍所にて神祭樂を修せられける又北方の光明院の御とし三十一にましましける  
か俄に御出家をとけられ御法號をは直常惠と申奉る御戒師泉涌寺の了寂上人とぞ聞えし  
園大曆 椿葉記  
皇年代畧記

さきに北朝につかへ奉りし公卿殿上人此程にいたりみな南山の皇居に伺候せられける公  
卿には二條教基公前大納言通冬卿權中納言實長卿前大納言公基卿前大納言實守卿前參議  
親光卿從三位定親卿從三位公多卿從三位宗重卿從三位爲忠卿從三位爲明卿南山伺候の事公卿補任  
には今度の列に加へたり前に太平記  
にふるせし條に其名をばしめ殿上人も多く皇居にまいられける公卿補任○案するに當年兩朝御和睦  
載たれば爰に畧すなりをばしめ殿上人も多し度は南山に參るといへどもたりしより終身志を改めずして  
公卿殿上人多く南山に伺候しつかへまらざるもありまたひさ度は南山に參るといへどもたりしより終身志を改めずして  
または明年のいくさばてのち再び北朝につかへしもあり其中に今年南山につかへしより終身志を改めずして  
つかへける人には大納言親光卿春宮太夫藤原實長卿藤原定親卿藤原實守卿二條教基卿等なり殿上人にもなとあり  
しなるへし○櫻雲記に十二月奥州に於て宮方五辻源少納言右馬頭清顯等軍勢を率ひて石堂入道とうち敗るこいふ  
今年の冬從一位左大臣藤原師基公號二行宮に於て關白となり給ふさきには福恩寺前内大  
臣關白たりしかとも病によりて辭職し給ひ辭職の年月  
詳ならず行宮のあたりには閑居し給ひける所な  
り公卿補任太平記案するに去年の冬直冬入道南山に降參せし時の關白も二條左大臣なるよし太平記に見ゆさある時  
は師基公ならんか今又太平記に師基公關白に任するよし見ゆれば天下一統の時なるゆへあらためて關白に任せら  
れし如くにあ  
るせしものか

是年疫病流行す園大曆○菊池傳記に土人の説を引て今年肥後奥玉名郡伊倉といふ所に懷良親王の仰にて八幡宮  
のいは一人たらんさおもひける所に直義入道のほからひにて島山左近將監直志とさし下され兩管領さなしければ上  
杉か威勢おもふ程にもなく見えたり足利尊氏兄弟不相になりしつち島山か威勢いよく盛になりける扱直義入道  
鎌倉に打入りし聞えしは上杉は左馬頭師基といさなひ上野の方に逃下りしに近國  
みな直義にきたかふ程に上杉も詮方なくえはし直義入道の陣に加はり居けるこいふ

是年北畠顯信卿奥州の國司となり彼國に下向し給ふ相馬家傳○案するに相馬氏藏正平六年二月十三  
日の文言に近々國司下向といふ事みえ正平七年  
二月廿九日の文書に顯信卿の名見ゆさからば當時の國司は顯信卿たる事うたふへからずして下向の年もまた今年  
たる事明白なりよりて今推考してこゝに下向の事を載せたり猶前に載する所の結城氏の古文書の趣を合考せば此時奥  
羽の形勢頗るみる  
に足る事あるへし  
是年陸奥國の宮方佐々川田村矢柄宇津峰等所々に於て合戦を遂る相馬  
家傳

後村上院 正月吉野山穴太の皇居を賀名生と書改め給ひ二月十八日より住吉に臨幸夫より  
八幡に渡御五月十一日より東條に御滯座中旬に及び再び賀名生に臨幸し給ふ

正平七年壬辰 北朝觀應三年  
正月小 朔日 今年の天下一統すといへとも皇居の猶いまた穴太たりされは寅の時の四方  
拜もかたはかりに行のれける太平記

五日 頃日大和國吉野の奥穴太の皇居を改め賀名生とカノフかもしめ給ふ是日皇居にて叙位行  
ゆるゝ事各差あり園大曆○細々要記に北畠親房卿の准后の宣旨を蒙らせ給ひし事を今日に又園大曆に大納  
言通冬卿南山の皇居に伺候せられて是日權中納言に任せらるゝよし見えたりさからば去年の  
冬南山に伺候せられし公卿殿上人今日の叙  
位に官位を授られしもある事見えたり

六日 去年の冬より直義入道惠源の伊豆の御山に忍ひ居たりけるを尊氏卿より畠山國清  
仁木頼章同義長等をして強て和睦の事を申入れられ御迎の由にて遣はされしかは直義入道  
さすか命のすてかたさに降人になり出られしかは尊氏卿と打つれ正月六日の夜に鎌倉に  
歸り入られける太平記  
園大曆

七日 文觀僧正勅を奉り京師の眞言院にして御修法を行のる太平記



今日權中納言南山の皇居より京に歸り給ひて此度公卿殿上人其身京にとまりて吉野にまいらすんの官位の望いたゆへきなりと申されしかは心ならずれもふ人も多かりける

園大 此の月の下旬足利義詮より貢馬十疋沙金三千(太平記三内に作る)兩を奏進す其外別進の貢馬三十疋卷絹三百疋沙金五百兩異本太平記に貢馬十疋沙金百兩女院皇后に引まいらすと云女院皇后三公九卿殘るかたなくを引

二月大 五日 大原野のまつりあり園大  
十三日 京師に於て釋奠を執行せしめらる上

この頃の事にや有けん祥子内親王先帝の御廟塔尾にもふて給ひてあたりを見給へは花のまたさかぬ比にてよろつ物あはれに覺えければ「咲花のちるわかれにはあはしとてまたしき程をたつねてそ見ると打詠し給ひける新葉集

十六日 山城國嵯峨の臨川禪寺を以て勅願寺と定給ふ臨川寺古文書  
十七日 勅して山城國南禪寺に庄園を寄らる南禪寺記

廿三日 京師の地子錢を勅免し給ふ園大  
廿六日 主上はすてに吉野の奥賀名生の皇居より龍駕をかへされまつ河内國東條へと御出あり東條は楠正儀の城なり劔璽の役人はかり衣冠正しく供奉せられ其外の月卿雲客衛府諸司の尉は皆甲冑を帶したりし其日は東條に御滞留ありけるとなん太平記

神皇正統  
元年二月  
延元元年  
記元元年  
年元元年  
に元元年  
て元元年  
ま元元年  
て元元年  
國元元年  
さ元元年  
一云元元年  
く族元元年  
して元元年  
芳元元年

同日爰にまた足利直義入道は鎌倉にうつり延福寺といふ僧房に附たかふ侍一人もなくて幽居せられ剩警固の武士をすへられしかは明くれ歎居せられける然るに俄に黃疸といふ病により卒せられしよし世に披露ありしかとまことば鳩毒にて卒去せられしとを行年いまた四十七歳になり給ひしとなり太平記常樂記皇年代畧記直義入道の卒年諸書同からす今姑く公卿補任にたかふ○案するに太平記の文に去々年の秋は師直上杉を亡し去年の冬は禪門師直を誅伐せられ今年春は禪門また怨敵の爲に毒を飲て失られける三年のうちに日とへす報ひけるこそ不思議なれとあるせりふかれも上杉を殺されたるは正平四年十二月廿日也師直が殺されたるは正平六年二月廿五日なり直義入道の鳩毒にて卒せられしは正平七年二月廿六日なり三年つきたるにはあらずまた日とへす報ひけるもたかひたり参考に其異同を辨ししめ太平記の作者直義入道の積悪の程をいはん爲にかくは書ける成へし抑直義入道の積悪といは、大塔宮を害し奉り恒良親王成長親王を鳩毒にて害し奉りあるひは君をあさむき又は兄に弓をひくのとくひ舉てつそへたし實に餘快といふへし

廿八日 龍駕すてに南山の皇居を出御ありて一夜東條に御逗留あり今日住吉に行幸あれは和田楠以下真木野三輪湯淺入道山本判官熊野八庄司吉野十八郷の兵七千餘騎路次を警固してやかて當社の神主津守國夏か宿所につかせ給ひ俄に國夏か館を皇居に造りかへられ國夏は上階して從三位になされ殿上に相交る時にとりて面目をを施しける太平記園大曆

大曆による○案するに津守國夏は國冬の子にして新葉集に正三位につくればこの正三位に昇りし成るへし國夏は建武のはしめより醍醐帝にもふかく御おぼえ有しものと見えて太平記新葉集などに事跡を載たり扱又廿六日に吉野を出給ひ其夜は河内東條に御滞留ありしなれは其翌日住吉に着御せ給ひし日は廿七日なるへきに園大曆には廿八日とし太平記には翌日とのみあるせりされは廿七日一日東條に御滞留ありけるもの未だ其詳なる事をあらず又攝津國住吉郷平野庄長寶寺の系圖を見れば先帝吉野へ入らせ給ふまき當寺に御滞留ありしよし見えたれも延元元年十一月吉野に至り給ふ時はここに立よらせ給ふへき理なし同庄熊野社の額も南帝の宸筆なるよしなれば此度住吉に入らせ給ふまき長寶寺に入らせ給ひしものあるひはまた先帝船上より還幸のまき立よらせ給へるにやいづれにもよしの、臨幸のせつ長寶寺に立寄らせ給へるにはあらざるへし

晦日 住吉の社を以て皇居と定め給しより三日に當りたる日勅使神馬を奉りて奉幣を捧



野に給ひてつねら  
せ給ひてつねら  
行宮をわつねら  
くたりてつねら  
たれは見え給  
ふと見給へし  
内と給へし  
らしと給へし  
なるへし

たりけるとき風も吹さりけるに瑞籬の前なる大木の松中より折て南に向ひて倒れたり勅使驚きて仔細を奏聞しければ時の傳奏吉田中納言宗房卿内大臣定房の子なり妖は徳に勝たすとてさまた驚き給ひさりしを伊達三位有雅異本太平記に伊賀に作武者所に在けるか此事を聞て穴淺まし此たひの臨幸も君都に還御ならん事の有かたしあかるに妖は徳に勝たすと傳奏の申されて君もまた徳を修め給ひぬは心得かたき事なりと申されける其夜いかなる嗚呼の者かなしたりけん此松を削削て「君か代の短かゝるへきためしには兼てそ折し住吉の松と落書したりけるは苦々しく見えたりける太平記

當月住吉天王寺へ行幸ありし時兒島三郎入道志純西源院本に忠繼に作る召されて参りたりけるを内々勅使となし故新田義貞朝臣の一族及び小山宇都宮のともからか許へはやく義兵を起すへきよし仰せ遣はさるゝにより志純東國に下向しける太平記

閏二月小 此春勅使を武藏上野信濃越後の間に忍ひ居給ひける故義貞朝臣の息男左兵衛佐義興朝臣三男少將義宗朝臣脇屋左衛門佐義治朝臣三人の許につかひされ去年足利尊氏父子と御合體ありしはまはしの智謀によらるゝ所なりいそき義兵を起して彼らを誅伐なすへきよし仰下されける間關東八ヶ國にて故直義入道惠源に隨かひ薩埵山の戦に打まけ時をまち居たりける石堂四郎入道義房三浦介高通葦名判官二階堂上野二郎政元小俣宮内少輔義弘等の忽ち新田の人々に同意し鎌倉の扇ヶ谷に寄合て相談しけるは新田勢上野國に起り武藏國に打入り旗を擧ると聞えなは尊氏はかならず關戸入間川の邊りまで寄來るへ

し其時相圖を定めて我々か勢三千はかりの不意に兵を起し尊氏を真中にとりこめ奉りなは一人も生ては歸すまじきかねての合圖をかため置石堂三浦小俣葦名事なき體にて鎌倉に居たりける太平記○太平記には由良新左衛門入道信阿まかりむかふ見えたりとも信阿す又同し比宗良親王の御許へも勅使を下され征東大將軍の宣旨を賜ひけるこのとき宮かくを詠し給ふ「思ひきや手にふれさりし梓弓れきふし我になれん物とは其比また寄海祝といふ題にて「四方の海のなかにもわきてあづかなれわかれさむへき浦の波風とを遊いさ

れける李花集○案するに宗良親王の時まで何國に居給ひしや詳ならず太平記の文に上野親王と記せるを見れば信濃宮傳にいふとく正平四年信濃國より上野國寺尾城にうつらせ給ひ今度の勅命により新田の一族と共に旗を擧給ひしもの當月廿一日

十五日 主上今日天王寺に行幸あるこのとき伊勢の國司中院右衛門督顯能卿異本太平記に左衛門督に作る中院また北畠とも稱す親房卿の息男なり伊賀伊勢の勢三千餘騎を率して供奉し給ふ太平記

爰にまた東國に於ての新田義宗朝臣同義興朝臣脇屋義治朝臣手勢八百餘騎を率して西上野に打出給ふ是を聞て馳集る當家他門の人々に先一族に江田大館堀口篠塚異本太平記に松塚に作りまた藪塚舞塚羽川岩松案するに岩松頼房は是よりまへ尊氏に降参して所領を賜ふよし正木氏古文田中青龍寺小にも作る書長樂寺文書等にみえたりあつれとも猶官軍に屬せし岩松ありしならん

幡大井田一井世良田世良田の名をあらすしけれとも信濃籠澤額田外様には宇都宮三河三郎異本に三河守に作る

天野民部大輔政貞三浦近江守南木十郎西木七郎酒勾左衛門小幡左衛門異本に右衛門に作る中金松

田河村大森葛山勝代異本に藤代蓮沼小磯大磯酒間山下鎌倉玉繩異本に出梶原四宮三宮異本に二宮南西

異本に葛高田異本に高山に作る中村蛇井兒玉黨には淺羽異本に淺生四方田異本に四王天庄櫻井若兒玉丹黨には安保



信濃守子息修理亮舍弟六郎左衛門加治豊後守異本に豊前守同丹内左衛門勅使河原丹七郎異本に六郎西  
 黨東黨熊谷太田異本に太山平山私市村山横山猪俣黨都合其勢十萬餘騎所々に火をかけて武藏  
 國へ打越ける是によりて近國より早馬を鎌倉にはせ尊氏にかくと告たりしかはまつ安房  
 上總に引退き一たひ勢をつけてこそ合戦あるへしと諸將の申たりしに尊氏いやとよわれ  
 鎌倉を落たりと聞かは諸國に於て敵になるもの多かるへした、道にまちうけて勝負を決  
 せんにあかしとて此議にまたかひ給ひさりける太平記に二月八日新田の一族旗を擧る事見  
 今園大曆にまたかひて十五日の條にかけたり其是非  
 に於ていつれか正と  
 得たるや詳ならず

是日官軍の惣大將新田武藏守義宗朝臣柿沼記に正四位下左中將に作る系圖によるに義宗朝  
 臣の母は勾當内侍妻は岩松治部大輔滿國の女と云上野國  
 に打出て世良田の長樂寺に陣をとり給ひ則軍勢甲乙二人に禁制の條々をか、けらる長樂寺藏  
 古文書  
 この比丹波國の守護荻野某退去せる事によりて足利義詮是を怒る園大曆に園大曆の文意解し  
 たし姑くある事本文の如し

この夜伊勢の國司顯信卿の軍勢京に到着す上同  
 十六日 明後日八幡山まで臨幸あるへきむね治定ありしといへとも其實の京師を襲ひ給  
 はん御はかりとなりと風聞する程になをも御和睦をとり固めん爲に京より慧鎮上人を使  
 として住よしにまいらすの、ちに北畠顯信卿の軍勢打つ、きて入浴をなしこ、かしこ  
 に屯をなすと聞えたり園大曆

是日東國に於て足利尊氏は僅に五百餘騎にて打たち敵の行合んする所迄とす、まゐるれば  
 道にて畠山上野介異本太平記に上總介に作る上野介高國ならは正平六年二月既  
 奥州にて討死せり今上野介といふは何人にや名乗と詳にせず子息伊豆守畠山左京太

夫舍弟尾張守義深舍弟太夫將監清義其次式部大輔義照照は仁木左京大夫舍弟越後守三男  
 修理亮岩松式部太夫大島讚岐守石堂左馬頭異本に古馬頭に作る  
 左馬助義基成へし今川五郎入道同式部大輔範氏  
 田中三郎異本に二郎大高伊豫守案するに伊豫守は義詮にあたりひて  
 京にあり今伊豫守といふは疑へし同土佐修理亮異本に土佐守修  
 理亮二人に作る太天平  
 安藝守同出羽守宇津木平三異本に宇部  
 宮に作る宍戸安藝守山城判官異本に結  
 城に作る曾我兵庫助梶原彈正忠  
 原は小清水合戦に討死す天正  
 本には除けり是とすへし二階堂丹後守異本に三郎  
 三郎に作る同三郎左衛門異本に丹後三郎右衛門に  
 作一人の事とせり饗庭命鶴丸和田  
 筑前守異本に和泉に作る長井大膳大夫同備前守同治部少輔子息右近將監異本に  
 左近等はせ加はる石堂  
 入道三浦介小俣宮内少輔葦名判官二階堂下野次郎か三千餘騎の勢は隠謀有ければ他の勢  
 をましえず尊氏の馬の左右に透間もなく打たりける太平記  
 并異本

十七日 尊氏の勢は武藏國へと打むかひけふ一日は久米川に滞留す太平記に園大曆に武藏守義  
 宗の文書を載、今月十五日  
 上野國にて義兵をあげ十六日國中を打たかへ十八日に鎌倉に打入り此時尊氏はすでに没落して武藏國狩野川城に籠  
 籠るよし見えたり又本文にいふ久米川の事新井源君美佐久間洞巖に贈る書に武州八王寺の道江戸より六七里の所に南  
 武藏野北武藏野といふ所あり其所に久米川といふ小川  
 あり古戰場なりと里人もいへばこの所成へしといへり

同日洛中に於て南北の御和睦事やふれし故に主上は天王寺に移らせ給ひぬとて京師の騷  
 動おほかたならず義詮此よしを聞軍勢の着到をつけられけるなかにも佐々木佐渡判官入  
 道々譽は江州に打むかひ勢多の橋をわたす園大曆 紙園修行日記抄十  
 七日園大曆によりてあるす

十八日 新田義宗朝臣以下の官軍はすてに鎌倉まで攻入給ひぬれば足利尊氏ははや武藏  
 國狩野川に楯籠りぬと聞えしかは義宗朝臣さらば其方に打むかはんと議せられける園大  
 案するに武藏國狩野川は今の神奈川の事に、新井君美の説にも彼所に古蹟ありといへば、いかにも尊氏は神奈川の城に  
 入たる成へしと云、太平記には當月十七日鎌倉を落て久米川に滞留すといひて狩野川の事は見えす君美が久米川と



以て八王寺の道にある川なるへしといへる説も臆度なりもしくは久米川と狩野川と混せしものかある  
時は尊氏鎌倉へ落て此所に來りこゝに滞留し扱武藏野の台戦にのぞむもの道の序に於てはまた穩なり

十九日 去程に主上は暮に及びて鳳輦を促かされ住吉より八幡山に打むかはせ給ひける  
この山に於ては田中法印定清か坊を皇居と定られしかは足利義詮法勝寺の惠鎮上人を使  
とし今度臨幸に和田楠の人々合戦の用意をなし供奉し奉るよし聞傳へりいかなる子細候  
やらんと申されしかは主上すなはち二人をめされて此度供奉の者兵具を帶する事は非常  
を誠給はんか爲にして全く異變の儀にあらすと勅諭ありしかは武家に於ても論言すてに  
かゝるうへはとて義詮朝臣をはしめ油断して居給ひける太平記

是日東國に於て尊氏の居給ふ久米川にはせ集る人々には河越彈正少弼同野介同修理亮  
高坂兵部大輔異本に少輔同下野守同下總守同掃部介豊島禪正左衛門異本に或は鹿島同兵庫助土屋備前  
守同修理亮同出雲守同肥後守土肥次郎兵衛入道子息掃部介舍弟甲斐守同三郎左衛門二宮  
但馬守同伊豆守異本に遠伊豫守同近江守異本に遠江守同三郎左衛門同河内守曾我周防守同三河守同上野  
介子息兵庫助澁谷左衛門同石見守海老名四郎左衛門子息信濃守舍弟修理亮小早川刑部  
大輔同勘ヶ由左衛門豊田因幡守異本に豊島に作る狩野介那須遠江守本間四郎左衛門鹿島越前守異本に越  
後島田備前守異本に鳴田浄法寺右近太夫異本に左近白鹽下總守高南山越前守異本に越中守小林右馬助瓦登  
出雲守異本に出羽守に作る見田常陸介古尾谷民部大輔異本に石見土屋に作る長峰石見守異本に長崎に作る都合其勢八萬餘  
騎なり合戦すてに明日と定めたりしに其夜石堂四郎入道隱謀の企をいまた子息右馬頭  
義基に告さうしかはちかつけてひそかにかうくの企ありと物かたり合戦の刻にいわか

旗の向いんする方に志たかふへしとわかしたりける基義此よしを聞て大に興を醒しいそ  
き尊氏に告申さんと座をたたりしかは石堂入道今はせんかたなく三浦介にもかくと語  
り多日の隱謀一時に露顯するうへは身の禍となれりはやくこゝを立のくに志かしてとて三  
浦葦名二階堂ともに其勢三千餘騎を引わけ關戸の方にを落たりける太平記并異本  
是日新田殿の御勢武藏國に於て前守護代薬師寺上杉か一族と合戦に及ふ園大  
此頃征東將軍宗良親王は官軍の惣大將として陣中に臨み給ひかくを詠し給ふ「君か爲世  
の爲なにかおしからんすて、かひある命なりせは新葉集季花集太平記○李花集には征夷將軍とある  
宗良親王は征東將軍たる事明かり扱この御歌は武藏野合戦に打のそみ給ふ時陣中にて詠し給ふ所にし思ひきや手  
にふれさりし御歌を讀給ひしよりすこし後の事成へし又天野信景日夏繁高等の隨筆せしものなかにこの歌とある  
し武藏野合戦以前に陣と給ひし所は今武藏國豊島郡高田村の就禪山法泉寺の邊にてこの歌も遊ばされし所也といふ  
法泉寺は里人水稻荷と云て今は江戸にちかしむかしは武藏野の原限りもあらぬ曠野にてこの邊よりついき四谷中野川  
越の邊までわたりたる地なれば實にこの所に陣と給ひしといふもの據  
なきにあらすまた法泉寺の縁記をみるに武藏野の合戦の事跡を載たり

廿日 新田武藏守義宗朝臣を始め東國に義兵を舉たりし軍勢共は明日武藏野の方に打て  
出三浦石堂か兼ての相圖相違せし事は夢にもあらす辰刻はかりには小手さし原へと打臨  
給ふまの一方の大將には新田武藏守義宗朝臣五萬餘騎白旗中黒頭黒團扇の旗は兒玉黨坂  
東の八平氏坂東八平氏の事は太平記所々に見ゆれ共其姓名は詳ならず赤臉一揆族を五手にわけ五所に陣をそ取たりける一  
方には新田左兵衛佐義興朝臣を大將にて其勢三萬餘騎異本に二萬五手に作る鳩酸草鷹羽一文字十五夜  
の月弓一揆是も五手にわかれて控たり又一方には脇屋左衛門佐義治朝臣を大將にて二萬  
餘騎異本に三萬又は三萬五千に作る大旗小旗下濃旗鍬形一揆母衣一揆是も五ヶ所に陣を取る足利尊氏の十



萬餘騎の異本に二十萬に作る勢を五手に分一陣は平一揆二陣は白旗一揆一様に立出せず、まれけるか新田方にも白旗ありと聞て俄に旗を短く切たりける三陣は花一揆大將は命鶴丸なり四陣は惣大將尊氏五陣は仁木頼章同義長同義氏畠山上總介兄弟遙かに引さかりてを控ける去程に新田足利の軍勢都合二十萬騎小手さし原に打臨み一陣二陣追つ返しつ時うつるまて攻合ける足利勢のうち花一揆の大將命鶴丸は生年十八歳容顏美麗の兒なりしか一揆の先にすゝんで打出たり義興朝臣を見給ひ花一揆を散さん爲には兒玉黨向ふへし團扇の旗は風を含める物なりと下知し給へは兒玉黨いさみすゝんで打てかゝる果して命鶴丸か勢ともは兒玉黨の爲にそやふられけるまかのみならずこの勢尊氏の陣にこぼれかゝるあいたすこし引退けと下知せらるゝ程こそあれ一度にとつと引たてゝ散々になりたりける此折しも義宗朝臣は陣前に進み出尊氏天下の爲に朝敵なり我爲に親の敵なり只今首をとらすんは何の時をか期すへきといつく迄も追かけ給ふ小手さし原より石濱まで坂東道四十六里のたひひの事新井源君美つたひて日今地理による小手差原より石濱にいたるの間左程朝小手さし原に打つそむあるうへは合戦の場は今の川越の西の方二三里と隔たる事と見ゆふからば戦場より淺草の石濱まで十四五里も有へし坂東道にして八十里の内外の事なり其道と義宗人馬の息も休めず是を追ひ春の夜の短き頃夜間に又小手指原へ引返され三十里に及へる道と指し事人方とを思はれずも道筋に淵瀬とほひの川の川ありし事とせは則今下練馬と白子との間のなれと指し事人方とを思はれずも道筋に淵瀬とほひの川は坂東道四十六七里といふも近かるへしさかりといへども石濱迄は此水よりしては猶大ひに隔たりたりと見ゆ公案するに白子村の邊にも有らん今も練馬村に今上つてみよ地名あり其處に小手さし原と波戸なるかに江戸にちかく練馬村白子村の邊にも有らん今も練馬村に今上つてみよ地名あり其處に小手さし原と波戸なるかに江戸にちかく練馬村の所をいへしへ的小手さし原の合戦の跡なりと云ふも練馬村にある所の小手さし原と波戸なるかに江戸にちかく練馬村は石濱まで五六里に及ひ太平記にふ坂東道四十六里といふ練馬村にある所の小手さし原と波戸なるかに江戸にちかく練馬村藏野合戦小手さし原合戦は二度の軍にあらす武藏野の内に屬せる小手さし原なるゆへ世にも混し傳へしもの也二度の

の軍とせは誤らんか程を片時か間にそ追附たり尊氏石濱を天正本に隅田川に作る渡り給ふ時のすてに危く見えたりしに近習の侍二十餘騎返し合せてたゝかふうち尊氏ははるかにのかれ給ふ逃る勢は三萬餘騎消かくる勢は五百餘騎川岸は高し日は傾きぬ剩へ河の淵瀬も見えされは義宗朝臣もつゝひて渡りかね牙を嚼て本陣に引返さる扱又小手さし原にして戦ひ給ふ義興義治兩將は一所になり白旗一揆の控けるを尊氏そと心得何地迄も追給ふ道の程にて降參の者どもに會釋し給ふうちに御方にれくれ兩將のわつか三百餘騎に成てそおわしける仁木兄弟はヶ様の所をうかゝひいまた軍のせさりし程に是をみるとひとしく其勢三千餘騎一手になつて推寄たり新田の人々御方の勢を揃へ敵の中をかけ破らんと見繕ひ給ふ去程に仁木か勢のわさと官軍をつからさんと會釋して戦ふ程に兩將氣つかれ給ひぬれば終には利を失ひ東をさして落給ふかゝりければ三百餘騎の勢もわつか百騎ばかりに打なされ猶も危く引給へりまた石濱まで驅給ひける義宗朝臣も敵の大將尊氏をうちもらし御方の人々と一手にならんと尋ね給ひしかと敵の勢のみにてありければ笛吹峠の方に打越て勢をまちつけ合戦し給ひんと夜に及びて引退き給ふ爰に義興義治二人の大將の惣大將義宗に行合ひ給ひす波にも磯にも離れたる心地してみな馬より下たち休まれける此勢にては上野國に歸り給はん事も叶ふまじ鎌倉に打入て足利基氏と勝負を決し命を失はゝやと此所より夜半過る頃に關戸の邊をそ過給ひけるまかるに勢の程五六千はかり有らんとおほへてはしたなく行逢たり敵ならば鎌倉までも行得すして命を失ふへしとおもひ定め給ひ誰とと



へは石堂三浦の人々の新田殿の勢にはせ加へるにて候と答ふ兩大將悦ひ給ふ事斜ならず鎌倉の様を聞給へは基氏をはじめ南遠江守昨日の朝三浦の方に向ひれしかとも敵なきの間只今鎌倉に引返し候なりと申ければ扱ひ只今の合戦こそなれと爰にて合戦の用意をなし其勢三千餘騎鎌倉へと向ひれける太平記并異本〇武藏野合戦の事と太平記の文より案するに官軍たるがし太平記此條の文理貫通せざるが如くなる故強て搜索なし難し又松井助宗申狀に二月廿日武藏國見原合戦の事見ゆは小まさ原合戦と同日事跡成へし扱又小まさ原の合戦討して後新田勢と石堂三浦勢と一なりし事トの鎌倉攻より合考するに閏二月廿日の夜の事にはあ去程に新田脇屋の兩大將の三千餘騎をらす一兩日を過ての事なるが今姑く廿日の條末に誌し置けりまたかへて大御堂の上よりまつ下りに押寄たり鎌倉には只今三浦より歸り未だ馬の腹帯も鎧の上帯もどかぬ程成ければ其まゝ若宮小路に打て出たり小俣小次郎は今日の軍奉行として今朝より手勢七十餘騎を引勝りてまたかへける敵勢の真中にかけて火出る程戦ひける是を始として雙方入みたれて戦ひける此とき大將義興朝臣のみつから敵三騎まで切て落しなをも大勢に相當り散々に戦ひ給ひける所に敵に手綱を切落され馬の足に踏れけるを鎧の鼻に落さかりて結ひ給ひんとし給ひしを敵はせ寄て三打四打切けれどもすこしもさはかす閑に是を結ひれしかは打圍みける三騎の敵の馬をかけたのけ剛の者とを感じける去程に塔の辻の合戦難儀なりと見えければ大將義興小俣少輔二郎と一手になり二百餘騎にてすゝまれける南遠江守今は叶ひしとやおもひけん旗を巻て引退く三浦石堂か勢いを見るときいへとも戦ひ勞れたりければさまて追ひさりける遠江守は今日の合戦に危をのかれ足利基氏を具足し石濱さしてを落たりけるされの新田の兩大將の鎌倉の合戦に

うち勝會稽の恥を雪るのみならず兩大將と仰かれてまはらく八ヶ國の成敗を司り彼地に居給ひける太平記鎌倉の合戦異同あり北條本南都本太平記には閏二月廿二日に作れり是なるへし是日京師に於て足利義詮をはしめ何の用心もなく出ぬかれて居給ふ所に辰刻はかりに中院右衛門督顯能卿の三千餘騎を引率し鳥羽より推寄せ東寺のみなみ羅城門の東南にて旗の手をとき千種少將顯經朝臣の千種忠顯の子なり五百餘騎にて丹波路から櫃越より推寄て西七條に火を擧る和田楠三輪越智眞木神宮寺檜原福塚河邊野上山東橋本新判官をはしめとし其勢都合五千餘騎は宵より桂河を打越また横雲の比なるに東寺大宮に鬨の聲を擧たりける是時細川顯氏は千本に宿して居たりけるか是を見てまつ東寺に馳よらんと僅に百四五十騎にて西朱雀を下りに打たりける所に七條大宮に控たる楠か勢に取籠られ顯氏か勢細川鹿草八郎矢庭にうたれければ顯氏わつか八騎になり若狹異本に三井をさして落られける細川讚岐守頼春は時の侍所なりければ東寺邊に打て出んと手勢三百餘騎是も大宮を下りに打けるか六條邊にて寄手に圍まれ讚岐守か乗たる馬物に驚て頼春馬より落たりしを敵三騎はせ寄て起しもたてす討んとす頼春ねなからこれを拂ふかゝる所に和田か中間走かゝりて鎧にて頼春か喉ふえを突たりしかは落合て首を和田を取たりける讚岐守頼春いらたれぬ陸奥守顯氏は行方をまらすと聞えしかは義詮今はすへきやうなく近江の方にを落られける相坂の關の邊にて佐々木道譽にあひ給ふかくて儀俄高山の者とも勢多のはしを焼落しぬ山門も天王寺より大慈院法印をつかいされすてに君の御方に参りたりなど



申はとに義詮今はいかゝすへき討死そと覺悟の氣色なりけるを相模國の住人曾我左衛門  
異本に波多野に作りまた 水練の達者なりしかは向の岸に遊き着小船一艘尋出し則大將をばし  
澗谷又川村強七に作る め宗徒の者とも廿餘人をうち乗せこゝをわたしまいらせ其のち又三艘を求出し終に百五  
 十騎の者ともをつゝかなくわたしはてやう／＼四十九院にを落着ける 太平記  
并異本  
 廿一日 北畠右衛門督顯能卿堀川具明朝臣五百餘騎を率して持明院殿に参りまつ其邊の  
 門々辻々を固めさせければすはや武士とも参りしとて院内の騷動おほかたならずされど  
 も顯能卿は穩に西の小門より参り給ひて四條大納言隆隆卿をもつて世の静り候なん程は  
 皇居を南山に移し申へきよし勅詔にて候と啓し給ひければ兩院いたゝあきれさせ給ひ御  
 涙にかきくれ給ひけるなかにも新院 光明院 は元より帝位に登らせ給ふ事御心に起りたるに  
 もあらず一事も世の御政竊慮にまかせられし事あらねば御出家の御こゝろさしたのしま  
 すなりと仰ありしかとも顯能卿再應の勅答にも及はず御車をすゝめまいらせ兩上皇新院  
光嚴院光明院崇光院といへり 前坊直仁親王をのせ奉り南の門より出御なし奉りける月卿雲客多くまたか  
 ひ奉りしかと叶ふましましきよし是を制され教宮言朝臣三條中將實音朝臣典藥頭篤直北面  
 に康兼など附そひ申事をゆるされ今夜のまつ東寺までを御幸なし奉りける此時本院の御  
 弟梶井宮二品親王は天台座主にておのしましけるをもとり奉りて同じく伴ひ奉りよしの  
 奥金剛山の麓に幽居申たりける 太平記并異本  
 爰にまた武藏國小手さし原の合戦に武藏守義宗朝臣石濱にて尊氏卿を追ひ捨笛吹峠にう

群齋云小  
 田系圖に  
 少將見え  
 少將都宮  
 少將

ち登り信濃越後の勢を附くへしと此所に陣し給へは聞傳へてはせ集る人々まつ一番に大  
 江田式部大輔上杉民部大輔子息兵庫助中條入道子息佐渡守田中修理亮堀口近江守 異本に堀  
 江守にも 羽川越中守萩野遠江守酒勾左衛門四郎屋澤八郎風間信濃入道舍弟村岡三郎 異本に村  
 岡三郎 堀兵庫助 異本に  
 堀口 蒲屋美濃守長尾右衛門 或は左衛  
 門に作る 舍弟彈正忠仁科兵庫助 異本に兵庫  
 頭に作る 高梨越  
 前守大田瀧口千屋左衛門太夫 或は千雁  
 一作 矢倉三郎藤崎四郎 異本に藤崎  
 藤澤 瓶尻十郎同源五郎五十嵐文  
 四同文五高橋大五郎友野 異本に伊  
 野 十郎澁野八郎福津小三郎舍弟修理亮神家の一族卅五人澁  
 野の一族三十一人都合其勢二萬餘騎上野親王 上野親王といへるは宗良親王とせざるものならん を大  
 將にて笛吹峠に打出るまた足利尊氏の事故なく石濱に御座あるよしを聞て彼所に馳集る  
 人々には千葉介小山判官小田少將 小田少將は治久をいふにや少將になりし事は治久い  
 人々には千葉介小山判官小田少將 常陸大掾佐竹右馬助同刑部大輔白川權少輔結城判官長沼判官河越彈正少弼 異本に彈正  
 忠に作る 高坂  
 刑部大輔江戶豊島古尾谷兵部大輔三田常陸介土肥兵衛入道土屋備前々司同修理亮同出雲  
 守下條小三郎二 無 宮近江守 異本に近江  
 五郎に作る 同河内守同但馬守同能登守同伊豆守 或は伊豫  
 守に作る 曾我上  
 野介海老名四郎左衛門本間左衛門澁谷右馬允曾我三河守同周防守同但馬守同石見守石濱  
 上野介武田陸奥守子息安藝守同薩摩守同彈正少弼小笠原坂西一條三郎 異本に  
 二郎 板垣三郎左  
 衛門逸見美濃守白洲上野介天野三河守同和泉守狩野介長峰勘ヶ由左衛門 異本に長  
 崎に作る 都合其勢  
 八萬餘騎なり鎌倉には新田義興脇屋義治の兩大將七千餘騎にて陣し給ひぬ笛吹峠には義  
 宗朝臣上杉民部大輔憲顯二萬餘騎にて控給ふと聞えしかは尊氏もまついつくにか向ふへ



しと評定をせられける 太平記 并異本

去ほとに京師にても東國にても時刻をたかへす官兵蜂起にして戦争に及ひし始末をたつぬるに土岐(舟木以下廿字一本無)舟木兵庫介頼夏か故なり頼夏初より武家にくみする事を心にまかせすといへども時勢にひかされ暫く京方に屬し居たりけるところ去年の冬より兩朝御和睦の間にありて武家のはかりことをひそかに官兵につけたりし故新田の人々も便を得東西の國に於てかくの時日をたかへす軍を起し給へるとを聞えしまた今年の事なりしか頼夏か別腹の子に頼尙といふ者ありしを美濃國土岐の庄にうつし置終身行宮の御方にまたかはせ奉りけるされはいつそや周清(請)法師か武家の命にたかひしもみな頼夏等か申すゝむる事ありし故なるへし 上岐舟木系圖 并太平記推考

廿二日 北方の三上皇昨夜は東寺に御滞留あり今日にいたり八幡の御陣に行啓なし奉る 圓大曆 祇園 修行日記抄

廿三日 足利義詮は近江國四十九院まで落延てこの所に滞陣し兩朝の御和睦御違變の間はやく軍勢を起し常陣にはせ參るへしと諸國に觸たりける 朽木氏古文書 并太平記

廿四日 足利方たりし土岐刑部少輔は濃州勢を相たかへ京師にうち入る 園大曆

廿五日 鎌倉には新田義興脇屋義治兩大將七千餘騎にて陣し給ひ笛吹峠には義宗朝臣二萬餘騎にて控給ふよし聞えしかは尊氏評定してのちまつ勢のつかぬさきに大敵と聞えし笛吹峠の勢を打ちらしなは鎌倉の勢はおのつから退散すへしとて廿五日 異本に二月廿八日石

濱をうつたち武藏の府に着給へは甲斐源氏武田陸奥守同刑部大輔子息修理亮其勢二千餘騎にてはせ加ひる 太平記

廿八日 笛吹峠に於ては大将義宗二萬餘騎にて錦の御旗を打たて陣し給ふ所に 此陣に宗良親王も居給ふ 石濱より向ひし尊氏か前陣甲斐源氏三千餘騎にてかけ寄たり義宗朝臣の手よりも越後勢三千餘騎にてかけ合せいとみ戦ひたり是時寄手の宗徒とたのみける逸見入道討れければ二番に千葉宇都宮小山佐竹七千餘騎にて打出たり是よりのち敵御方入亂れ終日戦ひくらしたりけれどもはかく敷勝負もなし小勢を以て大敵に戦ふは心得あるへき事なるに義宗朝臣毎度かけ出て戦ひれしかは敵をこどく破る事あたはず結句味方はた、かひつかれ笛吹峠に引わけ給ふ上杉か兵の中に長尾彈正根津小次郎とて大剛の者ありしか敵陣に忍ひ入すてに尊氏のあたりちかくまですゝみ寄たりしに尊氏運や強かりけん見知る人ありてかくと詈りたりければ敵にかけ隔られけり二人は本意を遂る事あたひしと思ひければ扱も運強き足利殿やと高らかによゝりまつと陣中に引返しける夜に入て寄手の陣を見れば箭火たひたゝしくたきつらねとても合戦のとけかたく見えたりければ上杉か勢とも信濃路に落たりける義宗朝臣今はせんかたなく其曉越後の方に引退き給ひければ今まで勝負をうかゝひ居たりし武士とも尊氏に馳加ひり八十萬餘騎 異本に五十萬餘騎に及ひける 太平記 松井助宗申狀 信濃宮傳等に新田義宗朝臣笛吹嶺を落て越後國に赴給ひしは宗良親王に世良田修理亮親季を添まいらせ信濃國諏訪に送りまいらするよし見ゆこの親季は伊豫守政義の子にして則親季の妹は宗良親王の妾となり御ゆかりもあるにより今度の御供せしものなるへし



爰に又中務卿宗良親王の御子興良親王は近江國に忍ひ居給ひけるか敵の擒となり終には北方に幽居し給ひける 李花集新葉集より推考○信濃宮傳及び天野信景所藏古書殘篇等によるに興良親王は延願しつぎ申せしが今年天野無勢なる折から今川兵も宮に迫りたりし故一時のばりこに天野は降参し宮の御命をたすけ奉りしとや扱宮は擒の如くにて入洛し給ひ御ゆかりおはします御子左中納言爲定の許に居給ふと云時勢によればいかにも實を得たるが如しおかれども他

當月奥州の國司の宮方の武士どもをまたかへ白川の關まで到着し給ふ 園大曆のする正平七年三月七日の文書による

三月小 二(三)日 持明院本院以下八幡の陣中に居給ひしをまた楠か河内國東條の城にうつし奉るをそれよりほとへて吉野の興賀名生にむかへ奉り幽居ならせ給ひける是時本院の御弟梶井二品親王尊胤をも東條に移しまいらす 太平記 園大曆

四日 尊氏大軍になり鎌倉に寄すへき聞えありければ新田の兩大將こゝにて討死すへきよし議せられけるを松田河村の者ども某等か所領相模川の川上に究竟の要害候へりまつ彼所へ引籠り時をまち給へと申程にさらはとて石堂小俣二階堂蘆名三浦松田酒匂以下六千餘騎にて國府津山の奥に籠られける 太平記國府津山の事古字津山とも又ハ小字津山ともあるせ

八日 足利尊氏軍兵を引率して相模國に發向す 三富綱四郎申狀○新田の人々鎌倉を落して相模國にいたる處なしひり三富が申狀に河村の城に發向の事ありえらば是年彼所にて合戦あり落城に及ひしか太平記三十二直冬降参の條に翌年の春新田義興脇屋義治の相模の河村の城を落してとあると参考本に正平八年の春成へしと推考の辨をあるせとも今三富の申狀より考ふれば今年落城ありしがとし事理に於ては申狀の説成かとし故に姑くあると置いて後の参考に備ふ

九日 足利義詮近江國四十九院をたつて京師に發向す 後章 記

西源本は古字津山は金勝津山は小字津山

音義云四十九院院すの字よま

十一日 新田氏墳墓の地上野國の長樂寺に尊氏より庄園を寄附す 長樂寺古文書

是日足利義詮は近江國にありて東國にて父尊氏の手にはせ加る勢大軍に及びぬるよしを聞及び三萬餘騎を 異本に一萬餘騎 引率し伊祇代三大寺にて手をわけ近江の湖水をわたり堅田高島を打過ける 太平記

十三日 中院宰相中將具忠朝臣千餘騎にて大津にうち出給ふこれ義詮の勢を防かん爲なりしかと敵の大勢に聞おそれて寄來らぬ先に八幡へと引かへさる 太平記并 天正本

是日北畠中納言顯能卿のなを京師にとまり居給ひけるか佐女牛の若宮別當の館を陣所と定めおしける 祇園修行 日記抄

十五日 新田義興脇屋義治兩大將の籠り居給ひける相模國河村の城より足利尊氏軍勢をまたかへて發向す 三富綱四郎申狀○案するに此城に於て今日初度のいくさありしならん

是日足利義詮は京に打入ん爲東山將軍塚に陣をとる官軍の大將北畠右衛門督 異本に左衛門顯能卿の支ゆる事能いすして都を引退き淀赤井に陣取橋を引給ふ 太平記東寺長者補任 天正本太平記合考

十七日 義詮下京に着てそれより東寺に陣をとり給へり官軍の大將と仰かれ淀川に陣をとり給ひける北畠顯能卿いまた戦いさる前に避易して八幡の麓に引退かる今まで戦をましへさる以前陣を引退く事三ヶ度に及びしかは官軍の行すゑいかゝあるらんとおもはぬ人こそなかりける 太平記○櫻雲記に當月十八日伯耆國に於て名和の一族官軍と相催し船上山に打上り勢ひを近國に振ひしかは敵寄來りていさみ戦ふ城兵律師長信はこの時討死すといふ

廿四日 足利義詮は東寺に陣し給ふ所に細川陸奥守顯氏同相模守清氏四國の勢三千餘騎



にて上洛し赤松律師則祐は今まで大塔宮の若宮陸良親王の御事を申下し奉り宗徒の宮方たりける  
 かいかゝれもひけん是も京にはせ入り義詮の手に屬すかゝりしかは敵は勢ひを得御方は  
 力を落す去程に義詮其身は東寺にとゞまりながら仁木細川土岐佐々木赤松に二萬餘騎を  
 さしそへ宇治より木津川を打わたり洞かトツガ當下に陣どらしめけるこの外足利民部少輔氏  
 經同左近將監氏頼斯波兵部大輔詮經等七千餘騎は大渡に打向ひ河内國東條の通路をふさ  
 き八幡山への兵糧のさまたけをなしけるとを聞えし太平記并に異本〇祇園修行日記抄東寺長者補任  
 等には是月廿一日義詮陣と東寺にうつすといへ

廿五日 足利氏經兄弟は其勢七千餘騎大渡に打向ふ官軍の大將北畠顯能卿も橋を引て防  
 戦に及のれけるか足利勢の中に板倉平三泰義といふ者小船に棹さし漲る川をわたし打て  
 かゝる斯波詮經是を見てあれ討すなど下知する程に足利勢れもひくく打わたすされは  
 七千餘騎と聞えし氏經か勢のこらす向の岸にうち上る北畠顯能卿今は叶ひしと園殿口

(園寺に)まて引退く 太平記并天正本〇南朝編年記畠山興福寺東院(東院は東南院)日次と引く當月廿五日右衛  
 門權佐光資勅使として南部にむかひ興福寺の衆徒に示されし條々に曰兵糧を運送すへき事  
 吉野の執行某と越智某と合體し武家に心をよするよし風聞あるの間嚴密に沙汰すへき事坊人と催し八幡の後詰に參る  
 へき事はらとて申されしは廿六日は返事をまいらすといふふれともいまた其本書を見すよりて後に注して參考  
 の便り  
 となす

廿七日 去程に和田楠の人々は紀伊和泉兩國の勢三千餘騎異本に二千騎を引率し荒坂山に控た  
 りはしめ和田楠出陣せられし時和田五郎正忠は異本に正忠又正兄に作れり一説に正兄は和田五郎の弟  
 なりといへり今北條家本によりて名を正忠とあるす  
 年十六桶次郎左衛門尉正儀は二十三異本に廿二歳いづれも若武者なりければ思慮なき合戦をや

なすへしと諸卿案し思はれけるかゝる所に和田五郎參内して申やう親類兄弟度々の合戦  
 に身を捨討死仕候畢今日の合戦は公私の一大事と存候うへは命限り合戦仕敵の大將を一  
 人討取候はすは生て再び御前に歸り候事有ましく存候と申切て罷出けり列座の諸卿國々  
 の兵士あわれ和田は世々の勇士かなと感せぬ人はなかりけり去程に荒坂山に打むかふ勢  
 には細川顯氏同清氏土岐大膳太夫同惡五郎土岐系圖に惡五郎康貞三河守に  
 任す頼清の子頼康の弟なりと云六千餘騎なりこの山  
 の甚難所なりければ麓より馬を乗放てそすゝみけるなかにも惡五郎は名を知られたる大  
 剛の者なりしかは山路をもたゝ一息に打登らんとかけたりける和田五郎は是を見てあ  
 れ敵やとて小長刀を壺みちかに取て渡し合ふこゝに細川相模守清氏か衆徒に關左近將監  
 といふもの土岐か脇よりつと走抜て和田に打てかゝる是時和田か中間小松のかけよりす  
 いみより能引て放つ矢に關將監は胸を射られ小膝を突て伏たりける惡五郎すゝんて將監  
 を引起さんとする所を和田か中間二の矢をもつて惡五郎か脇立の壺の板くつまさせめて  
 射こんたり關今は助くへき兵なしとれもひければ腹切らんとなしけるを惡五郎はし自  
 害なせると是を制しわか射込まれたる矢を引切り敵を五六人きり伏せ關を小脇にさしは  
 さま三町はかりは落たりける和田五郎も跡に續て追かけしか惡五郎運や盡けん片岸を越  
 ゆるとて藥研のやうなる所へ落たりしを和田すかさす長刀の柄をとり延て二人ながら討  
 留けるそのうち主上の御前に參し合戦の體を奏聞しければ叡慮淺からさりけるとなん是  
 日の合戦に惡五郎を討取たれとも敵の大勢なれば始終いかゝあるらんとれもひめくら



されける夜に入て楠正儀は八幡山にを引退かれける太平記并異本園大曆常樂記等合考

四月大三日 伯耆國に於て官軍名和備中權守又長門守左衛門尉に作る行實同左京進高政同興村小鴨

下條等敵とたゝかひ終に命を失ふ系圖并に伯耆卷合考異本に三日と二日に作るもあり

五日 頃日に及び八幡山に屯する官軍兵糧乏しくなり防禦の便を失ふ園大曆

廿一日 山名伊豆守時氏出雲因幡伯耆の勢を率して上洛し八幡の寄手に加らんとすゝみ

ける所に道にして野伏ともにあひ山名か勢多くうたる園大曆 太平記伊豆守時氏事太平記には右衛門佐時氏と毛利家本太平記には師氏并に

彈正少弼義理と載たり今時氏に作るものは園大曆による

是日山名か勢は八幡山に打ひかひ一軍あるへしと宇治路より美豆野上野を経て寄たりけ

る爰に官軍の大將法性寺左兵衛督康長朝臣山下に陣とり居給ひけるか兵とも山名か勢さ

そひけるをみて避易し引退たりける其中に康長朝臣たゝ一騎は取て返し敵三騎まで切て

落しそのゝちまつかに御山の陣にを引かれける山名勢はこのゝち財園院に陣とりてうち

圍めは康長朝臣は寺堂口にを支たり太平記并天正本

廿四日 片野の郷民官軍に屬し武家の下知にまたかひさりしかは細川顯氏彼民屋を焼た

てたり其比八幡の御陣に兵糧運送せしかは敵も此事を聞つたへまはし遠攻の術をやめい

つれ一軍なすへしと寄手のはかりことをめくらしける園大曆

廿五日 八幡の寄手諸手牒し合せ同時に攻かゝる北畠顯能卿の兵并に伊賀伊勢の勢三千

餘騎は園殿口にさゝへ和田楠湯淺湯川山本和泉河内の勢は佐羅科といふ所に屯し寄手

を防たりけるか軍いまた半ならざるに高橋の在家より神火燃出て魔風十方に吹かけたり

かゝりしかは官兵の烟にむせひ防んとするに術なけれのみな八幡の御山に引わけり是

を見て寄手三萬餘騎洞か峠に打あかり土岐佐々木山名赤松松田アツク入道等一勢く

數十ヶ所に陣をとり鹿垣結て八幡山を五重六重にを取巻けるなかにも細川顯氏は眞木葛

葉をうち廻り八幡の西如法經塚の上に陣をとり官兵に打向ひてを扣ける是日八幡の勢に

於て名和の一族兵庫允長氏討死をとく太平記名和系圖

廿六日 扱も寄手は八幡山をとり圍み細川顯氏同清氏などは八幡のうしろ經塚に前にみゆ

塚の陣とり居たりしかは今まで山の麓にわいしましける主上の御座を山上にうつし奉る如法經

園大曆

廿七日 春日山にある所の神木八千本ばかり故なくして俄に枯たりけれの大明神この山

を走り給へるなるへしとて神官れそれをなし祈念をそこめたりける春日若宮神殿守記

こゝに又去る二月官兵を催さんか爲に關東へ下りたりける兒島三郎入道志純の漸彼地に

いたりける所に新田の一族は先達てより義兵を起しはや東國の合戦事散し義興義治の兩

大將も河村の城にこもり給ひ義宗は越後國に退き給ふ比なりしかは兒島入道又こゝかし

こにはせ廻りて勅諭の趣をかたも兵を起し給ふへしと告たりしかは小山五郎異本に四郎宇都

宮少將も東國靜謐の計略をめぐらすへきよし約諾し義興義治二人の猶東國にとゞまり尊

氏と合戦あるへきよし勅答を申さるそのはか新田武藏守義宗朝臣の越後に於て桃井播磨



守直常上杉民部大輔吉良三郎滿貞石堂入道と相はかり東山東海北陸道の勢を相催し八幡山の後詰せんと其勢七千餘騎二十七日に及びて越後國津張を打ちあすてに越中國放生津に着給へは桃井か勢三千餘騎はせ加り一萬餘騎になり上洛をそいそかれける太平記

同日八幡の後詰せんとはかりける吉良三郎并に石堂かどもからは駿河國を打ちあす路次の軍勢を驅催し六千餘騎異本に五千を引率し道をいそきて上りける太平記

五月小 四日 八幡山には官軍七千餘騎にて籠り給ひけるか其なかより夜討になれたる兵八百人を勝り出し法性寺左兵衛督康長朝臣につけられければ康長朝臣は暮程より我陣に集り笠驗を一樣につけさせ相言葉を定め夜すてに三更なるに如法經塚の敵陣に推よせ鬨をとつとあけたりける暗さのくらし分内はなし敵陣大ひに狼狽し討たるもの數をえらす是時細川左近將監正氏をはしめとしあまたうたれければあや一陣破れて殘黨全たからすと見る所に土岐山名赤松か陣の些とも動かす鹿垣密しく結ひて用心堅く見えなれば夜討に打入へき様もなく夜討の勢の山に引あけたり扱このまゝにては始終いかゝあるへきと相議し和田楠にの後詰の勢を相催し參るへしと忍ひて河内國へを歸されける太平記

天正本異本にこの事跡と三日にかけたるもありかくて其のちの八幡に籠り官軍を援へき勢もなく河内に歸りし和田楠か後詰をたのみ居給ひしに一大事を心にかけてたる和田五郎は俄に病出して幾程もなく病死をなし楠正儀のみ河内にて勢を催すといへともけふ翌日と後詰を延引し主上の大敵に圍まれ居給ふをいかゝせんとれもふこゝろもなく居られけりされ父にも兄にも似

ぬ人かなとそしれる者を多かりける太平記

六日 足利義詮東寺西院に命して五檀の法を行のせければ道場は小子坊にて大僧正賢俊大僧正増仁僧正光惠大僧正清顯僧正垣垣は豪等はを修行しける東寺長者補任

十日 八幡の御方として彼山に籠りける伊勢の矢野下野守熊野の湯川庄司祇園修行日記抄に湯淺入道に作る兩勢三百餘騎を園大曆には二引わけて敵に降参なしたりける官軍兵糧のつきぬ山の案内の敵に知られたり此儘ならば落るといふとも叶ふまじさらぬまつ主上を落しまいらすへきなりと人々衆議をせられける祇園修行日記抄

十一日 去程に其夜も夜半はかりになりしかは主上をば寮の御馬に乗せまいらせ兵ども前後に打かこみ大和路にむかひて落させ給ふかゝりければ敵の前を遮り討留奉らんとひしめきける義によつて命を捨んする官軍共は返し合せて討死し或は防きたゝかひて落しまいせけるあひたうたる者三百人に及びける宮も是時うたれさせ給ひ案するに宮の御諱詳の文書に載せて石見宮と討取とある四條一品隆資卿の赤松勢の爲にうたれ給ふと聞ゆ其外圓明院大納言名三條中納言雅賢卿頭中將具忠朝臣參議中將實勝卿公興朝臣景繁卿章興以下こゝかしこにて討死をとけ給へり園大曆に載する所の討死の姓名太平記と異同あり今まはらく所見の及ぶ所は諸書よりこゝに合せざるせり故に官位家號等脱せしもあり

亂軍にてありしかの主上の軍勢にまされ給ひん爲に山本判官かまいらせたりける黃糸の鎧をめされ栗毛の御馬にて落させ給ふ一宮彈正左衛門有種といふもの追かけまいらせまかるへき大將と見奉れ返させ給へとよいゝりて弓枝杖三丈ばかりにそ近つきける法性



寺左兵衛督きつと見てにくき奴原かなれのれに手なみの程を見せんすとて馬より飛下り  
 四尺八寸の太刀をぬきてまたゝかに兜の鉢を打たれいさしもの一宮尻居にとうと打居ら  
 れ目もくれ氣もくれけれの心をまつめて目を塞たるひまに主上もはるかに落のひ給ひ  
 ける古(木)津川の端を西に傍て御馬をはやめ給ふ所に備前の松田備後守備後の宮の入  
 道々仙か者とも二三百騎にて取籠奉る異本に五  
百に作るこのものともか十方より雨の如くいかけ奉  
 る矢なれの遁れ給ふへき方ありとも見えさりけるまかるに天地神明の御加護も有けるに  
 や御鎧のそて天正本に胸  
板に作る草摺に六(二)筋まであたりける矢のかつて裏をいかさりける法  
 性寺左兵衛督い是迄もなを離れまいらせす只一騎供奉したりけるか跡より追奉る敵あれ  
 の取て返して防きまいらする所に何地よりもあらず中黒の笠験附たる御方の勢御馬の  
 前後にむらから供奉し奉り敵を右往左往にかけちらしてのち消か如くに失にける其のち  
 主上の玉體もつゝかなくて夜の明かたに招提寺まで落させ給ひける内侍所の櫃いしめ  
 勅をうけて持たりける者田の中に捨たりけるを伯耆太郎左衛門長生伯耆卷によるに名和長年か  
姪大井太郎左衛門長重後大  
藏少輔又大井能登守なるものこの  
舉ありしと見ゆ長生と同人成へし是を見奉りれのか着たる鎧を脱捨みつからは是を荷擔したるあ  
 とより追ふ敵雨の如くに射奉る矢なれの長生も疵を蒙り唐櫃にも十三逸矢の立けるされ  
 共つゝかなく是を守護して終に賀名生の御所へまいらせたりける太平記異本太平記伯耆卷細々  
要記吉野拾遺合考○案するに  
太平記の文によれば十一日の夜八幡を落給ひ其あかつき東條に入らせ給へるが如しふかひとも一夜うち八幡山よ  
り河内の東條に入らせ給はん事いふが如し又伯耆太郎左衛門長生内侍所の唐櫃を賀名生の御所へもちて参れるよし  
記たればそれより已前に主上は賀  
名生に還御ありて居給へるが如し

是日兒島三郎入道か催促により勅命に應して北國に旗をわけ越後國より攻登りし新田義  
 宗朝臣及び挑井か軍勢ともは能登のくにを發向す又石堂吉良か兵ともいさきに國を發し  
 先陣美濃國迄發向し赤坂垂井に着陣す其外信濃國に居給ふ中務卿宗良親王の神家澁野友  
 野異本に  
伴野上杉仁科禰津高梨板倉以下の軍勢を召具して同日に彼國をたゞせ給ふ伊豫國に  
 の土居得能兵船七百餘艘に取乗て海上より攻上るまかのみならず東山北陸四國九州の官  
 軍みな國々をうつたちしかいたとひ五日三日の遅速ありとも此勢とも後攻をなした  
 らんに八幡の寄手のみな退散すへかりしをこらへすして主上八幡山を落させ給ひしこ  
 をせんかたなき事にて有けれ太平記細  
々要記  
 是日足利義詮東寺を出て中條備前守か館にうつる園大  
曆  
 十二日 去程に主上は招提寺より宇智郡の方に過させ給ひ其夜に三輪を歴宇陀の水ミコサリ分宮  
 に御移りありしよし聞えし園大曆細々  
要記合考  
 去程に八幡山の後詰として美濃國垂井赤坂所々に出陣しける者とも主上すてに八幡を落  
 給ふと聞てみなちりゝになり行てたのか國々を引返しける官軍時いたらざる程とい  
 云なからつたなかりける御連とを見まいらせける太平  
記  
 十三日 八幡山を落たりし兵ともあるひに南都に忍ひまたの東條に引退きたりと聞ゆ園  
曆  
 是日八幡の合戦にうち死せし官兵の首ともを京師に上せけれの北方の沙汰として六條河



原にて梟せられける 同上○園大曆に八幡討死の事公季(泰)卿の状を載せて公冬卿は流矢にあたりたれども  
子細なく四條隆資卿の外は節を失ひ給ふ人なきよしあるせりといへども同書梟首の交名  
をふるせし處には名前あまたみえたりされは一書うちにくも見聞にあたかひあるせ  
し故かくは異同あるなるへしより上にも諸史を合考してこのは戦死の交名をかけたなり

六月大 二日 去る頃八幡までともなひまいらせし北朝の上皇をかねて東條の城内にう  
つし置奉りけるを今日に及びまた賀名生にむかへさせ給ふ 園大曆 皇  
年代畧記

五日さきに鎮西に於て足利直冬伊東八郎等をかたらひ所々を亂妨し尊氏の御臺所の御領  
日向國穆佐院を押領しけれの一宮の方より直冬方の者どもを追討すへきよし今日其沙汰  
に及ふ 島津氏  
古文書

十五日 行宮にて叡慮もありしかいさきに賀名生の御所にうつし奉りし所の北方の上皇  
に定兼卿女新宰相典侍法皇御方に隆蔭卿の妹中納言典侍新院御方に勾當内侍宮の御方に  
故實明卿の女對御方を京師より召されける 園大

十九日 去年天下一統の御政務たりける比天台座主二品尊圓法親王の御山務をとめま  
いらせたりけるか今又北方の沙汰として元の如くにまかせられけるこれ洛にとまり給  
ひける廣義門院の院宣とを聞えし 天台座  
主記

廿一日 梶井二品親王は去る五月の比より金剛山の麓に山本三郎と云けるもの奉りきひ  
しく守り居たりけるふた月はかりねはしけるに御邪氣のこゝちし給へい峰通る山伏もか  
な行ひさせんとありし程に武士とも山伏三人具してまいれりやかて御枕上にめして行ひ  
させ給ひける二日はかり過て御心地快くならせ給ひたりとて山伏に布施たまひ守衛の

十には酒たひけり其曉山伏い出て歸りけるか跡にて宮ねいしまさぬと云のゝしりしかと  
今はいつ方に逃させ給ひけんまらさりける是の御門徒の律師元祐といふもの笈を大に  
こしらへ宮とはかりとめくらし其内にかくしまいらせ落たりける所也宮は其夜興福寺に  
つかせ給ひ程なく都にかへり給ひしとかや 園大曆太平記吉野拾遺○梶井宮の吉野山とち出給ひし年  
二年はかり置てといへ  
るは二月の誤成かといへ  
月は参考太平記に辨する如く是年六月の事なり吉野拾遺に

廿七日 武家の輩正平一統の紀號を改め再び觀應三年の年號を用ゆ 續神皇  
正統記  
是日朽木出羽守武家の感賞にあつかる是去る八幡の戦に功あるによらてなり 朽木氏  
古文書

南山巡狩録卷第八終



南山巡狩録卷第九

大艸公弼 編

後村上院 吉野山賀名生と皇居とす

正平七年 壬辰

北朝文和元年

七月小 五日 細川陸奥守顯氏病により出家を遂げ尋て卒す顯氏は去る八幡の戦に武家の惣大將として山上に攻上り山下を焼はらひ極樂寺まで焼亡なしける人なりけるか冥罰にこそあるらんと世に申ふらしたりける 園大

十六日 北方より越後刑部丞師秀河内國東條に打向ふにより軍勢を催促す 蓋簡集

中將實勝朝臣さんぬる八幡の戦ひにうたれ給ひけるを北の方なけきのあまりにやありけんうかれ出給ひてなつみの川に身を沈め給はんとてかたはらの巖にのそみ「山かけのくらき闇路にまよひなんなつみの川に身を沈め給はんとてかたはらの巖にのそみ」山かけのくをなけ給ひける御跡をたつね求けるものとも岩の間にかゝらせ給へる御すかたを見てとりわけ奉るにいまた御息の通ひければとかくいたり奉れば人心地つき給ひぬ其のち御なけきのあまりにや尼になり給はんとありしを今の人々も御心にまかせたりけるこの北のかたは洞院實世卿の御女にていまた實勝卿に嫁し給ひていくとし月をも経給はてかゝる事ともなりけるいあはれなる事のかきりなりし 吉野拾遺 同し程にや關白師基公の御許に召つかはれし齋藤右馬允行繼といふふもの去る八幡のた

かひにあやまちありしかは勘當し給ひければ行繼もせんかたなく出家して身のあやま

りを悔たりける 吉野拾遺○或書に行繼が八幡のたいかひにあやまちありしは主上落させ給ひける時内侍所のつらひつと預け給ひしと敵に追はれて捨置奉りける故なりといへり

廿四日 島津氏久大隅國に打入り直冬方なりける畠山修理亮直顯父子及び日向大隅兩國に於て宗徒ときこえし者共と合戦をなしたりけるまかれとも津島か勢諸道をたちふさかれて難儀に及ぶ

八月大 三日 饗庭命鶴丸七八百騎にて上洛す是の尊氏義詮と直冬と和睦あるへき事をこ

しらはん爲なりと聞ゆ

八日 八幡のたゝかひに河内國東條まで移しまいらせける光嚴院上皇落飾し給ひて御名

を勝光智と申奉る御年四十一 椿葉記 園大曆 公卿補任○太平記に北朝の上皇御出家有のち京に入らせ給ひてより夢窓國師に禪教を聞き召されし由見えたるは誤也北方の上皇歸洛の

此は夢窓國師は入滅の後にして北朝の上皇禪法を傳給ひしは是より遙か前の事也

十二日 光嚴院上皇南方にて御落飾ありけるよしを聞て北方に在りける正二位大納言公

蔭もおなしく頭おろし法名を空靜と名乗る 公卿補任

十三日 前關白左大臣經忠公いつそやより病ひによりて職を辭しなを大和のかたに閑居

し給ひけるかいたはりおもらせ給ひしかは昨日出家をどけけふにいたり終にむなしくな

らせ給ひける御とし四十八となん 公卿補任 紹運要録

十四日 光嚴院上皇出家し給ふよしを聞て京に在りける從三位重兼も出家をどくる 公卿補任

十七日 去程に北方の上皇みな南山にとらはれ給ひ宮々さへ京にのこらせ給ふ御方もな



くこゝかしこに立わかれ給ひしにいま御和睦やふれ天下もどの如く亂れたるに北朝の天子なかりければ光嚴院第二の御子御諱ハ彌仁親王とて三條内大臣公秀の女三位殿の局ときこえし御腹に生れさせ給ひ去年御繼母宣光門院のはからひにて妙法院門跡へ御入室あるへきよし事既に極りしを御祖母廣義門院より内々實算法印に御占をとほせ給ひたりければ王位につかせ給ふへきよし申たればまはらく御出家の事をとめ右少弁時光右大臣に非也に預置まいらせられける去比八幡より日野春宮權大進保光異本に太夫に作るに仰てとり奉らんとなされたりしにもとかく滞りて京に捨置奉りし所なるを武家より御位につけ奉りける後光嚴院と申せしハ此宮にてわたらせ給ひ今年は十五にならせ給へり終に此宮の皇統四代まで繼體をつかせ給ふとなん是よりのち天下また偽主おはしまし兩朝につかへまへらするもの思ひくゝにありけるなり此日再び二條良基を以て北朝の關白とす太平記 園大曆 椿葉記

十八日 去月の末より島津か勢大隅國に打入て直冬にまたかふものともをうちまづめんとすまかれとも直冬方の者ともよくはかりとをなし諸方の道をふさぎけれハ歸路難儀に及ひけり島津やうやく一方を打破り本國に引退く島津氏古文書

十九日 光嚴院上皇出家のよしをき、正三位前權大納言氏忠もまた北方にて出家の身となる公卿補任

當月後嵯峨院後深草の皇女三女姨子内親王院號陽徳門院かくれ給ふ御とし二十五女院小傳

廿六日 山名右衛門佐師氏は八幡のたゝかひに功ありければ先年尊氏より恩賞ありてい

また當知行なかりける若狭國齋所今積を元の如くに宛行ひ給ふへきよし佐々木道譽に屬して申達せん爲に彼か宿所に至る事日々なりけるまかるに道譽ハ遊興の會なりとて日ごとに對面なく右衛門佐むなく歸りけれハ大に是をいかりて我れ才とほしといへとも大樹の一門に列する身として所詮叶はぬ訴訟なせはこそ媚ましき人にもへつらへ謀叛を起してやかておもひまらせんと廿六日の夜半はかりに主従八騎伯耆をさして落ゆけは從ひし兵七百餘騎跡を追ふてを下りける日あつて本國に下着し親父左京大夫時氏に京都にて面目を失ひし事も語りければ時氏も大に立腹しやかて南山に使をまいらせ降參の事を乞ひければ即ちゆるされけるこのち道譽か小目代として出雲國に置ける吉田肥前最覺といふものを追出し事の仔細を相觸るに富田判官を始として伊田波田多イ野矢部異本に矢野小幡に至るまで皆同意しければ出雲伯耆隱岐因幡四ヶ國即時に同心なしやかて牒送して官軍をいたされ同時に京都に責入らんと申たりける太平記 〇山名時氏は八幡の寄手にみえたりい

系圖を見るに此とき家臣小林民部丞重村河村山城守秀政兩人をして南山にまいらせ降參の由を申たりしハ御許容ありて錦の御旗を賜はるさいふ此御旗今山名家に傳來せり聞けり公弼按するに錦の御旗ハ官軍たる人ハならず是を賜る所にして其起る所久しからず軍器考の說によれば元弘の初帝笠置へ臨幸の時此御旗建られしさいふ事太平記にあるを初とすへきよしみゆそれより勤王の舉あればつならず賜ひしと見え諸家に用ひし事所見まありて製のときは一ならざるか如し是ら其事に委しき人に譲りて爰に記さす

晦日 北方より鎗倉にさし下されたる尊氏の次男足利鎌倉三郎基氏左馬頭になる園大曆

九月大 十八日 鎮西に於て足利方島津上總入道所勞により快氣のち分國の勢を相催し直冬方と合戦をなすへきよし御教書をあたへらる島津氏古文書



十月大 十四日 北朝にて二品尊胤法親王天台座主に還補し給ふ天台座主記○當年六月十九日二品尊胤法親王還任の事みゆこ

に尊胤法親王天台座主となり給ふ事みゆれ尊  
圓法親王山務と辭せらる事この以前に有へし

廿九日 北方に於て國母陽祿門院秀子准三宮の宣旨を蒙らせ給ふ女院  
小傳

當月官軍の大將石堂右馬頭賴房摠州多田院に在陣して軍勢甲乙人禁制の制札をかゝく多田院古文書○一本系圖を按ずるに石堂右馬頭賴房入道皇居に参りしかば即選俗をなさしめ給ひ從四位下刑部卿になされしよしみゆまるとにやあらす

十一月小 四日 楠の一族を初として吉良石堂官軍となつて攝津國に出張す園大

六日 石堂か勢攝津國に攻寄せ當國の守護代として北方よりをかれたる者共を追出す同上

七日 石堂等か勢を防かん爲佐々木道譽か息男同秀綱ならひに五郎右衛門等攝津國に打向ふ同上

十日 足利義詮檄を佐々木出羽守か許につたへて軍勢を催促し東條に向ふへきよしを命す朽木氏  
古文書

十二日 北方の國母陽祿門院御腦によりて出家し給ふ女院  
小傳

この日鎮西に於て足利直冬たゝかひまけはらく長門國豊田城に忍ひ居てひそかに菊地小貳など音信を通して便宜をうかひける園大

十三日 龜山院の御子下河原宮益助親王二品上乘院益性薨し給ふ  
常樂記

十六日 爰に又去る正平二三年六月廿五日の事とかや大乘院の者とも神人と不慮の合戦出來たりし所に今とし四月神木俄に枯るゝ事ひひとへに神慮の告給ふ所なりと申程に

一乗院より扱になりて無爲にそ成たりける春日若宮  
神殿守記

廿日 頃日山名桃井京ちかく攻入るときこの園大

廿五日 後醍醐天皇の皇子法仁或は  
朝良法親王さきに仁和寺に御入室ありて新御堂室とも稱しまいらせたりけるか頃日の御所勞終に重らせ給ひ今日かくれさせ給ひける御としは

廿八とを御母の從三位爲通卿の女なり常樂記  
仁和寺御  
傳  
南朝紹運圖

故法仁法親王御室に御住職の比正平六年の事にやありけん大野殿より仰らるゝむねあり北方にて官庫に藏めし慈惠僧正三衣一合を御室にまいらせらる御室御文  
書目錄

頃日鎮西に於て一宮を攻て勝利を得たり園大

此程直冬は種々の告文を行宮にまいらせ吉良石堂にも使を遣して官軍に降參なすへきよしを望たりければやうくに御ゆるしを得て勅免の綸旨を賜はりける同上

赤松律師則祐は去る正平六年七月私の宿意を達せん爲に一度官軍となり故大塔宮護良親王の若宮陸良親王を申らるして大將となし旗をあげたりしかとも忽に官軍をそむき奉りしかは當年將軍宮陸良親王は心ならずも京師に登らせ給ひ囚人の如くにて居給ひける所に但馬國の者とも盗出し奉り高山寺の城に入奉る本庄平太同平三やかて御手に屬し但馬丹波兩國を打給ひけるに從かはすといふものなく播磨國をも退治せんと山陽道へ向はせ給ひけりまかるに赤松則祐三千餘騎にて甲山の麓に馳向ひたゝかひ奉り合戦いまた半ならざるに宮の一騎當千とたのませ給ひける本庄平太同平三二人なからうたれけれ軍忽



ちによふれて宮の河内の方を落させ給ひける 太平記三十卷尊氏兄弟和睦の條同しく三十四卷大塔の若宮謀叛の條あはせ陸良親王の御事跡は南朝紹運錄等より推考してこゝに載す

廿八日 北方の國母陽祿門院かくれさせ給ふ御とし四十二女院

十二月大 今年諸國飢饉す 園大曆○南朝編年記畧に年中行事の奥書と引て今月准后親房卿に命して先帝の年中行事と清書なましむるうへ御秘抄と題せらるゝといふ先帝の年中行事日中行事とも流布木には奥書なし異本によりてあるせしならん○菊地傳記に當年鎮西にありて懷良親王肥後國八代郡に顯考寺を建立し大方和尚をして開山たらしめ同國高瀬といふ所には蒼園山願行寺と建立し遊行五世の他阿上人と開山となすといふ

後村上院 吉野山賀名生を皇居とす

正平八年癸巳 北朝文和二年 六月十四日より七月下旬に及ひ北朝にて文和を用ひす

正月小 五日 佐々木佐渡判官入道道譽北野社參と稱して近江國に下向し柏原城に閑居な

すよし披露す是は去年饗庭命鶴丸氏直上洛してより義詮に相ばかりて尊氏に讒をかまへ

けるよしをつたへきゝて鬱陶に堪すひそかに知音を相かたらひこゝに及ふ所なり 園大曆

七日 佐々木近江守秀綱攝津國に打むかふところに寄する勢もなかりければ即ち京都に

引退く 同上

八日 佐々木道譽柏原城に籠るよし聞えければ義詮やかて相原下總守及び賢俊僧正を使

としてこれを答ん爲に近江國にむかはしむ 園大曆○櫻雲記に當月十日備前國岡山に於て官兵上(上)無(上)神太郎左衛門尉高直といふもの戦死と云

二月大 四日 夜半はから北方の内裏に於て隨身所より出火し持明院の仙洞もこの時に燒

上す 園大曆太平記

晦日 今日飛檄北方に到來しければ上下周章をなす事のよしを尋ぬるに鎮西に於ては足

利直冬勢ひを揮ひ去かのみならず紀伊の官軍四條隆俊卿は八庄司の者共を相またかへな

を近國に打て出んと企給ひしゆへなりと聞ゆ 園大曆○新田系圖一本に義貞朝臣贈位の事を載すといへ

當月行宮より義貞朝臣に中納言正三位を贈らるゝよしみゆ 南朝編年記畧に又一本の系圖を引て

三月小 三日 大和國大風雨にして春日の社二の鳥居を打倒し興福寺の兵衛の門をも吹倒

す 春日若宮神殿守記

五日 頃日國々の官軍蜂起なすと聞えしかは是を防かん爲に武家より土岐右馬權頭頼康

を攝津國にむかはしむこの夜は頼康山崎に宿陣す 園大曆

此程にや足利義詮攝津紀伊の方に兵を出して官軍を防かんとすこゝに土岐の一族(一族一

一本一揆に作る)舟木頼夏同頼尙一方の大將を奉りける所に頼夏其子頼尙にむかひて曰我れ

朝敵となりて足利氏の命にまたかふの素志にあらず勢ひやむ事を得かたき故なり汝のは

やく官軍に屬して義兵を舉へしとなり頼尙の父の命にまたかひ熊野より伊勢に赴き多藝

郡三瀬谷は先祖の領せし所なりことに國司官軍としてたのする地なればこゝにとま

りて義兵を舉んと企ける 舟木系圖

五日 足利義詮佐々木出羽守及び同近江守に下知し相共に山門を警固なさしむ 朽木氏古文書



北朝の文  
和二年

十九日 足利尊氏上野國世良田の長樂寺に庄園を寄附すこれの故世良田彌次郎滿義の跡なり 長樂寺古文書○按するに世良田彌次郎滿義君は其先清和天皇に出鎮守府將軍源義家より三代新田義重朝臣の三男徳川三郎義季君の後也義季君東鑑に徳川三郎とも四郎とも申御名を義秀と見えたり此人上州新田郡世良田の長樂寺を開基し給ひしより代々墳墓の地を成りぬ義季君より四代と稱義君と申す長樂寺の古文書によれば左京亮とも或は下野守とも兵庫介とも孫次郎とも見えたり元亨三年嘉暦三年元徳二年等の文書長樂寺に存するを見れば其比在世の人にて正平八年の比ははや卒去し給ひしかまた或は足利氏の爲に本國を出給ひしかいつれ上野國を退去し給ひしと見ゆ又太平記に見えたる江田三郎光義と申は則此滿義君の御ことにて侍ることもいへり一説に滿義君のち江田三郎光義と號し新田義貞にたかひ戦功をさげ給ひ義貞戦死のち上州世良田に居給ふとも見えたり鹽尻十五に徳川下野守滿義君ハ新田義貞戦死のち吉野の行宮に志をよせ奉り素志をさげ給はんとはかり給へるよしみえたり三州八代記に滿義公幼稚の御時新田義貞討死し給ひしかは目もに官軍の武威おさるへせんかたなく侍唯一人召れ世良田を忍び出知る人少なき筑紫の方に落させ給ふとみえたり此説によれば長樂寺の古文書に元亨の年號有ものと合はす扱又八代記の説によれば筑紫にたはらく年を送り御老後に再び世良田に歸らせ給ひて終に卒去し給ふよしみえたり其跡にあつしかならず長樂寺古文書には元亨の比より御名もみえたりは正平比には失給ひし人とみえたり其餘滿義公の事跡にあつかる所の書多しといへども多くは信しがたきものなればたはらく古文書により他は畧して載せず

廿三日 官軍吉良石堂攝津國神崎の邊に打て出土岐頼康と吹田にたゝかふ土岐はかりこ  
とをめぐらしける程に官軍終に打負て討るゝ者多し園大  
此程鎮西に於て直冬の命にたたかふもの多く備前の輩すてに美作に入る美作國もみな直  
冬の下知になひさける園大

此春の事にてありける北方の院にとらはれと成り給ひて吉野の奥にすませ給ひ黒木の御  
所の淺間しきにおいしたりけるを見る目もいと悲しく櫻よりはかに御慰もなかりけれ  
中納言局と聞えしか「かゝる世もよしやよしの、山さくら宿のものとしてかさしにもせん  
と奏したりければすこしもなくさみ給ひける吉野拾遺○按するに吉野拾遺に前年の事とすれども前  
年はいまた吉野に入らせ給はれぬ誤なり今年とすへし

廿九日 安鎮大法供養により尊氏威儀を整て出陣あり供奉の武士三拾人帶刀はなかりけ  
る朽木氏古文書 帶刀次第○按するに此時尊  
氏鎌倉に在陣なりこの供養も彼地なるへし

去程に鎮西に於て一宮島津の人々武家の命をうけ大宰府に於て合戦を遂る所に將軍の宮  
軍勢をたかへ後詰し給ふほとに一色か軍勢終にこらへすして引退くこの、ちの官軍い  
よゝ勢を得近國を打なひけた島津氏  
古文書

四月小 五日 京師大風眞言院破壊す東寺長  
者補任

十日 尾張國に於て原峰屋以下の官兵土岐と合戦をなす當國の守護として北方より置か  
れたりける土岐か家人とも粉骨を盡して戦ふほとに官兵も廿餘人討死す園大曆○南朝編年記  
畧には當月八日天野

五月大 七日 去程に山名時氏父子は南方に降參なし今日伯耆國をたち丹後但馬の勢二萬  
(二萬一本に三千に作る) 餘騎を引具し丹波路にかゝりて責上る兼て相圖をなしけれの南山よ

りも總大將として四條大納言隆俊卿隆資卿の男なり異本  
或は中納言に作る 法性寺左兵衛督康長朝臣和田泉守  
楠正儀原近江守峰屋信濃守赤松彈正少弼氏範湯淺志貴藤澤波 異本太平記に吉  
良石堂を載す を始として

和泉河内大和紀伊のものとも三千餘騎をすくりてをすゝまれける太平  
記

十五日 比日楠正儀の軍勢天王寺に屯をなす園大

十九日 義詮小早川將監入道を殺すこれ義詮に叛き夜討せんと企し故なり園大

同日去程に官軍數を盡して京近く攻上り南の淀鳥羽西は梅津桂里に陣をとら焼つゝけた

行幸行宮  
の河内宮  
國金剛寺  
文書にあ  
り



るかゝり火幾千萬といふ數を去らす此時尊氏はいまた鎌倉に居給ひ京の無勢にして合戦  
 いかゝあるへしと見えたりけり太平記 園大曆十  
九日園大曆による  
 廿五日 官軍都に打入るへきよし聞えて落中騒動すまかのみならず直冬はすてに軍勢を  
 打たたかへて周防の國府に到着なすともきこえたり園大曆  
 六月小 二日 山名伊豆守時氏すてに官軍となりて丹波の志宇智につくとも聞えあるひの  
 和久の城に至るとも嵯峨邊まで打入たるともさまゝに風聞せし程に武家の騒動少から  
 す園大曆

五日 吉良石堂以下の官軍八幡山にうち上つて陣をとる園大曆

六日 今曉の事とかや北朝の主上は執柄押小路の亭に行幸ありこれ當代に於ては初度と  
 聞えし八幡の官軍より大渡の橋を引き四條隆俊卿は紀伊熊野の勢を引率して到着しぬら  
 んと聞ゆる程に京都は餘り無勢なれば大敵に戦ふへき様はなかりけれども宰相義詮大勢  
 なればとて一軍もせていかゝ聞逃をはなすへきとて再ひ行幸を山門の東坂本に催し奉り  
 て官軍の寄せ來るをまたれける太平記 園大曆

七日 宰相義詮は京にのこり二千騎園大曆 千騎は  
かりといふはかりを相たかへ河原に打て出靈山に  
 陣をつて太平記に神  
樂岡といふ待たれけるまかれともことなる軍のなくて箒火をたきてそわかされけ  
 る太平記  
園大曆

八日 去程に官軍として京に打むかひける山名時氏西山法華寺に陣とれば上杉か勢は長

太平記に  
谷を後に  
あていさ  
あればい  
薬阿なる  
へし

坂にあかり其外官兵こゝかしこに陣をとりたれば義詮是を見て其勢千騎ばかり神樂岡に  
 陣をうつし山門に引あくへき體も見えたりける園大曆  
 この日左馬頭某園城寺に牒狀を贈りて明日京都の合戦に官軍として軍忠を勵むへきよし  
 を申送る古證  
文

九日 去程に官軍の大將二條大納言教忠卿兄弟按するに教忠卿は二條師基公の男なり去年五月八幡の  
合戦に打死の如く園大曆に載せまた今度合戦の大將に  
も教忠卿を載たりおもふに八幡の合  
戦に討死と云ものは誤りなるへし四條中納言隆俊卿をはしめ和田楠石堂吉良蜂屋原赤松氏範の  
 其勢三千餘騎八幡より打むかひ卯刻はかりに九條の在家に火をかけたり山名時氏同師氏  
 及び伊田波多野か勢五千餘騎の嵯峨仁和寺西七條に火をかけ寄たりけれども向ふ敵なけ  
 れの兩方の勢一所に打寄て錦の御旗を先に立四條河原にひかえたりこゝにまた佐々木氏  
 頼は總領なれども此頃西山に隠居したりしかは舍弟五郎左衛門尉五百人を率して打むか  
 ひける和田楠の者ども此佐々木勢に出合ひて相戦ふかゝる處に山名か執事小林右京亮本  
太平記に左京亮に作る左京亮は  
既に住吉の合戦に討死したり七百餘騎横合にかゝりければ叶はずして佐々木か勢神樂岡に引  
 退く御方是に機をえていよく打すゝみ足利方として扣へたりける土岐か一黨をも百餘  
 人まで打とりなをも進んで戦ひける細川清氏は佐々木土岐か打負たるにもなを氣を屈せ  
 す見えけるか官軍新手を以て攻たりしかの是も終に打まけて四明峰にぞ打退く赤松氏範  
 はいつも打こみのいくさは好まぬ人なりけれのし手勢五六十騎にてよき敵にあはんと相待  
 けるかゝる處に長山遠江守頼基五尺はかりの太刀二振はき刃のわたり八寸はかりなる大



鉞を振かたふけ敵あらはた、一撃と尻目に見なして落行ける氏範是を見て追かけながら言葉をかけ恥しむれの頼基聞も敢す件の鉞を以て兜の鉢を碎けよとうつ處に氏範太刀をひらめて打背け鉞の柄を左の脇に狭てまはしか間引あひけるに蛭巻なしける櫛木の柄中よりつんと引切たれば元の長山に残り鉞の赤松を持ちける長山今日まで我にまさる力あらしとおもひけるか今のありさまに打驚き馬をはせて落行は氏範大ひに牙を嚙てそ立たりけるすへて此た、かひに官軍にうちとるもの土岐か一黨九十七騎近江勢にて三十八騎異本或は五名を知られける人々十騎に作るに土岐七郎伊庭八郎蒲生將監川曲三郎峰屋將監多賀中務平井孫八郎儀俄五郎知秀儀俄五郎異本に五郎三郎に作る安部郷房完通平三を初とし粟飯原下總守疋田能登守も討死しぬ後藤筑後守異本に筑前守に作る貞重は生捕られ日暮に及びて大將義詮の東坂本にを落られける細川清氏一人は是までも元の陣にこらへて我と同志のものあらは今一合戦なすへしと西坂本にぞ扣へける太平記 園大 常集記

十日 細川清氏一人のなを西坂本に陣とりて居たりけるか義詮使をたて、先東坂本に打越へ候へしと仰られしかの此上のとて東坂本にぞ引たりける太平記

高師直か庶子に武藏將監園大曆には師詮とす系圖には播磨守師詮に作るかかれとといふもの片田舎にかくれ居たりけるを阿保肥前守忠實萩野尾張守朝忠等俄に取立て大將となし丹波丹後但馬三ヶ國の勢三千餘騎異本に或は千騎に作り又二千に作るを集め大將義詮に力を合せん爲に頃日西山吉峰に陣とりけるまた赤松妙善(則祐)法師の武家方として西方より攻上りたれともはや義詮も都

を落たりけるのちなれば合戦はなさすしてまはしの西山に扣けるかやかて播磨國に引退

太平記 園大曆

十二日 この曙の事かどよ武藏將監か陣したる吉峰を攻落さんと比目勝はこつたる山名か勢五百餘騎矢一つも射出さず拔連てきつて上る阿保萩野か兵とも餘りに強く攻られて一支へも支へずして谷底にまろひ落て死する者數をまらす久下五郎も久下五郎長重といふも氏京に向ふ條に見えたりこいに五郎といふは別人にやあらんうたれにける武藏將監も二時はかりは落延しか終に叶ふまじと見えければ馬上にて腹搔切り倒に落て死にける萩野か舍弟某は討死なしたれとも阿保忠實萩野朝忠のつゝかなく落延て行衛もまらすと聞えける其中に赤松妙善のこの合戦に手を合せずして播磨路に引たりける太平記 園大曆

十三日 是よりまへ足利義詮は佐々木近江守秀綱を警固に備ふれり東坂本の事心安かるへしこゝにて國々の勢を催さんと議せられける所に吉野の皇居より大慈院法印を大將の爲に山門へ呼寄たりと沙汰しける間坂本を北朝の皇居になさん事は悪かるへしとて同六月十三日義詮北主を守護し奉りて東近江へ落られける行幸にまたかふ人々には三條前關白左大臣三條大納言實繼西園寺大納言實俊裏築地中納言忠季(秀)松殿中納言忠嗣大炊御門中納言家信四條中納言隆持菊亭中納言公直花山院中納言兼定右大弁俊冬右大弁經方左中弁時光勘解由次官行知日野左少弁忠光を始として梶井二品親王去年南山にさらはれ給ひ今年春部に遷れ出給ふ事前に見に至らせ給ふまでまたかひ給へは出家坊官のやからまで附をひたり武士には足利宰



相中將義詮を大将にて細川清氏尾張民部少輔舍弟左京權大夫同左近將監今川駿河守頼貞  
 同兵部大輔助時東福寺僧 支基子 同左近藏人異本に左衛門 入道に作る 土岐大膳大夫頼康異本に舍弟宮内少輔直世をも載す 然れ共直世云人なし直氏に作る  
 へ熊谷備中守直鎮異本には次郎に作り名を直高と作るもあり直鎮は又次郎忠重か 子にして尊氏に初て上州八名郡に居す高力氏の祖なりといふ 同次郎左衛門同右衛  
 門次郎佐々木山内五郎左衛門信詮佐々木秀綱高屋四郎左衛門入道佐々木三郎左衛門尉是  
 等を宗徒として其勢三千餘騎和仁堅田の濱道を駒をはやめて落られける故堀口美濃守貞  
 満の子息掃部介助貞祐四五年かほと其邊に忍ひ居けれの近郷のあふれものともをかた  
 らひ五百餘人眞野の浦に出合て落ゆく敵を打とめんとす佐々木近江守秀綱は三百餘騎に  
 てはるか後陣に打けるか是の山門の故敵時の侍所なれ討とれよと呼はる程に堀口の兵  
 五百餘人東西より引裏み散々にこそ射たりけるこゝに於て佐々木三郎左衛門箕浦次郎左  
 衛門箕浦次郎左衛門和田楠と戦ひす 田に作る今村五郎今川 異本に なんと秀綱か憑切たる  
 者ともみなうたれければ心うき事にや思ひけん高屋四郎左衛門入道とた、二騎馬の鼻  
 を引返し堀口か勢に打て入り戦ふよと見えしか忽ち討たれしかは是を見てはるかに落  
 延たる若黨とも返し合へて討死する者三十七人異本に三十 八人に作る にそ及びける瑤輿はつゝかな  
 く鹽津梅津にいたらせ給へ共郷民ともこゝに一夜とめ奉りなは事に觸てあしかるへし  
 とおもひこゝかしこに鐘を鳴らし関を作りける程に駕輿丁みな逃失て一人もなかりけれ  
 は細川清氏歩行立になり鎧の上に北帝を負まいらせ鹽津の山をそ越られける其のち美濃  
 國まで落延ひ給ひ垂井の宿なる長者か家を皇居となされ義詮以下のものとも四邊の在家

隆持太平  
記によれ  
は北朝の  
人也

に宿をとり警固をそなしたりける太平記 園大曆 東 寺長者補任 常樂記  
 去程に京師には成敗の爲とて吉野の皇居より四條少將をつかひされて陣し給ひ山名父子  
 の一時に義詮を追落し度々の合戦まで勝利有りしかの喜悅の眉をひらきたれとも降参す  
 る勢もなく催促に應ずる者も稀なるとに四條少將成敗を司り給ひしかの山名おのかはか  
 ひらにもなしかたたく出雲伯耆より集り上りし勢ともは在京につかれて漸々に落行しかは  
 以の外無勢になりて異本に千騎にも 足らずといへり 始終いかゝ有へしと仰天の體にそ見えたりける太平記 園大曆  
 十四日 また正平の年號を用ゆへきよし京師に觸られける東寺長者補任十四日未詳ならずと 園大曆 といへとも志はらく一説にたかふ  
 十七日 山名伊豆守時氏勝尾寺に在陣す古證 文  
 當月美濃國の官軍多勢に及ひしかの仁木細川近江よりよせ來りて合戦に及ふ園大曆○按す 此條も當 時傳聞の 説にヤ  
 當月鎮西に於て武家方島津判官か軍功ある事を京師に告ぐ島津氏 古文書  
 七月大 二日 足利尊氏鎌倉を發足するよし京師にきこゆ園大曆○按するに 此 條も傳聞の説にヤ  
 九日 四條中納言隆持卿の隆持卿は他に所見なし隆俊卿なるへしといへとも園大曆に中納 言隆持大納言隆俊と二ヶ所にみゆるによりふはらく別人とせり 足利勢を防  
 ん爲に坂本よりたち越船を揃へて湖上を警固し給ふ園大曆○此條園大曆の説を参考太平記にうたか 廿四日の條にも義詮湖水を渡る云々の文あるとみれば此時義詮江州 在るを以て是を防りん爲に官軍打ちつひ湖上を警固せしならん  
 十一日 四條少將すてに上洛し給ひしのうち吉野の皇居よりの仰として北朝にて即位あり  
 し例後光嚴院の位 即給ふ事也 ともを嚴密に尋給ひしかは京にのこりとまりける執政の人々答へ申む







此比足利直冬總追補使及び諸國守護以下の事承久以前の例の如く執り行ふへきよし吉野の行宮より勅許有りしかり東國西國に於て志をよする者少からず園大曆○細々要記に當月名山から播州に至り四國中國の勢と相催すよしへり父子追討せん爲に義詮みづか

十月大

十一月大 此比鎮西の菊池勢博多に出張して居たりける所に京勢打むかふよしきこえしにより大友も日向國にて足利方となりしかは博多に在陣の事いかゝあるへしとおもひければ志はし肥後の本國にそ引退ける島津氏古文書

おなし比にや足利兵衛佐直冬ハ宮方となりて居たりしかとも本意にあらざるゆへ足利尊氏に降參の事を申贈るといへとも更に承引なかりけれハやむ事なくさらは上洛なさんと企ける島津氏古文書

十二月小 十一日去る六日の夜北朝に於て從三位藤原實益盜賊の爲に疵を蒙り終に卒す公卿補任

十六日 從三位公冬ハ世に博聞の譽ある人なりしか去る正平六年の擧より吉野の行宮につかへまいらせけり此頃いかなる故にや有けん行宮より忍ひて京に歸り元の如く北朝につかへまいらせんと請たりしかとゆるされすして其職をとめられける公卿補任○准后傳に當月十四日伊勢國司北畠顯能卿南伊勢の兵をふたつへて安濃津を襲ひ給ふさいへり

廿七日 嵯峨臨川禪寺は先帝の勅願として夢窓國師の開基なりこの故に東福寺の先例に

まかせ十刹の列に准せらるゝのよし足利尊氏書をあたふ臨川寺古文書○明年春義詮より同しき文書をあたふ事見えたり

當年正三位津守國夏卒す系圖一本正平九年五月十一日國夏卒する由見ゆ新葉集の作者なり

後村上院 河内國錦部郡天野山金剛寺を皇居とす諸史より推考するに去年今年の間行幸と見ゆれ其詳ならず姑く疑を存す

正平九年甲午 北朝文和三年

正月大

二月小 十二日 鎮西に於て宮方蜂起をなすによりさきに島津か一族救を京師に請ふの所猶又尊氏より御教書をあたへて其志を勵ましむ島津氏古文書

三月大 當月山名時氏但馬の國にありて同國美會郡妙樂寺に庄園を寄附し一通の願書を籠む妙樂寺古文書○細々要記にこの春北朝にて仁木左京大夫頼章武家の執事になるまた足利義詮は播磨國にありて軍勢を催促すさいへとも年々の役につかれれば命に應ずるものなくしていつらに時日を送られけるさいへり○島山家譜に去々年より相州河村の城に籠りたる新田義興朝臣同義治朝臣兵糧盡たりしはこゝを立退給ふさいへり

吉野の皇居に於て三首の和歌を講せらる新葉集  
四月小 十七日 北畠入道一品准三宮親房卿行年六十二歳にして大和國吉野山賀名生の皇居に薨し給ふ常樂記 系圖○按するに畠北入道親房卿は南朝柱石の臣といふへしここに當時の博識なること昇進し淳和獎學の別當とされたり後醍醐天皇第二の宮世良親王薨し給ひし時親房卿侍たりしかは追悼に堪ず入道にあまたありしかともみな官位滞なく顯家卿は陸奥の國司たり頼信朝臣は伊勢の國司としてここに忠を盡し奉る親房入道も東國の宮方を催さんか爲常陸國小田城にこもりこゝにて職原抄を書給ふ羈旅の身なれば携へ給ふ所の書なし記臆



にてあるし給ふ所な今令の世まで有職の古典を存するもの親房卿なかりせば何を以て徴せん此人の功といふへし  
 其外神皇正統記東家秘傳元々集古今集注等著述猶多し三光院内府の三内口決にも南山にて昇進ありし官位は後世に於  
 て取用ひ給ふ事なしと雖もかの北島親房卿の南山にて准后にすゝみ給ふ事は今の世にも子細なく用ゆるなりと見え  
 し是は職原抄を撰みて朝廷の古典を明かし職國を歴て幸に禮儀の傳はりしを賞せらるゝ所なるへし親房卿藤原宣房卿源  
 定房公三人當世には三房と號し其博識を賞せり此人温公通鑑を好みてよみ給ひまた朱子の學風をあたひ給ふなごい  
 ふ事世の人の云へる所なりと云はれども朱子新注の日本に渡りし事ははじめて日用工夫集に見え或は尺素往來なごに  
 て明らかしに所見あり思ふに南朝の末に至りて行れしもの温公通鑑は朱注より以前に渡りしものなれば其頃よみける  
 人も有へし又兵家茶話に垂水廣舒の事を記しちか頃二山彌三郎長義といふ儒生其妻は垂水氏にてむかし伊勢の國司に  
 つかへけるよしを云傳ふ又其時分盲人にて古書を好みける佐々木盛信といへるものあり或は玄信にも作り二山か所に  
 來りて長濟草といふ古書ありといひ記憶の儘を語り傍にて筆をとり書あるしけるにいくたび云ても初のことくなりし  
 故二山ふかく信したり其長濟草に云へる趣は垂水河内守廣舒と云ふ人後醍醐天皇の朝に萬里小路藤房卿につかへ朱子  
 新注の四書とよみまた嘉文亂記と云ふ書を著述したるよし見えたり二山か友藤井懶齋もこの長濟草を信し諫諍論と著  
 述したりといふ此外奥州會津の長井貞宗も本朝(日本)通紀寺島良庵か三才圖會等にみな長濟草をせり見えし又  
 或書に垂水廣舒は高野山に隱居せしといひ多氣盤窓には伊勢に居たる趣をもあるせりみな信したし○南朝編年記畧  
 ば大和國宇陀郡福西庄灌頂寺阿彌陀院に於て薨し給ひ同寺に葬る  
 といひ又一本には九月十五日薨し給ふとも見ゆ今常樂記によれり

十日 薩摩國和泉庄の者どもい直冬の御方に屬したりければ島津道鑑の籠りたる山門院  
 木牟禮の城に攻寄せんとす島津道鑑是を聞逆寄にせよとて島津師久同氏久兄弟に命して  
 知色彦三郎入道行覺か尾崎城にれしよせたり島津氏 古文  
 十二日 知色彦三郎入道行覺は島津か一族の攻寄たるを見て晝夜といはず防戦なすとい  
 へども城終に守りかたく城を落去りけるこのち島津か勢い入替りて尾崎城にを籠りけ  
 る上  
 當月薩摩國にて島津の一族尾崎城を攻落し入替りて守りければ直冬方より此城をとり戻  
 せと牛屎左近將監高元か一族一番にすゝみ寄れり澁谷島津を初として武家の者どもはせ

集り合戦雌雄を決せざりける此折から直冬方なりし畠山直顯日向大隅の勢を相催し鎮西  
 の宮の御勢をも請ひ奉りて後詰に向ひける此由を聞武家方大ひにおそれをなし檄を京師  
 につたへて救の勢をを求ける同上○按ずるに此時すでに直冬は宮方となりしなり○細々要記を見るに當月  
 合戦して京方敗軍す十三日また京勢と相た  
 かい十九日楠以下は八幡に發向すといへり

五月大  
 六月小

七月小 七日 河内國葛井寺の境内軍勢甲乙人非分の煩を禁しかつは祈禱の事を仰下され  
 ける葛井寺古文書○細々要記に當月  
 三日楠勢東條に歸陣すといり

十九日 今川刑部大輔直貞須和部四郎五郎等足利直冬の命をうけ出雲國野老原の敵を討  
 つ古證  
 文

八月大(小) 十一日 是よりさき武家方島津上總入道鎮西に於て度々の軍忠ありしかり尊  
 氏より是を賞す島津氏  
 古文書

廿二日 鎮西に於て足利直冬の一黨并に宮方の人々島津を攻んと擬す島津氏  
 古文書

九月大 廿七日北朝にて時の管領細川相模守清氏若狹國に下向して神宮寺に在陣す今當  
 次第 苦州守護次第○細々要記に當月中旬桃井直常足利守經等南山に使をまいらせ降参を  
 請けるにより即ち繪旨を下されければ近日に京都へ發向有へしと用意をなしたりける  
 當月薩摩國球蔴郡に在る所の須惠多良木のともから肥後國の宮方と牒し合せて武家の探  
 題一色少輔太郎と合戦なす此ひまをうかゝひ畠山修理亮直顯聲援をなし同國鹿兒島郡東



福寺の城及び大隅國下大隅城を攻んと擬したりければ島津事の由を京師につくる島津氏古文書

此比安藝國の宮方勢を發し吉川駿河守と相戦ふ吉川家譜

十月大 二日 新待賢門院の御領和泉國大鳥庄を金剛寺に寄附し給ふ蓋簡集水月古鑑

閏十月小 廿八日 北主御禮皇代

此月花山院中納言家賢卿其子弟を從へて吉野の皇居に至り給ふ此家賢卿の故文貞公の御子にて右大將長親公に父にてをればしける系圖

十一月大 十六日 北主大嘗會皇代

十二月大 十二日 小田治久卒すこの治久は興國の頃宮方として東國に旗を擧げたりしか

終に武家に降参したりける所なり系圖結城氏古文書より推考○太平記に小田少將といふは治久の事なるへしこいへとも他に所見なし

十三日 去程に吉野に於て再往の評定有て足利右兵衛佐直冬を大將とし京都を攻へきよし繪旨を成されけれは山名伊豆守時氏同子息右衛門佐師氏五千餘騎の勢をたかへ十二

月十三日伯耆國をうちたり山陰道のことくくたかひて其勢七千餘騎但馬國より

杉原越に播磨へ打て出宰相中將義詮の陣し給ふ斑鳩宿にや寄すへき又仁木頼章か佐野城

にや攻かゝるへきと評定なしたりけるに越中の桃井直常越前の足利高經の許より飛脚同

時に到看したりいそぎ京都に攻上り給へ同時に攻上らんと牒し合せける程に山名父子其

勢七千六百騎異本に六百の字なし丹波路にそかゝりける當國の守護仁木頼章は武家の執事なれは火

出るはかりの合戦あるへしとおもひしに山名か勇銳にやをそれけん矢一つも射すのさの

さと城の麓を通しければ嘲らぬ人こそなかりける太平記

廿四日 足利直冬すてに大江山を打越ゆると聞えしかの十二月廿四日の暮程に尊氏は北

主を供奉して近江國武佐寺に落られけるこの君位につき給ひてよりいまた三年をも過さ

るに二度まで都を落給へは淺間しとおもはぬ人こそなかりける本平記 異本太平記 歴代皇記

今年安藝國に於て坂の城をはしめ處々の城々宮方と成りて武家に背くものあり吉川駿河

守經秋再ひこの城々を取戻したりしかは義詮吉川か軍功を賞美せらる吉川家譜

後村上院 天野山を以て皇居す

正平十年乙未 北朝文和四年

正月大 十六日 足利直冬の此度の大將軍としてすてに入洛すれは足利高經桃井直常の三

千騎餘にて是もまた京に打入たり抑この足利直冬朝臣七八年か程繼母の讒によりてかな

たこはたと漂泊し給ひしに多年の蟄懷一時にひらき大將と仰かれ給へとも行すゑいひか

ゝあるへきと人皆おもひ居たりける其のち東寺に陣を移したもふ抑今度官軍に屬せし人

々山名伊豆守は若狭の所領の事に附て義詮に恨をなし桃井直常の故直義入道に屬して望

を達せさりける憤を散さんとし足利高經のことさら尊氏の一門にて在けれは何の恨かあ

るへきに先年越前國足羽のたゝかひに義貞朝臣をうちとり源氏重代の重寶鬼切鬼丸の太



刀を取たりしよりの遺恨なりと聞ゆ其頃尊氏も此よしを聞つたへ使者を贈りて其二振の太刀は末々の源氏の持つべきものにあらすこなたへ御渡し候へとありけるを高經かたくなれしみてこの二振の太刀の長崎の道場に預置候ひしをかの道場炎上の時に焼て候なりと同寸の太刀二振をとりかへ焼損してを渡されけるこの事有のまゝに聞えしかの尊氏大にいかりて義貞朝臣をうちたりける大(忠)功拔群なりといへともさまたの恩賞をも行われず事に觸て面目なき事とも多かりける是を憤り故直義入道謀叛の時も是に與し今もまた直冬にくみしたる所なりかゝる事ともにて尊氏を叛き官軍の名をかりたる人々なれいかかてか始終の利連あるへきなんと其頃昨木の隠士朴翁といふ者の評したりけるとそ

太平記  
井異本

廿二日 去程に去る十六日桃井直常入洛してよりのちは正平の年號を用ひて北朝の年號の行のれさりけり足利直冬この程まで丹波國和久の邊に居給ひしか今日大勢にて入洛なしたりける是の尊氏江州よりまた入洛すときこえけれの桃井事のよしを告たりけるゆへ又桃井を助ん爲にいそき入洛なし給ふ所なり

東寺長者補  
任 園大曆

この程の事にやありけん大將直冬朝臣をはじめ足利高經桃井直常三千餘騎にて大内の舊跡大極殿の額門の跡に陣し敷皮布て座し給ふ所を見物の童部ともか見奉りて此人の天下の武將に成かたき出立かなと憚所なくを申たりける

天正平  
太平記

東寺長者補任○直冬以下入洛の  
とき東寺に陣をとりける事跡上

廿五日 足利左兵衛佐直冬朝臣今日より東寺の寶相寺に陣をとる

に見ゆ今再び陣  
し給ひし成へし

二月小 四日 去程に尊氏卿の持明院の主上を守護し近江國四十九院に落留り宰相義詮の播磨國斑鳩宮に在庄しぬと聞えけれの土岐頼康佐々木定詮仁木義長三千餘騎

異本に  
六千

四十九院にはせ參る此外四國西國の兵二萬餘騎の斑鳩宮に馳集りまた畠山國清の東八ヶ國の勢をたかへちかき程にはせ參るへしと飛脚度々に及ひしかのほとなく尊氏の勢三萬餘騎になり近江國四十九院をたつて四日に東坂本に着陣す

太平記○太平記には四日に作る  
又東寺長者補任には正月廿二日

足利義詮の其勢七千餘騎また志の、めの比なるに山崎の西神南の北なる峰に陣とり給ふ直冬もはしめの大津松本の邊にて合戦あるへしと議せられけれども山門三井寺みな足利方に志を通するよし聞えしかいた、洛中にて見つくらひ合戦なすへしと一手の右兵衛佐直冬朝臣を大將にて尾張修理太夫高經子息兵部少輔

系圖に高經の子に兵部少輔なく民  
部少輔氏經嫡孫兵部少輔詮經あり

其外宗徒の者五十三人其勢都合六千餘騎東寺を詰の城に構へて七條九條に充満たり一手の山名伊豆守時氏子息右衛門佐師氏を大將にて伊田波多野石原足立河村佐波久世土屋福

異本に  
吉田

依野田首藤異本に首藤大  
八とある藤澤淺沼大庭福間佐治宇多河海老名和泉守吉岡安藝守異本に  
小幡出羽守楯又太郎異本に  
又五郎加地三郎異本に三  
郎左衛門後藤壹岐四郎異本に壹岐と土岐に作  
り又は壹岐守に作る倭久修理亮或は倭文  
に作る長門山城守土師右京亮或は又大  
夫に作る毛利因幡守佐治但馬守異本に  
佐渡鹽見源太以下其勢合て五千餘騎淀鳥羽赤井大渡に引わかれて陣をとる南の手に四條中納言隆俊卿

去年の條園大曆に  
は大地言に作る 法性寺右



衛門督康長朝臣を大將として吉良石堂原蜂屋赤松彈正少弼和田楠真木佐和秋山酒邊異本に山に宇野屋に作る崎山異本に幸山又佐美陶器岩部谷河野邊福塚橋本野原神宮寺を始として官軍すへて三千餘騎八幡の山下に陣をとる山名右衛門佐師氏始の程の待て戦んと議したりけるか神南の敵大勢ならずとすかし見て四條隆俊卿の勢と一になり二の尾よりあけたりけり武家方の陣を三にわけ西の尾崎は赤松律師則祐同師範同直頼同範實同朝範ならひに佐々木道譽手のもの二千餘騎にてこれを堅め或は一千細川頼之同繁氏中國西國の勢二千餘騎にて異本一千南に當りて控ゆれば大將義詮は道譽則祐以下の老武者頭人評定衆奉行入其勢三千餘騎北に當りて陣したり官兵山名右衛門佐を始として出雲伯耆の勢二千餘騎は西の尾崎にかけあかりてまつ関をそ作りけるこゝに播磨國の住人後藤三郎左衛門尉基明といふ強弓の手垂一段高き所にあかりよく控て放ちければこの爲に山名勢すゝみかねてそ見えたりけるかゝる所に佐々木勢の内近江國の住人江見勘解由左衛門尉信直箕浦四郎左衛門馬淵新左衛門三人眞先にすゝみ散々に戦ひて討死なせば後藤三郎左衛門尉基明一宮彈正左衛門有種粟飯原彦五郎異本に粟原に作る海老名新左衛門四人官軍のうちへ切て入り後藤三郎左衛門尉を初として五十餘人討死す南の尾に陣したる細川頼之か勢は山名小林小幡淺沼大庭和田楠和泉河内但馬丹後因幡の兵三千餘騎と相戦ふ繁氏か四國勢の中に秋間兵庫助異本に兄弟三人豊島三郎秋間兵生稻四郎左衛門異本に生稻に作り又生夷火一族十二人異本に十三人一足もひかす討死すつゝひて須々木三郎左衛門異本に薄又父子兄弟六人是も同じくすゝ

みたゝかひて討死す小林民部丞は是を見て得たり賢しと短兵急に拉んと揉に揉て攻けるあいた細川勢山より北へ追落さる山名左衛門佐是に氣をえて眞先に進みかゝれば相まつかふものたれかは少しも擬議すへき我先にと進んたり山名か郎等に因幡國住人福岡三郎左衛門とて大力のものあり七尺三寸の太刀をもつて散々に切て廻れば敵も是に避易し崩れなひきて引たりける山名勢はいよく氣を得喚き叫んで追かけたりこゝに於て京勢小北國播磨守異本に守伊勢左衛門太郎ヒキミ壇藤六魚角太夫房異本に魚住に作る佐々木彈正忠同能登權守新谷入道薦田彈正左衛門河勾彌七ヒカ瓶尻兵庫助粟生田左衛門次郎落合く討れにけり異本太平記に載する所大同小異有り今こゝく辨せず河原兵庫助重行は元暦のむかし平家一谷に籠りし時討死なして名を顯しける河原太郎高直か後なりしかこの度の合戦にうちまけなは討死なして先祖の名にも恥ましとかねて人にも語りける其言葉にたかひす討死をそなしにける赤松肥前權守朝範の一番に破れたるしを身獨の恥と思ひければ山名右衛門佐とさし違へて死なんとおもひければはしたなく行合て右衛門佐か兜をうちたりけるを山名か若黨中に隔て朝範をうちふせとゝめをさしてを捨たりける朝範死業や來らさるけんふしきに息出味方に助られて活ける事こそふしきなれ大將義詮今いわつか百騎はかりにうちなされ道譽則祐とゝもに少しも氣を屈せず敷皮の上に居直りてを居給ひける山名是を見て大によるこひあの四つ目結の旗こそ道譽にて有らん是天の與へたる所の幸なり自餘の敵に目なかけると六千餘騎前に五千と見えたり我先にと勇みすゝ山名勢ちかつく事すてに二町はかりになり



し時赤松則祐帷幕をさつと打擧げ天下の勝負この軍にあらすや何の爲にか命をたしむ大將の御前にて討死なし後記に名をとめよと下知しければ承候とて平塚次郎異本に手塚に作る藤興次近藤大藏丞今村宗五郎異本に金持に作る湯淺新兵衛尉大鹽次郎曾根四郎左衛門七人はらはらと扱て懸る山名方には射手一人もなし足利勢の射手にさんくくに射かけられ山名か先かけ四人異本に十四人に作る目の前に射倒され手を負ふもの三十人異本に十三人に作る跡よりすゝむ所の三百人も異本に二百餘人に作るすゝみかねて見えたる所を平井新左衛門景範櫛橋三郎左衛門尉櫻田左衛門俊秀異本に四郎左衛門に作る大野彈正忠氏永聲をかけて打てかゝる是を見て初め敗軍なしける四國中國の勢ともこゝかしこよりはせ來り忽ち千餘騎に成て打むかふ山名左衛門佐は跡なる勢を麾てなを懸入んと四方を見廻す所に南山の官軍千餘騎にて控し陣何ともなく崩落て引けるにを矢種盡き氣つかれたる山名勢心は猛く思へとも引立られさんくくに成にける山名か勢は本國をたちしより都にて討死と思ひ定めし事なれば波多野美作權守秀基同修理亮氏秀同彦七入道正信同左近將監秀義同大谷十郎同新左衛門同三郎貞秀同七郎左衛門時秀同彌八異本に孫八に作る季秀同小五郎秀俊同彌次郎異本に彌七孫六彌三郎に作る秀長同次郎淺沼三郎同彌六秀長長井田次郎左衛門友泰異本に伊田に作る多賀谷七郎左衛門同小次郎異本に淺沼に作る多賀谷彦三郎同孫次郎藤山兵庫助土屋掃部助福依新兵衛或は福塚石原左衛門三郎竹中入道河村左京亮足立新左衛門久世八郎河村隼人助野田兵庫助火作久七郎歌川左衛門次郎異本に歌津に作澤彈正忠波に作る大庭三郎左衛門首藤次郎左衛門敷美小五郎を始として八十餘人其外一族郎從二百六十三人所々に

て討れける右衛門佐の小林民部丞か跡に踏とまりて防矢射けるをうたせしとみつから戦いれしか道譽か若黨目賀田彈正左衛門馳寄て右衛門佐の内兜へ太刀の鋒先を入るゝと見へしか左の眼を小耳の根まで切付たり右衛門佐太刀を取直し目鹿田か涎懸の間へ入ける太刀に急所を突れて目賀田は其儘うたれけりされ共右衛門佐馬さへ射られ今の討死せんより外なしとすてに自害の體に見えける所へ河村彈正馳來り己か馬にかきのせ福間三郎に馬の口をとらせ此所をは落し其のち我身の敵を防ぎ終に討死を遂にける右衛門佐の淀へ打かへりて此軍にうたれたる者の名字を一々に書るし因幡國岩常谷の道場へ送り亡卒を吊らひなかにも河村彈正忠か首を敵にこひうけ跡ねんころにとふらひけるなさけの程をありかたき太平記異本太平記赤松記等と合考す

五日 昨日神南の合戦に山名打負て本陣へ引返しければ尊氏やかて比叡山を下りて其勢三萬餘騎東山に陣をとり仁木頼章の三千餘騎にて嵐山にとり登るかゝりければ淀鳥羽八幡赤井の邊に至るまでは宮方の陣と成り東山西山崎西岡は京方の陣と成り神社佛閣を毀て搔楯となし山林竹木まで薪木の料に剪盡さる其外夜々放火をなしたれの京中のありさまはあさましき事ともなり太平記

六日 細川相模守清氏千餘騎にて四條大宮へ推寄れば宮方八百餘騎かけ合てたゝかひしかどもはかゝしき事もなしこゝに宮方の陣より桃井直常となのもり清氏にあはんと請ふ清氏は敵に詞をかけられ志はしもこらえぬ男なりければ少も擬議せず馬をはせよせ引組



て直常か首をとるやかて本陣にはせ歸り此首を知れる人に見する所に直常にはあらず越  
 中國住人二宮兵庫助異本に二宮と後乗に作りまた五條三郎左衛門ともあるすといふ者にそわりけるこの二宮本國を出ると  
 き氣比大明神に參詣し此度京都の合戦に仁木細川のうちにめぐりあひ我桃井と名乗て組  
 て勝負なすへしとちかひたりしか言葉に少もたかはさりける其母衣に越中國住人二宮兵  
 庫助暴尸於戰場留名於末代とあるしおきけるはあはれにそ聞えける太平記并に異本園大曆等により合考してあるす  
 八日 近江國に落給ひける北朝の帝山門に臨幸ありて二宮の彼岸所を以て御所となすこ  
 れは近江の守護の武士とも京に攻上りて今は警固の憚なきの間尊氏申沙汰して行幸ある  
 ところなり山の僧をはしめ吉良左兵衛佐滿義警固をなす園大曆  
 十三日 敵御方陣をすゝむといへとも合戦に及す上  
 十五日 また朝ほらけの比なるに東山の勢上京へ打入て兵糧をとるよし風聞しけれこ  
 れを蹴ちらせとて苦桃兵部大輔苦桃異本に桃井に作るまた名は直信とあるす尾張左衛門佐氏頼五百餘騎東寺をうち  
 出つこれを見て細川清氏佐々木黒田判官異本に畠山尾張守結城中務大輔畠山式部大輔等を載す七百餘騎東山より下りて尾  
 張左衛門佐か後陣朝倉遠江守高景か五十騎はかりにて通りけるを追つめんと六條河原よ  
 り京中へかけ入たり朝倉のすこしもさわかす馬の頭をたて直し大勢の中へかけ入れは左  
 衛門佐朝倉うたすなど三百餘騎はかりにて取て返し追つ返しつ七八度まで揉合ける細川  
 毎度追立らるゝと見えけるに此手に南部六郎とて世に勝れたる兵あり踏とまりて戦け  
 る左衛門佐の兵の中にもまた三村首藤左衛門後藤掃部介定基西塔の金乗坊等の勇士五騎

あり互にきと目くはせし南部に組んと相ちかつく金乗坊透間なくかけ寄てむすと組む南  
 部直に金乗坊を取て押へ壓殺さんとや思ひけん築地の腹に推當曳やゝと推けるうち馬  
 より落二人引組て伏けるをのこる四騎の兵かけよせて終に南部を討取りこのうち敵  
 も御方も相引になりて京白河に歸りける其日の晩景に仁木義長土岐頼康三千餘騎にて七  
 條河原に打むかひ桃井直常赤松氏範原蜂屋異本に吉良石堂海東宇部宮と載すか二千餘騎と相たゝかふこの手  
 の合戦は桔梗一揆族の爲に官軍攻たてられ東寺の城も落へく見えたりしを大將直冬高  
 櫓の上より下知し給ひ赤松氏範たゝ一騎返しあはせ散々に切て廻る程にさしも勇ある桔  
 梗一揆族も引退き其日の軍はやみ城も落さりけり太平記 異本太  
 廿八日 東西に陣をとるける敵御方野伏を出し河原に於てあはらく相たゝかひしかさし  
 たる事もなかりける敵の陣中に騎馬を立ましらひて在なから戦いんとせさりしをいふ  
 かしく思ひしかこの日義詮西山の法華山寺の邊に着陣せし故なりと後にそ聞えける園大曆  
 三月大 十二日 去程に仁木細川土岐佐々木武田小笠原等七千餘騎七條西洞院に寄來る未  
 時の始よりいくさ初り一手の丹後但馬の官軍と相戦へは畠山尾張守義源は尾張修理太夫  
 高經と相たゝかふ高經か軍勢強かりしかは義源もあはらく引退くなかにも高經か若黨朝  
 倉遠江守高景嫡子孫三郎氏景の細川畠山か勢にかけ合せて相戦ふ東寺の官軍たゝかひか  
 ち尊氏方の負たりしかは鎌倉より登る勢のうち那須五郎北條家本太平記に那須備前守資藤に作に資藤は安藝守資忠の子なりといふ



尊氏より使を立られて罷向ふへしと仰ける程に二百ばかりの勢を率し打向へり那須はしめ故郷を出る時この度のいくさには討死と思ひさせたまへるうへ老母より曩祖與一資高か屋島にて扇を射ける時の母衣を錦の袋に入れて贈られ今また尊氏より格別の使を立られければ勇みすゝんで取て返し官軍のいさみ競へる真中に懸入り叔父掃部助忠資をはしめ一族郎從三十六騎一足もひかす討死す那須か討死によりて東寺の官軍機にのらは武家また難儀ならんと思ふ所に佐々木六角入道崇永と相模守清氏か勢とひとつになり七條にうち出土岐か新手を相ましへてさんくんに戦ふあひた官軍も機を屈し又東寺に籠り居けるこの合戦に武家の管領仁木頼章は嵐山に陣をとり臆病のふるまひのみなしけるあひた同陣に在ける秋庭肥前守はかゝり引はなれて合戦にのあひけるとを聞えし太平記并に異本園大曆東寺長者補任等による十三日 去程に東寺に籠り居ける官軍たひく武家と相戦ひ勝負は牛角なりしかども山陰道は頼章か勢にふさかれ山陽道は義詮の勢に圍まれ東山北陸の兩道は尊氏の勢に塞かれた、河内路のみわきたりしかは始終叶ましひとまつ引退けとて今夜足利直冬國々の大將と相共に東寺淀鳥羽の陣を引て八幡住吉天王寺境に陣をとり其後みな本國へを歸られける園大曆 太平記 園大曆に同日尊氏東寺に入かはつて昨日合戦の首どもを實檢なす其首級百ばかりに及びけれとも姓名分明ならず園大曆扱も大將足利直冬の八幡の邊にて落集たる勢をみるになを五萬餘騎に及びしかは是に伊

勢伊賀和泉紀伊の勢をあはせ今一合戦も有へしと意見まちくなりしを直冬の許否の凡慮に及ふまし八幡の寶前にして神の告をまたんと申され神樂を奏し神慮をなくさめ給ひける神子敬白の言巧にしてさまくくのへたりけるなかにも「たらちねの親の守りの異本にあり守神なれこの手向をは受るものかはと一首の神詠をくり返し打詠し神はあからせ給ひける諸軍勢是をきこの人を大將になしなは合戦は勝利あるましとれもひつゝおのか國々に馳下りしかは大將もせんかたなくこゝをもなを落去り給ひける頃日東寺の門に何者かまたりけん落首をなして建たりしは「兎に角に取立にける石堂も九重よりして又落にけり「深き海高き山名とたのむなよ昔もさし人どこそきけ「唐橋や鹽の小路の焼しこそ桃井どのは鬼味噌をすれ太平記十九日 足利直冬官軍を引率し八幡宇治の邊にあるよし京に聞えしかは義詮宇治にはせむかふ所に直冬はやこの邊にも居給はす軍勢もなかりしかは歸洛をなす園大曆廿二日 尊氏父子入洛し尊氏の御子左爲定の宿所義詮は宣明の宿所を居所と定められける園大曆この頃の事にかありけん爲定の許より中務卿宗良親王の御許に消息あり頃日は身ををく所なく迷ひ出たるやうにてあすをも知り難し心細く侍るなりとありて「いと、身のをき所なくなりしよりまちこそわふれたのむかけとてとありしかは宗良親王の御返しに「袖ぬらす露なけるめやたのまれしむかしなからの木かけなりせはと仰つかいされしとなん



李花集

廿四日 東寺の官軍退散のち尊氏入かはりたる京方の軍兵狼藉多かりしとなり相模守清氏も寶藏の舍利五粒を所望せられしに鑰をうしなひしかは扉をうちやふりて取出したりとなん後日に清氏修理の料を贈られける園大曆 東寺長者補任○東寺長者補任には當月十三(二)日の事となす

廿八日 北主山門より還幸土御門の御所へ入らせ給ふ園大曆○歷代皇記

四月小 五日 大隅國大隅郡の住人肥後彦太郎種顯同舍弟彦次郎種久は足利尊氏の御方として日向國に在ける所畠山修理亮直顯に一味し大隅國崎山の城に宮方の勢を引入る

島津氏古文書

十日 攝津國山田の庄を毎年結願灌頂の料所として行宮より金剛寺に寄附し給ふ寺院舊文

十二日 島津左衛門尉氏久の元より武家方成しかは大隅國の宮方を攻落さんとして比日軍勢を催促して合戦に及びたりしに氏久か勢ひつよかりしかは宮方打負へく見えたりけるこゝにまた今までも宮方なりける伊集院八郎三郎久秀谷山五郎良香武家に降參し剩今日の合戦に島津か手に屬して軍功を遂る島津氏古文書

廿三日 北方に於て仁木義長と細川清氏爭論出來てすてに合戦有へき體なりしかは尊氏は清氏か亭に行むかひ義詮は義長かもとに行てひたすら無爲を取扱んと相はからる是により人々もあなたこなたに往來して終に無爲になりけるそのおこりは清氏の領三條西洞院なりける敷地を義長わして造作をなしけるより事起りしとかや今度の事一度は和睦

の體なれとも眞實の様にもなかりしかは行すゑいかゝとねもはれける園大曆

廿六日 薩摩國の宮方牛屎左近將監高元市來新左衛門尉氏家東郷藏人道義肥後國葦北庄の宮方及び日向國の宮方泉庄下司諸太郎兵衛尉政保等と一手になり今夜の丑の刻はかり山門院木牟禮等の城に忍ひ入り合戦をとくる島津氏古文書

五月小 廿一日 名和兵庫助春日部新判官高貞伊賀國に於てうたる系圖○櫻雲記にふるに五月廿一日伊賀國に於て官軍春日部判官高貞討死の事見ゆ

此比の事にや有けん日向國に於て足利直冬か御方たりける畠山修理亮直顯は伊東か一族を相かたらし近隣を打かすめしかは武家方なりける土持薩摩守直綱か一族軍勢を催し畠山と合戦に及ぶ島津氏古文書

六月大 朔日 足利尊氏檄を鎮西に飛して直冬もし歸國なさは定て勢を催すへし其已前打むかひて退治なすへきよしを相觸る島津氏古文書

當月足利義詮の嫡子六歳にて卒す常樂記  
七月小 八日 正平七年より北朝の光明院上皇は行宮にとられ居給ひしかいかゝしての皇年代畧記  
廿六日 西華門院京師にて薨したまふ園大曆

是月征東將軍中務卿宗良親王官兵を信濃國に起したまふ諏訪祝某仁科某等是に従ひ奉る園大曆

二條院に後  
國母なり  
御年八十  
七歳



八月小

類從本不  
見同上

九月大 二日 鎮西の宮方三條侍従を大將とし市來太郎左衛門尉鮫島彦次郎入道知覽四郎左當彦次郎入道以下のものとも薩摩國櫛木郡野木の城に在ける武家方島津道鑑入道を攻たりしに同師久馳來りて是を救ひ數日の間合戦をとくる島津氏古文書

同日繪師宅間入道了尊卒す年六十三常樂記

三日 伯耆備前前司時直卒す年四十三法名士恩上

六日 薩摩國野木の城のたゝかひ數日に及びて雙方手負死人數をふらす終には宮方打まけて引退く島津氏古文書

十月大

鎮西に於て宮方にこゝろさすもの多くことに大友式部大輔宇都宮常陸前司千葉二郎以下も宮方に參るへきよし聞えありしかは懷良親王の御方いよいよ勢ひを得たり北朝より鎮西に置れし一色少輔太郎事のよしをきゝ是をうちばらひんか爲に長門國にうち越たり此折から薩摩國に在ける宮方泉庄の名主及び牛屎左近將監在國入道以下大勢をもつて島津師久か居城に攻寄す島津氏古文書

廿二日 去程に牛屎在國以下鎮西の宮方島津師久か城に責寄たりしかは師久みつから打て出て戦ひし所に手疵を蒙り同伯父尾張守資忠も又疵をかうふり酒匂兵衛四郎同左衛門四郎愛甲彌四郎土田五郎阿曾谷三郎左衛門尉堀源五をはじめ武家方多くうたれ手負百餘

人に及へり島津氏古文書

廿九日 左兵衛源光長行宮に於て左衛門尉に任す東南院古文書

十一月小 五日 島津左衛門少尉師久の鎮西に在りて宮方と合戦を遂る所に師久利を失ふによりて尊氏父子の進發を乞ひ此事もし延引に及び、當國を捨て參洛なすへきのよし今日檄を京師に傳ふ島津氏古文書

九日 北主持明院の御子無品尊道親王天台の座主に補せらる天台座主記

十二月大 廿八日 足利尊氏京にありて島津師久か檄文を披見し感狀を與ふといへとも後

詰出陣の事に及びす島津氏古文書

廿九日 行宮に於て源守純左兵衛尉になる多田院古文書

晦日 和田左衛門尉を行宮に於て壽成門院の藏人に補せらる和田氏古文書○按るに壽成門院は行宮に居たまふ女院と見えたり誰人なるぞ

爰にまた故大館左馬助源氏明の次男に伊賀守氏清は武勇の聞えあるものなりしかは父の志をつき吉野の行宮に赴き宮仕へをとなしたりける氏清か母は源の敦光の女ともまた北畠顯能の妹ともいへりはしめ元弘の乱おこりし時父氏明伊勢國に赴き國司をたのみ居たりし折から此妻をむかへて氏清を設く幾ほとなく氏明も四國にてうち死せしかは氏清母とゝもに都に忍ひ居たりしか七歳のとし興國五年にあたりふたゝひ伊勢に歸り今とし氏清十九になるまでこの國に忍ひ居ける所とを關岡家始末



中納言藤原實茂卿異本にいいつそや兩朝御和睦の時よりよしの、行宮につかへ給ひける  
 ほとに北主のかたにての職をとめられける今とし河内國天野にて卒去し給ふ公卿補任  
 陸奥國に於ての北畠顯信卿去る正平六年より國司となりて彼國に居給ひ足利家に属する  
 者とも合戦ありしかともはかくしき事もなかりしにや任を辭し二男守親卿國司と成  
 り給へり其後彼卿の百首歌の中に「みちのくのあたちのま弓とりをめしその世につかぬ  
 名を嘆つ、」北畠系圖相馬家傳新葉集等より推考してあるす○按するに相馬家傳に顯信卿國司たりし事見え櫻雲記  
 信卿は辭職を推考せり中にも櫻雲記には合戦ありし事を載たりよりて今諸書を合考して顯  
 信卿は辭職ありしにや外に所見なし後の識者發明の説をまてり

南山巡狩録卷第九終

南山巡狩録卷第十

大艸公弼 編

後村上院 河内國錦部郡天野山と以て皇居とす

正平十一年丙申

北朝廷文元年

正月大 九日 京師大風園大

足利尾張守高經入道父子三人饗庭命鶴丸を相ともなひ官軍をそむき又尊氏に降參す同上

同じ比行宮に於て梅花久薰といふ題の和歌をよませられし時興喜左大臣「君かため玉し

く庭に植置て千代のかさしと匂ふ梅かえ新葉集○興喜左大臣は即洞院左大臣實世公の御事にして大和國  
 首の歌を詠して皇居に奉ける「君すめは峰にも尾にも家居して深山なから都なりけり一世にいてはひかりそふへき  
 月かけのまた山ふかき雲のうへかなこの詠を以て今年の條にかく是を新葉集に考ふるに君すめはの歌はいかに今年  
 のと成へし世に出はの歌は行脚の僧さ  
 き山の行宮にてよみけるよしといへり

二月大 十七日 興福寺の東金堂回祿す園大曆興福寺年代記

廿八日 北朝文和五年より延元に改元あり園大

三月小 朔日 圓觀上人入寂す年七十六この法勝寺長老圓觀と聞えしは後伏見帝より北主  
 光嚴帝にいたり帝王五世の戒師たりければ五代國師とも申す元弘のはしめ後醍醐天皇の  
 勅をうけ北條を調伏の事にあつかりしとて高時か爲にとらわれ結城入道に預けられ奥州  
 に下向すいく程なく元弘の亂も治りければ北條か亡卒を吊はん爲に後醍醐天皇の勅をう  
 け鎌倉に一寺を建立し寶戒寺となつてこゝに住する事まはらくにして再び京に歸り北帝

神代記皇  
代記王  
代記三月  
に係く



何某は仁木越後守義長なり

の歸依もあつかはける所なり 太平記常樂記鎌倉志合考常樂記には入滅を二月に作る○皇山家譜に當月皇山國清入道し名道誓とあらためしことなり

四月大

五月小

六月小

七月大

八月小

九月

十月小

十一月大

十二月小

十三日 春日の社封戸の事を訴へて神木を金堂にうつす 上  
十八日 南都東大寺八幡宮の神輿入洛すこれハ伊勢の守護何某神人を殺せる事によれり 上  
八月小 十四日 京師大風洪水によりて大政官の廳門倒れ宇治川(橋壞)の水溢る 上  
廿三日 足利義詮北朝に於て從三(一)位に昇る 園大曆 足利家官位記  
當月北朝に於て執柄二條良基連歌苑波集を撰ふ 苑歌波集  
九月 廿三日 青蓮院前座主二品尊園親王北朝に於て薨し給ふ御年五十九この宮は伏見院の御子にして當代の能書なり 諸門跡譜 紹運録○細々要記に和田橋數百騎と奉し天王寺に打し出所々を放火すといふ  
十月小 廿日 宇都宮少將公綱朝臣卒す法名の正昭房(庵)理蓮と號す 系圖○細々要記に此程攝津國に於て官軍威を振ふよし  
十一月大 十一日 京勢は猶神崎に陣す云  
十二月小 十七日 行宮に於て源光範掃部丞に任す 東南院 古文書

紹運録皇年略記に河州の離宮に於て御出家の事は正平七年八月の條にも見ゆ今覺明和尚につきしは出家し給ふといふものはいふかし去る正平六年より宮方となり又ハ直冬方となりて鎮西に威を振ひし皇山治部勢ひ盡たりしにや今年にいたりて武家方に降參せしかはかれか罪をゆるし日向國の守護職をそあたへける 島津氏 古文書

今年京師盜賊多く横行す 園大曆

先年より吉野の山奥にとらはれとなり居給ひける北朝の光嚴院かねて御出家の素志おのしめしければ由良の覺明和尚をまねき給ひて禪門に入給ひける 皇年代畧記皇胤紹運録○案するに光嚴帝御出家の事は正平七年八月の條にも見ゆ今覺明和尚につきしは出家し給ふといふものはいふかし

去る正平六年より宮方となり又ハ直冬方となりて鎮西に威を振ひし皇山治部勢ひ盡たりしにや今年にいたりて武家方に降參せしかはかれか罪をゆるし日向國の守護職をそあたへける 島津氏 古文書

今年の事にや有けん新田義興朝臣武藏國の宮方招き申せしかは彼國にたち越へ給ふ 太平記より推考す○櫻雲記に今年勅して四條隆資卿に左大臣從一位を贈らるこれ八幡にて討死をこけ給ひてに當朝の功臣なる故と云

後村上院 天野山々以て皇居とす

正平十二年丁酉

北朝廷文二年

正月大

二月大

十八日 爰に又持明院の本院 光嚴院 崇光院上皇及び直仁親王はさきに南山に幽居し給ひける所に北方には茨宮 後光嚴院 をたて、御位につかせまいらせしかは今の山中にと、めまいらせたりとも詮なしかつはあまりに御痛はしければとて都に歸し奉るか、りしかは



崇光院上皇は伏見の離宮に入らせ給ひ閑素にてたはしまし〜ける太平記 椿葉記○鳥山家譜

朝臣義治朝臣等越後國に城を構へ給ひ上野下野の兵を  
あつめ鎌倉にうち入り合戦あるへしと議せらるる云

當月權大納言内嗣卿北朝を出奔し行宮に伺候し給ふ公卿補任

三月小 四日 春日の神木洛より歸座園大

八日南都に於て一乘院大乘院の僧徒等合戦に及ふ同

四月大

五月小 九日 河内國錦部郡觀心寺の高祖弘法に僧正を贈らるこれ當住行宮に來りて懇に

望請ふによりてなり河内國觀心寺古文書

六月大 七日 このころ主上觀心寺にもふてさせ給ひける時に當住何かしの僧都日野大僧

正賴意につきて當寺の本願實惠僧都贈位の事を望めるにより即僧正を贈らるゝよし繪旨

をそ下されける同上

七月小 十三日 長門國の宮方大内弘世當國一宮に祈願し凶徒を退治せば宮殿を造營し臨

時の祭禮をなすへき由願文をを籠たりける古證

閏七月小 廿三日 北方に於て廣義門院薨し給ふ常樂記○菊池傳記○肥後國藤崎の神社に藏する文書と  
引て當月十五日肥後國藤崎の神社の假殿暴風によりて

こころしく破損せしは菊池武光修造すこの宮  
殿元弘の兵亂より假殿に鎮座し給ふ所なり云

八月大 當月小野の文觀僧正入寂すこの僧正も圓觀上人と共に北條高時か爲にとらはれと

なり給ふ所にして先帝恩遇の人にてれいしけり常樂記太平記一説に文觀僧正  
は吉野にて入滅せらるる云

六月の條  
こ重復す  
此條宜し  
く削るへ

光明臺院  
は前關白  
師基公な  
り

九月大 廿七日 觀心寺の僧一翁藤を以て法印をのそみ申せしかは其旨にまかせらるゝ

よし日野大僧正賴意繪旨をつとふ河内國觀心寺古文書

十月小 廿五日 一乘院の僧徒南都の禪定院を焼たりしかは其餘煙數百戸に及ふ園大

十一月大 廿二日 太白星哭星を犯す園大

廿五日 熒惑天江第二星を犯す同上

十二月小 三日 太白歳星合す同上

當月行宮に於て御方違のため主上光明臺院入道の許にいらせ給ふこのとき人々題をさく

りて五十首の歌をよませ給ふ新葉集

今年中務卿宗良親王百首歌をよみ給ひ北野社北野社はよしの山にあり所なるへし法樂し給ふ李花集

今年花山院右大將長親卿中納言にて文章博士をかねへきよし宣旨ありける時家に五十首

の歌よみ給ひて「れもひきや筆の林の花の香を我袖にさへうつすへしとは新葉集 新葉集に  
年とかけす今櫻雲

記によりて是年にあるす○櫻雲記に是年洞院公  
泰卿剃髮し給ひ法名を覺元と稱し給ふといへり

後村上院 天野山を以て皇居とす

正平十三年戊戌 北朝廷文三年

正月大 四日 天龍禪寺炎上す歴代皇記



當月行宮に於て和歌の御會を催さる新葉集

島山治部  
津文書  
亮直顯  
作る

二月小 是よりさき筑紫の探題として尊氏より彼國にさし置たりける一色左京大夫直氏少輔次郎範  
氏子 舍弟修理太夫範光は宮方菊池肥前守武光に肥前守肥後守にも作る武光は寂阿の子なり武士家  
督たりし病にておのれ所領武光にあたへし  
所な 打負て京にのほりたりけるかゝりしかは少貳大友島津松浦阿蘇草野星野黒木間注所  
にいたるまでみな宮の御手に屬し今は島山治部大輔國久か日向國六笠の城に籠りたるは  
かりそ武家方にて相さへける太平記并  
に異本

是月北朝に於て故直義入道惠源七回の忌に相當せしかは諸寺に仰せて佛事を行われ持明  
院上皇より從二位を贈らるいにしへより法體にて卒せし人に贈位ありし例をいさかざる  
所なりとを太平  
記

三月大 當月高山近江守蟻我舍弟京都にて殺さる常樂記按するに蟻我高山はしめ宮方にも屬せし  
人なり今京にて殺さるゝものは宮方に與せし故か

四月大 十五日 足利尊氏癰瘡發して其痛に堪す太平  
記

廿八日 後村上院の御母新待賢門院廉子行宮に於て薨し給ふ太平記七々息願文○太平記には十八  
文より推考すれば廿八日はなるへし又或人の吉野山紀行に新待賢門院の御  
降は今吉野郡高原村にあり御陵のたちは自然の山にして上に祠ありと云  
廿九日 尊氏癰瘡の痛に堪す諸醫の湯藥諸寺の祈念も終に其まゐるしなく今夜寅の刻薨せ  
らる此人天下の權をとりてより二十三年兩朝の號をわかち天下の亂をひらきたりし事に  
くむにあまりありと申せども今榮枯地を換たるありさまを見るにいたりては人みなあ  
れを催しける春秋五十四歳常樂記には五十九歳に作る 寺號は長壽寺道號は仁山義公法名は妙義とを聞え

ける太平記常樂記園大曆○塵塚に今年穢澤の池血の色  
となしたりしは尊氏のうせ給ふへき前兆にやと云

尊氏世をさし給ひしかは昵近の武士出家するもの多し土岐頼康は入道して善忠と號し武  
田氏信同國信同信武等も入道す信武は此時一首の歌を詠す「梓弓もとの姿は引かへぬ入  
へき山のかくれかもかな系圖○ある書に信武は和歌の名譽ありける者なりある時禁中に於て歌つかふまつれ  
ぬ契り成りけりといふ  
したりけるといふ

五月小 二日 足利尊氏を衣笠山の麓等持院に葬る其儀ことに嚴重なりしかは見物道に羣  
集す鎖倉は天龍寺の龍山起龜の南禪寺の平田奠茶の建仁寺の無徳奠湯は東福寺の鑑翁下  
炬の等持院の東陵とも行ひけると聞えし太平記南禪  
寺舊記合考

是日梶井二品親王のさきに吉野の幽栖をのかれ出給ひ京にねはしましけるか終に薨し給  
ふ太平記異本太平記に六月  
にづく執事はなるにや

廿四日 京師大地震歴代皇記○櫻雲記に當月五日足利義詮尊氏の悲歎に堪すして和歌を詠す「袖の色かばるこ  
とをかくそへて雨も涙もはれの袖にうきれ  
範朝臣に贈る時しもあれ袖にうきれ

六月大 朔日 日蝕すといへども雲ありて見えす園大曆東  
寺長者補任  
二日 さきに北朝より筑紫の宮方を追伐せんか爲細川顯氏の息男同繁氏伊豫守になり九  
國の大將を奉りて下りたりける程に讃岐國にて兵船を揃へ軍兵を催促すまかる所に繁氏  
俄に狂氣し死たりけるをあやしけれこれの崇徳院の御領を軍勢の兵糧料となしたりける  
祟なりと世の人の申たりけりこのとき繁氏か家人行吉掃部介も暴卒しそのほかにもこと



太平記不  
注日園大  
曆公卿補  
任官位記  
併三日

參考云新  
待賢門院  
七々忌願  
文作二十  
八日蓋本  
文十字上  
脱二字

なる事とも多かりけるゆへいよく不思儀の思ひをそなしたりける太平記諸異本に異同多し今参考本の説に志たかひこいすの

三日 從(正官位記)二位大納言尊氏に從一位左大臣を贈らるゝよし北朝の勅使日野左中弁忠光朝臣足利義詮の館に行むかひ論言を傳へたりければ義詮宣旨をひらきて三度拜戴し涙を押へて「歸るへき道しなれば位山のほるにつけてぬるゝ袖かなと打詠したりしを忠光もあわれと思ひ叡聞に達しければ御感のあまりのち新千載集を撰られける時にこの歌をも入られけるとなん太平記

十八日 國母新待賢門院七々の忌にあたらせ給ひしかは如意輪寺に於て御佛事を修せられ正二位大納言通冬卿に仰せて七々の御願文をつくらせ給ひけり太平記 七々忌願文

新待賢門院かくれさせ給ひてのち御日數のほどの事などあるしをきたるものを程へて遍照光院入道の許より左中將顯氏朝臣の母の許へ返しつかひさるゝとて「その儘に忘れんとすればさらにまた涙もよほす水莖の跡と聞えければ顯氏朝臣の母「うき程のゑもかき

やらて中々に哀やあさき水莖の跡とよみ給ひて答させ給ひけるとかや新葉集〇細々要記に國ありし御琵琶御視等種々のものを南部に御寄附あり金堂に御佛事を修行せられける御導師は實通僧正をばし御秘藏五十八はかりなり是によりて皇居よりも國氏朝臣下向し給ふ十九日國氏朝臣皇居に歸り給ひ廿日南部の實通僧正參内又廿七日いなる故や有けん和田楠數百騎を引率して南部を打過しと云〇菊池傳記に土人の説を引て當月廿一日肥後國にて菊池四郎宗政道間村に七社を建立す云〇豊府紀聞にさきに細川繁氏京師を發して鎮西に向ふと聞えしかは武家に志しよする族多かりける所に繁氏道にすてうせぬるよしと云い本意を失ふ者ありけると見ゆ

七月小 七日 行宮に於て七夕七首の歌を講せらる新葉集

牧園云内  
大臣は北  
島顯信公  
にや

八月大 十九日 洞院左大臣實世公薨し給ふ年五十一此人元弘のはしめより先帝の御旨を

うけ萬事を執し忠功の程たくひすくなかりける所なり公卿補任太平記合考〇細々要記に與喜山といふ所に葬りけると云おもふに與喜といふ所は實世の知行し給ひし地なりと見え新葉集には與喜左大臣ともかけり〇出羽國飽海郡吹浦神社に藏する文書に是年八月晦日出羽國一宮に庄園を寄附し天下興復を祈誓せらるゝ文ありその名に從一位前内大臣と見ゆ當時彼國に居給ふ人を考ふるに所見なし

九月小 四日 大地震國大

十月大 十日 是よりさき東國あつかならず武藏國の者とも宮方にこゝろをよせ大將を一

人申賜はらんと連署を以て越後國に申贈り彼國に居給ふ新田殿の御一族に下向をすゝめたりける義宗義助二人の御方は思慮をめぐらし給ひ許容なかりける所に義興朝臣は大はやりの人なりけるゆへ彼等か申むねにまかせ郎從わつかに百餘人を志たかへ武藏國にそ越られけるかゝりければ足利基氏か執事畠山道誓にうらみある兵とも新田殿に志たかひ今は上野武藏にて勢ひを振られける此よしを道誓聞及ひ討手をさし下さんとすれば國中其はかりことを内通し夜討になさんとすれば義興ことゝもし給ひさししかはいかゝすへきとおもひけるかきと計策を案し出し先年彼朝臣の御手に志たかひ武藏野合戦に出たりける竹澤右京亮異本に右京大夫良衡といふ者をちかつけ新田殿を討奉て基氏の見參に入へきよし語ければ竹澤欲心ふかき者にて是は莫大の恩賞ありなんとおもひ一義にも及けすこの旨を領掌しはかりことをめぐらし討奉るへしとを答ける扱竹澤ハ其翌日より酒宴にふけり宿々より傾城をあつめあるひは傍輩二三十人相招き博奕す此よし忽ち基氏に達しければ



道誓大にいかり竹澤か所帯を没収しけり竹澤是をいかりたる風情にて所領に幽居しけるかそのうち兵衛佐殿の許へ人して申やう親にて候入道は元弘の鎌倉合戦に故義貞朝臣の御手に属し良衛もまた先年武藏野のたゝかひに御方にはせ加りて戦功を勵し候ひぬ志はらく御座所をたに存候はぬにより畠山道誓か手に属し候といへども今また兵衛佐どの御方に参り候はんする程に御ゆるしあれかしと申す義興朝臣もかれか申と棄まことしからすとて志はしは見参にもいらさりけるかくては叶ふましとおもひければ竹澤京へ人を昇せある宮の御所より少將殿と申女房の十六七はかりにて容色たくひなき方を召下しれのれか養女になし兵衛佐どの、許へ出したりける義興朝臣元來好色にふかき人にてねはしければたくひなくと思ひ通はれける此のちにいたり竹澤奉公のころさしあるよし申たりければ兵衛佐殿こゝろとけ給ひて見参し給ひし程に馬鎧などを引まいらせ附従ふ人々にも一献を進め馬物具太刀刀のたくひをれゝに引けるゆへ上下ともに竹澤を無二の者と思ひける九月十三夜の月名にをふ空なりければ酒宴のみきりにうち奉らんと竹澤若黨三百人を伏をさ佐殿をまねき奉るまかる處に少將殿の御局より此ほどあしき夢見候程に夢どきに問ひ候へは七日か間いふかき御慎にて候よしを申して候へはとめまいらすとなり佐殿執事井伊彈正左衛門直秀に流布太平記に井の彈正とし異本には井伊に作る今案圖と合考すこのこといかゝあらんと問給へは凶を聞て出給ふとなしといさめまいらせければ其夜竹澤か許に入らせ給ふへき催は止にけり竹澤ねもふやういかさま是は少將殿よりもれたるなるへし打捨置なは

あしかるへしと少將殿をいさし殺して棄たりける畠山家譜に女房の名を笹田とあるす今の體にては佐殿を討奉んと叶ふましとおもひ畠山か許へ人を遣し一族の江戸遠江守堯寛と下野守能登とを下されなしかれらと心を合すへしと申程に又道誓もはかりとを案し出し江戸叔姪か所領稻毛庄十二郷を闕所になし給人をを附られける江戸大にいかりたる眞似をなし稻毛の庄にはせ下り城郭を構へ五百餘騎にて楯籠り道誓にむかひ一矢射んとを企けるそのうち江戸は竹澤か縁により道誓にむかひかゝるうらみ候の間今より佐殿の御方にまいり畠山をうちとり基氏を追はらひ東國に旗をわけ候ひなん鎌倉に一族二三千も候はんに佐殿を大將とたのみ申間鎌倉に御こしあるへしと申越せしかは竹澤か執し申事なれば疑ふへきにあらすとて武藏上野常陸下總の間に與力なす兵どもに子細を相觸れ正平十三年十月十日の曉忍て鎌倉へと急かれける竹澤江戸兩人は兼て支度なし矢口の渡の船の底を二所鑿拔てのみをさし向の岸には宵より江戸か手の者三百餘騎木の陰にかくれ居また竹澤か兵百五十人は射手をたかへ御後より射留申さんと合圖をなして待たりけり佐殿是をは夢にも志り給はず郎従はぬけゝに鎌倉へつかはし世良田右馬助井伊彈正左衛門大島周防守土肥三郎左衛門市河五郎異本に五郎左衛門由良兵庫助同新左衛門尉太平記三十一新田義宗以下義兵と起す段に由良新左衛門入道信阿と云ものあり同人にや疑へし南瀬口六郎異本に大瀬口に作る松田與市宍道孫七堺壹岐權守進藤孫六左衛門異本に松田以下とせす等纒に十三人異本に十二人打つれ更に他人を雜へす矢口の渡へ漕出すこの渡は四町に餘りて浪嶮しく底深し渡し守川の半にいたる時取はつしたる體にて櫓楫を河に落しいれ二のみを同時にぬ



き二人は川に飛入り是を見て向の岸に三百騎はかりの兵かけ出関をとつと作ればあとよりも関をわはせ愚なる人々かなと欺むき笑ひける去程に川水船の中に涌入て腰中はかりになりける時井伊彈正左衛門佐殿を抱き奉り中にさし上たれば佐殿安からぬ者かな日本一の不道人にたはかられつる事よ七生まで汝等か爲に恨を報すへき者をと大にいかり給ひ腰の刀を抜自害し給へは井伊も同じく自害をとく世良田右馬助と大島周防守二人はさしちかへて川に飛入り由良兵庫助同新左衛門は互に首を搔落す土肥三郎左衛門南瀬口六郎市河五郎三人は川の底をくより向の岸にあかり敵五人をうちとり十三人に手負せ終には其身も討れけり新田系圖には天平十四年十月三日矢口に於て自害し井伊系圖には今年の十月に川越領のう 神明鏡には今年の九月十九日丹波川に於て自害といふ其詳なる事をもちらす丹波川は今にあり 其後江戸竹澤は佐殿を始自害せし人々の首を酒に浸し足利基氏のかねて陣取申されける入間川にいたり此よし披露せしかは道誓大によるこひ佐殿を見知りたる小保少輔次郎義弘松田大藏少輔河村但馬守氏清を呼出し是を見せけるに仔細なき佐殿の御首なりとてこの三四年さきに數日相馴奉りし事ども申出て皆涙をそなかしける案するに相模河村は正平七年武藏野合戦のとき義興義治にたかひまいらせて官軍たり武藏野のいくさ破れしにより松田河村の所領相模川の川上に要害をかまへ兩大將とおの城に招き申せし事太平記等に見えたりそれよりのちも志はしは官軍たりしに接戦終に叶ひかたき基氏に降参し彼手に屬せしものならん かよりければ竹澤江戸か忠功群に越たりしとて恩賞數ヶ所をあたへられける是を見聞しこゝろある者は爪弾をなしてを居たりける竹澤は猶も兵衛佐殿與力の人を尋ねん爲に基氏の陣中にとまり江戸は日を歴てのち新恩の地へとそ下りけるこの兵衛佐義興朝臣と聞えまいらせしは故義貞朝臣の二子なりしかとも庶子なりし

一 朝以下  
一 本短才  
一 庸愚の者  
一 はおもにた  
一 はおらた  
一 水におは  
一 れてうた  
一 れ給ふ

かは越後守義顯自害の、ち嫡子にもたち給はず三男義宗は六歳と申時より昇殿し給ひ佐殿は徒らに上野國にとまり居給ひけるよかるに北畠顯家卿奥州の勢を催し上洛し給ふ時にあたり兵を起して鎌倉を攻落しやかて吉野の内裏へ参り給ひし所に先帝その器用を叡感あり義貞の家をも興すへきものなればとて其時まで徳壽丸と申せしを御前にて元服させ新田左兵衛佐義興とめさる果してその、ちの戦功人の耳目を驚かす事多かりけるに一朝の露と消させ給ひにしかは惜まぬ人こそなかりけれ太平記○系圖并に新井君美か三家考によりて考ふるに今矢口の渡にて新田義興朝臣川に沈み給ひし時世良田右馬助義周が弟義時といひしもの水中をくよりからくしてこゝののれ終に藤澤の道場に入て僧となる遊行は第十二世の時なりこの遊行上人と申は大塔宮の御子にて尊親法親王と申せし方なれば宮方にゆかりもおはしまし終に藤澤に居らしめ其後還俗させ又右馬助義時と名乗らせ給ひけるよし見ゆ私に案するに尊親法親王は大塔宮の御子にあらず龜山院の皇孫常盤井式部卿恒明親王の御子なるを後村上院御猶子になされ二品にすめまいらす世に此宮を南門跡と稱するとは南朝の宮なるゆへなりさきけり又新葉集に此宮の御歌あまた載たれども御名を探勝とあるし尊親と見えすとに正平より弘和の比まで吉野の行宮に居給ふかこく見ゆる時は此時にあたり藤澤に居給ふといふもまた疑なきにあらずおもふに尊親法親王は自ら別人にましましぬへし竹口榮齋は探勝親王は元中の比遁世し給ふよしあるしたれどもいかなる證ありし事にや其説の詳なるをば聞及ぶ事なし

廿三日 去程に江戸遠江守は兵衛佐殿をうしなひまいらせ今度恩賞の地に下向せんとての日の暮程に矢口の渡に下居て渡し船を待居たるかゝる所に佐殿を沈めまいらせし水主迎の爲に出來りて酒さかなを設け河中まで過けるころ雷鳴り出し水上風烈しくなりさかまく浪に打返され水主楫取一人ものこらす水底にを沈みける江戸は兵衛佐殿の怨靈なりとおもひけれ岸に引返し二十餘町上の瀬へ馬をはやめてうちけるに雷の響夥しく馬より落て悶絶す家人にたすけ(家人にたすけ一本三興にのせ二作と)られ漸く宿所に歸りけるか兵



衛佐殿の御事を申出し川水に溺るゝ真似をして死したりけるを不思議なる是のみならず  
畠山か夢にも恐ろしき事多く又矢口の渡に於てあやしき事ともたえさりけるゆへ村老か  
の靈を一社にわかめ奉り新田大明神とを申ける太平記

十一月小 十七日 爰に又細川繁氏の去る比京をたち鎮西に下向しける道にして狂死した  
りしかのこの勢をまちうかけ武家方にまいらんとおもひ居たりし少貳大友のともから  
の力をうしなひて居たりけるこの時畠山治部大輔のいまた宮方に降参せず六笠の城に  
居たりけれの菊池武光まつかれを攻落してこそ後の患を除かめとて其勢五千餘騎を引率  
し日向國へそむかひける太平記○案するに流布太平記に菊池が勢十一月十七日肥後國をたち日向國に發向  
するしなから十一月十日矢合といふものは全く誤れり異本に明年三月合戦に及へる  
趣にあるせるも  
の是なるへし

十二月大 十一日 足利直冬回文を以て諸國に相觸れ明春にいたり關東に下向すへきあひ  
た直冬にこゝろさしあるもの軍勢を率しはせ加へるへしと催促をそなしにける集

十二日 北朝に於て後光嚴院の皇子緒仁親王降誕し給ふこれ後圓融院の御事なり歴代皇記  
十八日 北朝にて勅使日野時光足利義詮の亭にのそみ征夷將軍の宣旨を義詮にさつく紹運録

廿一日 足利義詮参内し今度大將軍の宣旨を蒙り奉りしかしこまりをのふ其行粧の善美  
言語に絶たり此時鎌倉の足利基氏も同じく参内す實徳院殿將軍宣下記○案するに基氏さきに入洛し  
の事他に  
證を得ず

後村上院

天野山を以て行宮とし十一月より同國觀心寺を皇居とす

正平十四年己亥

北朝延文四年

正月小 十日 京師大雷(雪)園大

曆

二月大

三月小 當年は世の中思ひの外去つかにて鎌倉の基氏と宰相義詮とのなかに不和なる事  
も出来ぬへしと風聞しければ畠山入道々誓はかりことを案し入道かはからひにて大和河  
内の間に兵を出し義詮の爲に忠節を抽なは宰相のうたかひも晴へしと基氏に是をすゝめ  
しかは基氏も又その旨にまたかはれけるかゝりけれの道誓公儀をかりて私の權を振らん  
と先諸方の大名と交をなし約を定めて當年かならず大和河内の方に兵を出すへしと治定  
したりけり太平記○案するに實徳院殿將軍宣下記によれば基氏去  
年入洛せりよかる時は太平記の文うたかひあるが如し  
去年の冬兵を發して日向國に打ちかひし菊池武光の嶮難所を凌ぎ終に彼國に着す少貳  
大友も兼ての菊池に屬し今度も催促に應し豊後國までうち出たりけるか内々思ふ所あり  
しかは是を好き時分なりと武光を日向國にやり過し忽ち宮方を叛き大友刑部大輔時宗貞  
入道思子の豊後國高崎城にとり登る是のみならず宇都宮大和前司宏知も兵を起し川を前に  
鑑子なし豊前豊後異本に路をふさぎ肥前刑部大輔異本に肥田民部大輔正員に作るは山を後にし筑後路をふさくかゝり  
けれの菊池前後に敵をうけたゝ籠のなかの鳥の如くに見えにける武光はこの二十餘年か  
間筑紫九國の者とも軍立の様子によく見すかしたり敵をさらに事ともせず三月より三侯



大宮司は  
權時なり

城をとりこめ晝夜十七日を攻たりける此城には畠山治部大輔か子息民部大輔重隆か籠る所なりしに終には攻落し敵をうち取る事三百餘人畠山かむねとたのみし者も多うたれしかは叶いしと奥山へ逃かくる菊池軍は是までとて本國に引返すに路を塞たる大敵更に戦ふ事なければ己か館まで安々とを引入ける扱この、ちは大友を討平くへしとまた軍兵を捕へ豊後へとうち向ふ太宰少貳阿蘇大宮司いまた宮方に屬せしかは彼等をも牒し合せその身は五千餘騎にて豊後國へと向ひける所に太宰少貳俄に心變りして太宰府に旗をあけ阿蘇大宮司も是に與し小國といふ所に九ヶ所の城を構へ兵糧運送の路をたちけるゆへ豊後へも太宰府へも寄すると自由ならずひとまつ本國へ引返す其折から阿蘇か構へたる九ヶ所の要害を一々に攻落して打通る程に阿蘇かたのみ切たる者三百餘人までうちとりける阿蘇は兼ての用意に相違し菊池をうちとむる事は思ひもよらず我身のみ希有にまぬかれてを落行ける太平記

四月大 十五日 冷泉前右大臣公泰公出家をとけ覺元と號すその年五十二或は五十五になり給へり公卿補任 系圖 新集集作者部類には歳五十二とあるは五月十二日出家といへり

公卿補任  
前文四年  
音公泰五  
十五日  
二日出家  
法名覺元

廿八日 中宮薨し給ひしかはやかて宇陀郡等間の山陵に葬し奉るこれ北畠准后親房卿の御女なり園大層推考○南朝編年記畠山園大層及北畠准后傳を引て親房卿の女今上の中宮と成り給ひこの時は新陽明門院顯子と申御さし二十七歳になり給ひけるが薨し給ふゆへ宇陀郡等間の山陵に葬し奉るこれ元の白川の中宮と稱するよしあるせり是を園大層に合考するに北畠親房卿の女は今上の女御となり正平八年具忠卿と密會の事見ゆ此の中宮を廢しまいらせ今年薨し給へるものかあかりといへとも中宮にうづり給ひ及び門院の號をまいらせられし等の事は彼書に見え今姑く南朝編年記畠の説にまつかひてこゝにふるせり

是日北朝に於て御子左大納言爲定新千載和歌集をえらひて是を奏覽す園大層 拾芥抄

五月小

六月大

七月小 去程に鎮西に於ては征西將軍懷良親王を大將となし新田の人々菊池の一類大宰府へ押寄ると聞えしかは少貳陣とつてのち宮の御勢と合戦をなさんと衆議をなし太宰筑

後守頼尙か子息筑後新少貳忠資異本或は賴高姪太宰越後守頼泰朝日但馬將監胤信筑後新左衛門

頼信窪能登太郎泰助肥後刑部大輔泰親異本に肥後と肥田に作る又一本太宰出雲守頼光或は賴盈同上野

權守頼定英名異本に上野權守ののせす 山の井二郎惟則饗場左衛門藏人重高言同左衛門太夫行盛異本に權藤に作り行盛守とのせす 相馬小太郎異本に宗右馬に作 木綿左近將監異本に西河兵庫助は正護に作る 草壁六郎牛

糞刑部大輔異本に二人 松浦黨には佐志將監異本に名 田平左衛門藏人幸貞 千葉右京大夫異本に草

野筑後守異本に筑前守名 子息肥後守異本に高木肥前守 異本に肥後守 後滿に作る 綾部修理亮異本に名 藤木三郎異本に藤に作り名は武繼に作る 高田筑前守異本に山鹿に作る 三原異本に原田宮内 秋月の一族

島津上總入道澁谷播磨守異本に下總守又は六 本間十郎異本に名は忠房 土屋三郎異本に六郎播磨守等に 松田

彈正少弼名は久昭に 河尻肥後入道異本に號 詫間三郎異本に 鹿子木三郎名は貞繼に作る本もあり又

都宮大和司同山作るもあり 田越中守等載す これらを宗徒の侍として都合其勢六萬餘騎杜の渡り異本に熊 を前に當て味坂

庄に陣をとる又宮方に於ては征西將軍宮洞院權大納言元本に名 竹林院三位中將異本に名 春日

中納言異本に名は興文に作る櫻雲記によれば顯時に作るおもふに 花山院四位少將異本に名 土御門少將異本に名

日中將顯時朝臣のち中納言にすいみ鎮西に下り給ひしならん



武信の下の同孫三郎武明赤星 實あるへ 庄美忠盛 益あるは忠 清徳一に 高康に作

異本に左近 坊城三位 異本に名は有氏と見ゆ新葉集作者部 葉室左衛門督名は日野左少辨 異本に左中將又左大中將朝臣 坊城三位 類に藤原有氏見ゆこの人の事にや 左少辨國光高辻三位 或は九條大外記 異本に子息主水正高倉少將重郡(邦イ) 菊亭左兵衛督豊具錦小路皇太后宮匡季花園中將充合正親町出納秀宇坊門中將公求 高倉以下異 北島中納言等 新田の一族には岩松相模守 盛作世良田大膳太夫名は貞國 田中彈正大弼 本には彈正忠義直に作る 桃井右京亮 異本に太夫とある 江田丹後守 異本に丹波に 山名因幡守 名は堀口三郎 實通里見十郎 異本に鳥山次郎利清 異本に補ふ 侍大將には菊池肥後守 武光子息肥後次郎武政姪肥前二郎武信 肥後小次郎に作る武光の子 城越前守 末には重經とあるせり 賀屋兵部大輔 異本に加賀に見參岡三河守 名は高禰庄美濃守 名は忠武隆の子 國分二郎 行喬故伯耆守長年の二男名和伯耆權頭長秋家譜に三男修理亮宇都宮刑部丞 名は紀伊常陸前司 異本より 千葉刑部大輔 異本に式部に作る又少輔とあるし名は白石三河入道 號は鹿島刑部大輔 治部名は宗定に作る 大村彈正少弼 異本に彈正疏に作る 太宰權少貳 名は頼金宇都宮壹岐守 名は清徳大野式部大輔 名は資瀆讚岐守溝口丹後守 異本に丹波牛糞越前權守 名は俊舒波多野三郎 名は幸康河野邊次郎 異本に邊に作り又次郎太稻佐治部大輔 異本に或は少輔に作る 谷山右馬助 異本に左馬に作る 澁谷三河守 名は同修理亮 耶に作る名は清徳稻佐治部大輔 作りに名は光とす 高山兵部大輔 異本あるは少輔に作り又島山島津上總四郎 名は高澄野中郷司 異本に齋所兵庫助 車頭正登 高山民部大輔 民部少輔にも作る名は述宿とす 伊藤攝津守 名は義郷 緋脇播磨守 次郎にも作る名は左運 土持十郎 名は合田筑前守 異本に藍田に作り又呼名 此等を徒宗の兵として其勢八千餘騎 八萬 高良山柳坂水繩山 異本に耳納山また御 三ヶ所にうち 出て陣をとる 太平記此條鎮西に於て宮方武家方の交名とある 十九日 去程に菊池の手勢五千餘騎をすくり出し筑後川を打渡りて少貳か陣に押寄る少

貳いかおもひたりけん戦ひすして三十餘町引退く菊池もつゝひて是を追ひ少貳か陣せし大原 ありは まですゝみたりしに前に難所ありて渡すへき様なかりければ敵御方間ちかくを陣しける菊池はわざと少貳をはつかしめん爲に金銀にて日月を打たる旗の蟬本に一紙の起請文をそ押たりける是は先年太宰少貳古浦城にて 異本に小己に一色宮内大輔か爲にうたれんとせしに菊池大勢にて後詰をなし少貳をすくひたりし時少貳悦ひのあまり今よりのち子孫七代に至るまで菊池の人々にむかひて弓矢をとるましと熊野の牛王のうちに血をまはりたりける起請なれい今なさけなく心變りしたるうたてさを人にもまらせ天にもうつたへん爲にかくはなしたりける事とを聞えし 太平記 八月大 十六日 菊池か陣中に於て夜討になれたる兵三百人はかりをすくり出し小貳か陣に向いんとこの勢は搦手より山を越え水を凌て忍び行宗徒の兵七千餘騎の三手にわかれ 大手よりそ寄たりける去程に敵陣は分内狭き處なるうへ六萬餘騎の兵役所をたて並へて居たりける事なればいつれを敵とも見わけかたく同士軍をなしける所へ夜明る頃菊池件の起請の旗をすゝめ千餘騎にてかけ入り少貳か嫡子太宰新少貳忠資 或は忠頼と相たゝかひ終に新少貳をうち取たりければ朝井但馬將監胤信筑後新左衛門尉窪能登守肥前刑部大輔 ありは肥田に作り 又は肥後に作る 百餘人にて取て返し菊池勢に打てかゝり刺違く討死す是により宮方に於ても菊池孫次郎武明 初に孫三 同越後守 異本備前守にも作り 賀屋兵部大輔見參岡三河守壯美作守 宇都宮刑部丞國分次郎を始とし宗徒の兵八十三人命を失ふ二陣には菊池か甥肥前次郎武



信異本に肥後小次郎に作り又肥前小次郎ともあるす赤星掃部助武貫千餘騎にてうつてかゝれば少貳か次男太宰越後守頼泰太宰出雲守二萬餘騎にて向へあはせ合戦數刻に及ふ處に赤星掃部助を始とし結城右馬頭異本左馬頭に作り名を親昭に作る加藤大夫判官異本名合田筑前入道後守熊谷豊後守三栗谷十郎大宰修理亮松田丹後守異本に同出雲守熊谷民部大輔宇野源七兵衛下田右衛門尉岩野藏人大夫佐々木四郎兵衛宇野以下宗徒の兵三百餘人こゝかして命を殞し太宰方にて越後守頼泰の生捕となり饗場右衛門藏人異本左衛門藏人同左衛門大夫山井三郎相馬小太郎木綿左近將監西川兵庫助草壁六郎長九郎兵衛河崎八郎長以下以下たのみ切たる兵七百餘人の討死し互に陣を引退く三番に宮方より新田菊池の一族一手になり其勢三千餘騎或は三萬敵の中を打破て卿手十文字にかけあらさんと喚て懸る小貳松浦草壁草野異本に山鹿島津澁谷是をみて二萬餘騎を左右にわけさんく射る宮の御勢射たてられぬし引退き給ふこの時宮の三ヶ所まで深手を負せ給ひける此體をみて日野左少辨坊城三位洞院權大納言異本に左衛門督花山院四位少將北山三位中將異本皇北畠源中納言櫻雲記に名は信親に作る又北畠系圖によれば北畠親房の男顯信卿興國元年の頃は陸奥國に下り白川の城に居給ひ正平七年吉野に歸り給ふのち中納言になりて鎮西に下向ありこの合戦に筑前國大原にて討死し給ふといふ系圖に又顯信の子に信親守親統とかけ守親はのち奥州の國司となり給ひ大納言に任す守親の御子と親能と申すこの後裔陸奥國にこゝまり波岡氏と稱す見ゆ新井君美佐久間洞院に贈答せる手簡のなにも陸奥國に北春日大納言北畠系圖櫻雲島氏の後胤あるよし見ゆある時は近世まで彼國に親房卿の後なる人居住せし事明けし北春日大納言北畠系圖櫻雲記等より推考すれば顯時卿ならん土御門少將高辻三位葉室左衛門督等宮を落しまいらせんかため踏とまりて討死す新田の一族三十三人異本に三十二人其勢一千餘騎會釋もなく横合よりかけ入て命を限りとたゝかひ給へは此とき又世良田大膳太夫異本に田中彈正大弼岩松相模守桃井右京亮堀口三

郎江田丹後守異本に丹波守山名播磨守異本に因幡守討れけり菊池肥後守同子息肥後二郎異本に三郎の宮の御手を負いせ給ふのみならず卿相雲客をはしめ新田殿の御一族さへあまたうたれ給ひぬと見たりしかは今は何の爲に命を惜むへしと日頃契約せし兵とも敵陣に懸入り肥後守は十七度までかけ合する程に兜も打落され馬も射倒さるされとも鎧はこの合戦の爲とて札をいかにもえらひたりしかは手疵を少しも負ひすしてなをもすゝんで戦ふたり菊池小鬘を二太刀まで切られたりしを氣を勵して小貳武藤新左衛門を討取ける今日卯の刻に軍初て兵刃を接し酉の刻の下りまで息をもつかす揉合けるされは少貳かたに於ても新少貳を初とし一族共三人たのみ切たる郎從四百餘人あるひは百餘人其外軍勢三千二百二十六人異本に二千餘人迄討れけれい今の叶ひしと太宰府へ引退き寶滿か嶽に引上けり菊池勝軍はまたれとも討死せし者をかそふれば千八百餘人異本八百の字なく又千八十一人に作りあるひは千一人ともあるすに及ひしかはあはらく手負をたすけてこそ合戦はなさめとて肥後國に引退きける太平記

九月大 十月小 八日 爰にまた鎌倉に於ては足利基氏の執事畠山入道道誓東國の軍兵を相催し大和河内に打向ひ宮方を打まつめんと去年の春より寄々軍議をなし今年十月八日にいたり武藏國入間川をたつ相從ふ者どもには舍弟畠山尾張守義深其弟式部大輔義熙武田刑部大輔舍弟信濃守同彈正大弼逸見美濃入道異本に美濃守舍弟刑部少輔同掃部助武田右京亮佐竹刑部大輔河越彈正少弼豊島因幡入道土屋修理亮白鹽入道土屋備前入道長井治部少輔入道結城



中務少輔入道難波掃部助異本に 小田讚岐守千葉介三浦介小山か一族十三人宇都宮芳賀兵衛入道禪可子息伊賀守高貞高根澤備中守異本に 同一族十一人は等を宗徒として坂東の八平氏武藏の七黨紀清兩黨伊豆駿河三河遠江の勢をましえて其勢都合二拾萬七千餘騎發向しまつ入洛をといそきける太平記

廿三日 畠山道誓か勢すてに尾張國までうち登り熱田の宮に陣をとり遅參の勢をそ待居ける園大

十一月大 六日 去程に畠山入道道誓東國の軍兵數十萬人を引率し京着のよし兼て聞えしかは攝關より卿相雲客武家の人々に至るまで貴賤上下機鋪を構へて是を見物す實も聞しにたかはす天下ひさしく武家の世となり富貴人に誘る武家ともこゝを晴と出立ければ其善美目を驚かす事ともなり園大

去程に東國勢多く入洛しやかて行宮によせ來るへきよし其聞えありしかは楠左馬頭正儀和田和泉守正武二人天野殿に參内し奏聞申けるやう畠山入道々誓か東八ヶ國の勢二十萬騎すてに京に着て候勢は定て雲霞の如くにてこそ候いんと申ければ傳奏も色を失ひ主上も御驚あり御簾を半揚させられ天下の安危今にありいかせん仰下されける正儀かしこまりてされは軍のならひ兵の多少にもよるへからすたゝ今度の合戦の決定御方の勝利とこそ料簡仕て候へ其故は天の時地の利人の和三ながら敵はたかひ御方は其利を得候へは假數百萬の兵ありとも恐るゝにたらぬ所にて候と勅答申す一本に事もなげに申ける二作也

さりなから只今の皇居はあまりにあさまなる所にて候へは金剛山の奥觀心寺と申へ御座を遷しまいらせ正儀正武等は和泉河内の勢を相伴ひ千破劔金剛山に引籠り龍山石川の邊にかけ出日々夜々に相戦ひ湯淺山本恩地或は越地又は生地に作れる異本あり 贊河野上山東の兵ともは紀伊國の守護代鹽冶或は鹽谷中務につきて龍門山最初の峰に陣とらせ紀伊川禿或は河口邊に野伏を出し二百人三百人つゝ戦いしめんに短氣なる坂東勢などか退屈せては候へき敵もし引退く程ならば勝に乗て合戦をこそとけ候いんすらんと言葉すゝしく聞えければ主上をはしめまいらせ諸卿もたのもしくおもはれけるさらひやかて觀心寺へ臨幸あるへし無用なる人々はこゝかしこに忍ひ給へとて傳奏の上卿兩三人奉行の職事一兩輩護侍僧二人衛府の官人四五輩のみを守護とさため程なく觀心寺に臨幸ましゝ太平記 けり并異本 去程に主上は天野より觀心寺に行幸し給ひければ行宮伺候の人々高野粉川天川吉野十津川の邊まで身をよするもあり又い京志ら川に歸り敵の中にまきれ居給ふもありあるひい北方に降參の事を望まるゝも多かりけるなかにも源大納言通冬卿の行宮より上洛し仁和寺の邊に住居し給ふよし聞えたり太平記 園大 細々要記に關白教基公はこの時 南部の東南院に入せ給ふといふ

九日 二見左衛門尉本知行を領すへきよし給旨を下さる東南院 古文書

十四日 畠山國清入道々誓京にありておのか亭へ足利義詮を招請す園大

十二月小 十九日 足利義詮大和河内に發向あるにより北朝よりの勅使左中弁忠光義詮の館に行むかひて勅命をつたへ御旗御馬を賜ひる園大



廿日 義詮は大手に發向せんかため今曉東寺に着す相從ふ人々には細川相模守清氏舍弟  
 左近大夫將監家氏同兵部大輔業氏同掃部助師氏同兵部少輔氏春尾張左衛門佐氏賴仁木  
 右京大夫異本左京大夫舍弟彈正少弼賴勝同右馬助滿長一色左京大夫直氏今川上總介範氏子息左  
 馬介氏家異本右馬助舍弟伊豫守他家には土岐大膳太夫入道善忠舍弟美濃入道眞義同出羽入道  
 祐禪同宮内少輔直氏同小宇津美濃守同高山伊賀守同小里兵庫助猿子右京亮厚東駿河守賴  
 繼同蜂屋近江守貞秀同左馬助義行或は右京亮同今峰駿河守光政異本系圖に光忠に作る同舟木兵庫助賴尙同明  
 智下野入道同外山遠江守光明同修理亮賴行同出羽守賴世初名賴忠同刑部少輔賴近同飛驒  
 伊豆入道異本に伊豆守佐々木治部少輔高秀同大原判官同黒田備中守黒田判官大原以下異本佐々木六角判  
 官入道崇永舍弟山内判官河野修理亮一族五人赤松筑前入道世貞舍弟律師則祐姪大夫判官  
 光範舍弟信濃五郎直賴同彦五郎範實異本に兵庫助範賴に作る諏訪信濃守禰津小次郎長尾彈正左衛門朝  
 倉彈正これ等を初として都合其勢七萬餘騎とそあるしける太平記并に異本園大曆合考○園大曆に  
 是る  
 廿三日 義詮畠山河内守同相模守以下を率し和泉國尼ヶ崎にむかふ園大曆東寺長者補任  
 廿四日 搦手の大將畠山太夫入道々誓東八ヶ國の勢二十萬騎辰刻に京をたち八幡の山下  
 眞木葛葉に陣をとる太平記園大曆  
 廿五日 畠山勢八幡より河内路にうち入り四條村に於て初度の合戦あり園大曆  
 廿六日 仁木左京大夫義長か一族其勢五百餘騎南山にむかひて進發す同

去程に大手よりむかひし義詮の尼ヶ崎に打むかひ搦手の勢をまぢ一同に南山へを向いれ  
 ける赤松判官光範の此とき攝津國の守護なりしかは官軍陣する所の半のわか領地なるに  
 より人よりさきに渡邊のはしに其勢五百餘騎にて打寄たりこの川に河舟百餘艘取よせ  
 て三町餘に引並へ柱をゆりたて船を入れて上にかふきを敷ならへたれり人馬打ならひて渡  
 るといふとも危からず和田楠こゝにはせ向ひて手痛き合戦あらむすらんと人みな思ひ居  
 たりし所にいかなる深きはかりことや有けん和田楠の手の者とも一人も出されり大手搦  
 手の勢同日に川をわたりたりまかれとも大將義詮猶いまた川を越へす尼崎に陣し赤松世  
 貞同則祐のこゝかしこに打ちりて斥候の備を全くし仁木義長の三千餘騎にて西宮に相集  
 りわれ一人天下の大功をたてんと思案をなし陣を堅めて居たりけり太平記  
 是年二條關白師基公關白を辭し剃髮のち光明臺院と號し給ふかゝりしかの其子教基公  
 關白に任し給ふ系圖公卿補任新葉集作者部類等と合考す



南山巡狩録卷第十一

大帥公弼 編

後村上院

河内國觀心寺を以て皇居とし  
九月より再び住吉を行宮とす

正平十五年庚子

北朝廷文五年

正月大 去程に此度官軍の軍立の始の程坂東の大勢を聞き城にこもりて戦ひ、取巻れて遂に攻落されすといふ事あるへからすされいた、深山幽谷に走散て敵を勞せんと議したりけるに東國勢の體思ふにも似す左右なく敵陣へ懸入んどもせずこゝに日をへかしこに時をおくりけるさらはこの方も陣を前にとり城をうしろに構へて合戦をいたせと和田楠俄に赤坂の城を拵て三百餘騎にてたて籠る福塚河野邊佐良階異本に佐々良に作り又佐美佐良々に作る當木岩部橋本判官以下の兵の平石の城を構て五百餘騎にてたて籠り真木野酒邊古折野原宇野崎山佐和秋山以下の兵の八尾の城を取繕ふて八百餘騎にて楯籠る此外大和河内宇多宇智兩郡の兵千餘人を龍泉か峰に堀をぬり櫓をかくせて見せ勢になしてを置たりけり太平記

二月小 五日 和泉國近木郷の散在十生長生職二分は和田左衛門藏人助氏本主たるのよし文書を捧て歎し所に別紙を以天下靜謐の時一圓に賜ふへしと仰下されける此よし坊門中將仰を傳へて楠正儀朝臣の添狀をあたふ諸家系圖纂

十三日 去程に京方の勢は後陣の三萬餘騎を異本に二萬に作るまちうけ住吉天王寺に入かへさせ後を安く踏へ先陣の勢二十萬騎金剛山の乾に當りたる津々山に打登り陣をとる敵御方

のあはひ僅に五十餘町を隔たり互に時をまつていまたたゝかひさる所に丹下俣野譽田酒勾水速湯淺太郎貴志の一族五百餘騎弓を弛し兜を脱て降人に出たりしかは津々山に陣したる京勢皆いさみず、み和田楠の人々とてもな程の事か有へきとおもひぬ人こそなかりけれされともいまた騎馬の兵懸合て勝負をする程の事なく互に野伏を出し矢軍に日を送りける元來官兵は物馴れ京方の案内をあらねり京方毎度うち負けるこれを和田楠かねての謀なるに其術に落入たることを淺間しけれ太平記

三月小 十日 畠山入道々誓か許より和田左近か一族藏人に申れくつて京方に降參なさは望にまかすへきよし頻にあさむきければ和田終に武家に降參し祖父和田修理亮入道か跡を知行しける諸家系圖纂

十四日 東大寺の神興歸座東寺長者補任

是日北方にて御子左大納言爲定入道身まかり給ふこの人の宗良親王の外戚のゆかりある人にてことにいまたしかりければ程へてのち信濃より宮古へ便宜にそへ哀傷五十首のうたを詠し爲定の息爲遠の方へのつかひされける爲遠もいと哀におぼえて御返しに一首の歌をねくりまいらせけるとなん「言の葉にかゝるさへこそかなしけれ消てはかなき露のなこりは李花集の細々要記に東國の軍勢すてに兵糧につきたりしは神佛閣に入て亂妨いふばかりなり南の邊もすこいふも狼藉に及びたりしは廿一日東國の軍勢の亂妨を志つめん爲に官軍のうちより軍兵を出してこれを警固

四月大 三日 四條中納言隆俊卿の紀伊國の勢三千餘騎を相志たかへ同國最初か峯に陣を